超絶で最狂の三人が幻想入り

超絶暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超絶で最狂の三人が幻想入り

【Ｎコード】
Ｎ３３９２Ｘ

【作者名】
超絶暇人

【あらすじ】
宇宙人を倒し、早一週間が経った。だが、運命は彼等に安らぎを許さない。訳のわからない世界に連れて来られ、困惑する三人…優、茜、アントニオン。彼等は無事に帰れるのか？その前に生きて居られるか？スーパーバトルアクションコメディ　（パロディ有り）超絶最狂学園の続編です。ゆっくり視ていってね！東方のキャラが崩壊してるかもです。気をつけて下さい。
・この小説は、超絶最狂学園の続編です。
下手くそな文章が大丈夫な方は御覧下さい…

第０話　事の始まり。（前書き）

こんにちは。初めまして。
今回続編となる、東方の幻想入りを入れた、
超絶で最狂の三人が幻想入りを見ていただきありがとうございます。
訳ワカメな方は超絶最狂学園を見ていただく事をオススメします。

第0話　事の始まり。

異世界にて

？「・・・」

？「お嬢様、どうしましたか？」

？　（何か壮絶な運命を感じるわ…）

？「じゃあ、少し出かけるから、結界の方、頼んだわ。」

？「はい…」

？「なぁ、何か今日の天気、おかしくないか？」

？「さぁ、私にはいつも通りにしか感じ無いけど…何がどうしたの？」

？「私には不思議でしょうがないんだぜ。」

？「そんなに言うなら原因を探しに行けば良いじゃない。」

？「面倒だから行かないぜ！」

？「何よそれ？」

そして…

スーー

？「さてと、今回は…ちょうど良いのがいたわ。〇〇学園ねぇ…しかも三人…ウフフ…面白くなりそうだわ。」

～第1話に続く～

第０話　事の始まり。（後書き）

次回は第１話です。
東方を知っている方はいろいろ教えていただけると大変嬉しいです。

第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り（前書き）

どうも！こんにちは。
そして初めまして。
今回続編となる幻想入りを入れた小説です。
ではどうぞ。

第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り

○○学園2年A組の教室にて

～優視点～

あの日から1週間が経った。学園は平穏な日々が続いた。だけど、またつまらない…いや、そんな事は良い。俺は今が一番良いと思う。

生徒「起立、礼、さよなら～！」

優「なあ、茜、アントニオン、たまには一緒に帰ろうぜ。」

ちなみに俺は

瀧沢　優（たきざわ　ゆう）
年齢：１４歳
身長：１６８ｃｍ

茜「いいけど、どうしたの？急に。」

後、こいつは

大島　茜（おおしま　あかね）
年齢：１４歳
身長：１６０ｃｍ

優「気分だよ、気分。」

ア「たまには一緒に帰るのも良いですよネ。」

で、こいつは

アントニオン・ライブラリー
年齢：１４歳
身長：１８０ｃｍ

今俺達は帰り道を歩いている。

優「俺、こっちだから。」

茜「うん、じゃあね。」

ア「また明日でス。」

俺達はそれぞれの帰り道に別れた。

トコ　トコ　トコ

何か変な感じがする。誰かに見られている。

優「・・・」

後ろを振り向くが誰も居ない、と
突然俺の前に気配がする。
俺は前を向く。

優「？」

？「あら？ばれちゃった。」

俺の目の前には　何処の国の格好なのかわからない服を着た金髪の
日傘をさした女性がいた。
その女性は宙に浮いているが、よく見てみると、何か変な物の中に
入っている。

優「あんたは誰だ？」

？「ウフフ…私の名前は八雲　紫よ　（やくも　ゆかり）　。」

優「その変な物は何だよ。」

紫「これは私のスキマよ。」

優「スキマ？」

紫「私はスキマ妖怪、八雲　紫」

優「何が目的だ？」

紫「あなたを私たちの世界に招待する事。」

紫とか言う妖怪？はそう言うと、ニヤリと笑う。
瞬間…俺の視界は気色悪い目玉に囲まれた。
意識がどんどん…遠ざか…る…

～outside～

スー

ドサ！

優「…く…そ…」

優は気がついた、が、全く知らない場所にいた。
よく見渡すと茜とアントニオンがいる。

優「あいつらも…」

優は茜とアントニオンに近づき、声をかけた。

優「おい！大丈夫か？」

茜「…優？」

ア「優さん？」

茜「優？どうしてここに？て言うかここどこ？」

優「わかりゃ、苦労はしねぇよ…」

ア「優さん、茜さん、現在地が僕の脳内地図に載ってません、恐らく、異世界かト…」

サーー

？「誰？」

優達は声の方向を向くとそこには紅と白の和服を着た少女が障子を開けながら出て来た。

優「俺達、別に怪しい者じゃ…」

？「…でしょうね…まあ、一応歓迎しとこうかしら？」

茜「それより、ここが何処なのか教えて。」

？「わかった、まずは自己紹介。私は博麗　霊夢　（はくれい

れいむ）　よ。」

霊夢がそう言うと、優達も立ち上がり、自己紹介をした。

優「俺の名前は瀧沢　優だ。」

茜「私は大島　茜。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

霊「それじゃあ、教えるわ…ここは幻想郷、あなた達の世界には存在しない妖怪や天狗などが居るわ。」

優「妖怪？童話でしか聞いた事が無いぞ？」

霊「ここは常識とは逆の幻想の世界。だからここの世界の人物は、大抵は能力を持っているわ。」

優「能力？」

霊「あなた達にも能力があるか調べても良いけど…どうする？」

優「俺は大丈夫だ。」

茜「私も良いよ。」

ア「僕も、問題無いでス。」

霊「じゃあ…「霊～夢～！！」何よもう…」

声の方向を向くと、かなりのスピードで飛んでくる黒と白のドレスの少女の姿が…

？「よっと！ん？霊夢、こいつら一体何者だ？」

霊「外来人よ、しかも三人。」

？「へ～、私は魔理沙、霧雨　魔理沙　（きりさめ　まりさ）って言うんだ。よろしくだぜ！」

優「ああ、よろしくな、魔理沙。俺は瀧沢　優だ。」

茜「大島　茜だよ。」

ア「アントニオン・ライブラリーでス。」

霊「じゃあ…裏に行きましょう。」

魔「私もついてくぜ！」

優達は霊夢の後ついていった。

霊「ここで良いわ。じゃあ始めるわよ。」

優「ああ…」

茜「・・・」

ア「・・・」

霊夢は目を閉じた。すると…

霊「わかった。」

優「早いな…」

霊「まずは優。あなたは
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）よ。」

優「何だそれ？」

霊「毒、病、能力による効果や力を全て無くす能力よ。ちなみに刃物も効かないわ。」

優「程度の問題じゃあねぇよ…」

霊「後一つはかなり特殊な能力よ。」

優「何の能力だ？」

霊「　（全ての技を自分の物にする程度の能力）
これは相手の技や能力を見ただけで自分の物にできる能力よ。」

優「は～…」

霊「ちなみにこの世界の遊びで弾幕ごっこ　てのがあるわ。技とな

るスペルカードを使って相手を倒す。そのスペルカードの技を全て避けるか、スペルカードを使って反撃するかで良いわ。持っているスペルカード全てを使い切ったり、倒されたりしたら負け。」

優「なんとなくわかった。」

魔「じゃあ私と弾幕ごっこしようぜ！」

優「は？」

魔理沙はそう言うと中に浮いた。

優「待てよ俺は飛べな…「だＺＥ！」うわあああああ？」

いきなり弾幕を飛ばしてきた魔理沙。

優は少しイラッときた。

優「飛んでやろうじゃねぇか…」

優は気を身体全体から発し、飛ぶイメージを浮かべる。すると…

フワッ

優「よし！やった？」

魔「…早…」

霊「じゃあ次は茜。あなたは

（四聖獣を操る程度の能力）よ。」

茜「四聖獣を？」

霊「あなたは今までも操ってた見たいね。主に、会話できたり、憑依させたりだけど、実体化　できる事が一番の利点ね。」

茜「て事は、一緒に闘えるって事？」

霊「そう。で最後に、アントニオン？だっけ？あなたは（物体を誘導する程度の能力）　よ。」

ア「物体を…ですカ？」

霊「自分以外、弾幕以外の何でも思い通りにできるわ。さぁ、これで終わり。」

ドギャーン！

魔「キャッ！」

優「勝負あったな。」

霊夢の説明が終わると同時に、優と魔理沙の弾幕ごっこも終了した。

魔「次は負けないからな！」

優「何言ってんだ？お前は勝てねぇよ。」

魔「へ？」

優「俺はあれで一番弱い力だから。」

魔「ええ？本気じゃ無かったの…てっきり、マジなのかと…」

優「しかし、あれだ。何だか俺の力がさらに上がった感じが…」

茜「確かに、幻想郷に来てから何か、力が湧いてきた。」

ア「僕もでス。」

霊「で、どうするの？もう日が暮れるわよ。」

優「じゃあ、俺達は宿を捜そうぜ。」

茜「うん。」

ア「はイ。」

霊「人里はここから森を抜けたとこにあるわ。」

優「ありがとう。そう言えば、ここ何て言うとこ何だ？」

霊「ここは博麗神社、私はこの神社の巫女。後、お賽銭箱はここだ

から。」

優「今度来たら入れとくよ。」

優、茜、アントニオンは、今晩の宿を探しに森の中に入って行った。

魔「私も帰るぜ。」

魔理沙は箒にまたがり、飛んで行った。

霊「居るんでしょ、紫。」

紫「ウフフ…」

霊「あんたまた連れて来たわね？」

紫「良いじゃない、これから面白くなるんだから。」

霊「彼等の事も考えずに何故？」

紫「ウフフ…」

スーー

霊「あっ！紫！まちな……ふぅ…何だか嫌な予感がする…」

〜続く〜

第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り（後書き）

次回は紅魔郷編からです。
優たちが異変解決。
以上です、ではまた次回。

第2話　紅い霧の異変　その1（前書き）

今回は紅魔郷編の前半です。
常識破りの優達が異変解決です。
霊夢が解決しないのは見逃してください。
以上です。
ではどうぞ。

第2話　紅い霧の異変　その1

人里にて

優「ふぅ、人が居るって落ち着くな。」

茜「うんうん、落ち着く　落ち着く。」

ア「これで帰る事が出来たら良いのですガ…」

優「…まあ、そうだけど…折角来たんだ、少し楽しもうぜ！」

茜「そうだよ！アントニー！」

ア「…ハイ」

俺達は人里で一晩過ごす事にした。

～翌日～

人里は謎の紅い霧に覆われていた。

優「何だ？この霧は…」

茜「何か寒い。」

ア「霧に覆われたため、太陽の光が当たらなくなってまス。」

優「原因は何だ？」

茜「捜しに行く？犯人を。」

優「よし！行くか！」

と言うわけで、俺らは謎の霧の原因を探りに行く事にした。

～森の中～

優「視界が悪いな。」

茜「見えなくなるより良いよ。」

その時、後ろに気配を感じた。

優「誰だよ?用があんなら俺らの前に来いよ。」

?「ねぇ?あなたは…食べても良い人間?」

その言葉と同時に、１３０ｃｍ位の小さい少女が浮きながら近づいて来た。

茜「妖怪?」

優「お前は何て名前だ?」

?「私はルーミアって言うの。ねぇ、あなた達は食べても良い人間?」

優「少なくとも良い訳無いんだが…」

ル「でもお腹がペコペコだから食べる。」

優「ありゃ…」

ル「いただきま～す！」

ルーミアはそう言うと大口を開けて飛んでくる。

茜「危ない！」

「次元斬！」

茜は次元斬でルーミアを避けようとする。

スパッ

だが、切れたのはルーミアの頭に着いてたリボンだった。だが…

ル「・・・」

茜「あれ?当たっちゃったかな…」

ルーミアは宙に浮いたまま飛ぶのをやめる。すると…

ル「ウフフフ…アハハハ…」

優・茜・ア「？」

ル「封印を解いてくれてありがとう。改めてあなた達を食べさせてもらうわ。」

優「そう簡単に食われ…うっ？」

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

優は突然苦しみ出した。ルーミアは苦しむ優に向かって飛んだ。

茜「させない！」

ル「無駄よ。」

ルーミアは闇の世界を拡げた。

ル「いただきま～す。」

ルーミアが優に飛び付こうとした、その時…

優「！」

グチャッ

酷くエグい音が鳴り響く。

ル「？」

ルーミアは思いっ切り飛んでいき、木を何本か折って止まった。
優はルーミアに近づく。あの時、ルーミアを吹っ飛ばしたのは優だった。

優「・・・」

優はルーミアに近づく、金色の眼を光らせながら…

ル「…い…いや…」

ルーミアは凄まじい恐怖を感じた。

優「大丈夫か？」

優はそう言う。ルーミアの鼻は潰れていた。あの瞬間に優は拳をルーミアの顔面に当てたからだ。

ル「あ…あぁ…」

ルーミアは途轍もない痛みで、声を出すのがやっとの状態だった。
優は手をルーミアに向け、優しい緑色の波動を放つ。すると…

ル「？」

ルーミアの鼻はたちまち治り、傷も全て治った。

優「恵みの波動」
「お前みたいな重傷を負った奴の為にとって置いたんだ。」

ル「何で?私は妖怪よ?傷が治ったらあなた達をまた襲うかもしれないのよ?」

優「みんな生きているんだ。どんなに恐い奴でも、殺して良い事は無いんだよ。」

優は金色の眼を黒目に戻し、茜とアントニオンのとこに戻る。

優「今度は相手をちゃんと見てからやれ!」

茜「優…今の…」

優「力の覚醒って奴かな?これの名前を(超化)にする。」

ア「いきなり名前ですカ。」

優「こう言うのは早い段階で名前を決めておいたほうが良いんだよ。
そんな事より、早く行こうぜ。」

優達はまた歩き出した。

優「つか、急に寒くなって来たな。」

茜「ハックチュン！」

ア「ここだけ妙に温度が低いでス。」

と、そこに…

？「来たわね…くらえ！」

優「ん？」

カキーーン

優「わ？」

茜「えっ？」

ア「ワオ？」

優達は突然飛んで来た物体をかわした。

ア「氷が、氷が飛んで来ましタ！」

飛んで来た物体は、何とかなり大きい氷だった。

？「あたいったら天才ね？」

優達は声の方向を見てみると、背中に羽のようなものがある幼い少女が木の上に居た。

優「おい？何だよいきなり！」

？「あたいの縄張りに入ったからよ！」

茜「て言うか、自分で天才って言ったらお終いだし。ねぇ、あなた名前は？」

？「あたいはチルノ！氷の妖精よ！」

チルノは胸を張りながら堂々と言った。

ア「あの、どうしたら見逃してくれますカ？」

チ「最強のあたいと勝負よ！」

ア「わかりましタ。」

優「アントニー！気をつけろよ！」

アントニオンはチルノのとこへ行く。

ア「いつでも良いですヨ。」

チ「じゃあ、あたいから！」
「氷符　アイシクルフォール！」

チルノはスペルカードを発動。
大量の氷が放たれる。が…

ア「・・・」

チ「あれ？何で？」

チルノの放った氷は全てあらぬ方向に飛んで行った。

チ「ま、まだよ！」
「凍符　パーフェクトフリーズ？」

チルノは大量の氷の弾幕を全体に放つ。

ア「オット！」

アントニオンは大量の氷の弾幕を上手くかわす。すると…

カチーン

氷の弾幕は動きを止めた。

ア「止まっただけですか？」

チ「くらえ！」

チルノはさらに弾幕を放つ。だが…

ア「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンもスペルカードを発動。
放たれる小型ミサイルは弾幕を全て相殺した。

チ「何今の？」

ア「僕の勝ちでス。」
「眼撃　アイレーザー！」

アントニオンはチルノ目掛けレーザーを撃った。

チュドーン！

チ「？～」

チルノは勢い良く飛んで行った。

ア「…少し、やり過ぎましタ。」

優「…まあ、良しとする。」

茜「ねぇ、あれ…」

茜は指を指す。優とアントニオンは指の指した方向を見てみると、
そこには…

優「何だ？あのお城は？」

茜「あそこが霧の原因だよ。」

ア「霧の濃度が高いでス。原因で間違いありませン。」

紅い霧を出していたのは、紅い屋敷だった。
いかにも何か出そうな巨大な屋敷に…

優「じゃあ、行きますか…」

〜続く〜

第2話　紅い霧の異変　その1（後書き）

次回は中編です。
ちなみに優の力は覚醒しきってません。
幻想郷に来てから強くなっているのわ確かですが、まだ全力は一切出してません。
後、優の力の基準は

最弱　　弱い妖怪を一撃

ちょっと　　中級妖怪を一撃

少し　　鬼を倒せる

本気　　誰にも負けない

今はこれくらいです。
ではまた次回。

第3話　紅い霧の異変　その2（前書き）

ようやく紅魔館に到着。
闘いはかなり凄い事に…
と、いくかは分かりませんが、楽しんで行って下さい。
それではどうぞ。

第3話　紅い霧の異変　その2

謎の紅い館にて

優「デカいな…」

茜「何か近くで見ると、さらに大きく見えるね…」

ア「…ノーコメント。」

？「誰ですか？」

館に驚いていると、誰かの声が…

？「人間が一体何の用ですか？」

優「いや…この霧のもとを探しに来たんですけど…あんたここの門番だろ。」

？「えぇ、そうですが、何か？」

優「そこを通してくれないか？」

？「いやだと言ったら…」

優「力づくで通るだけだ。」

？「私に勝てるとでも？」

優「少なくとも、めんどくせぇ拳法より俺は強い。」

？「な？」

優は挑発する感じに喋った。

優「俺の名前は瀧沢　優、あんたは？」

？「私の名前は紅　美鈴（ほん　めいりん）。」

優「おお、着ている服と一緒でチャイニーズだな。」

紅「さぁ…行きますよ？」

ダダッ

美鈴は先制攻撃を仕掛けようとする。

優「・・・」

サッ

紅「？」

優「足がガラ空きだぞ。」

優は美鈴の足に足払いをした。

紅「し…しまった？」

美鈴は足払いで宙を舞った。

普通はここで追い討ちをかけるが、優は何もしない。

スタ

美鈴は浮いた状態から上手く体制を直し、着地した。

紅「さっきは油断しました。ですがこれならどうですか？」

「彩符　彩光乱舞！」

ババババッ

美鈴の周りから虹色に輝く弾幕が放たれた。

優「よっと。」

優は上に飛んで避ける、が…

紅「掛かりましたね？」
「気符　地龍天龍脚！」

美鈴は飛び上がり気を帯びた蹴りを優に当てる。

ズガッ！！！

優「ぐほっ！」

美鈴の蹴りは優の腹に見事に命中。

紅「終わりです？」
「華符　破山砲！！！」

ブォーン？

美鈴は手から強力な気砲を放つ。
と、その時…

優「それで本気かよ……はあ？」

バーーン？

優は仰向け状態から素早く立て直し、波動を放つ。

バーン？

波動と破山砲がぶつかり、爆発し、爆風が美鈴と優にぶつかる。

紅「うくく…」

優「終わりはお前だ…」
「瞬烈　刹那の百烈拳。」

優はスペルカードを発動。の瞬間…

バシ！

という音がなり、優は美鈴の前から後ろにいた。

紅「な、何を？」

優「自分の体を見てみろ。」

紅「？…」

美鈴は自分の体を見た瞬間、頭の中が真っ白になった。
それは、美鈴の体に深い拳の跡がたくさんあったからだ。その時…

ズガガガガガ！！！

その音と共に美鈴の体は揺れる。
百発の拳が美鈴を攻撃する。

紅「あ…が…」

美鈴は百発の拳を一気に浴びた為、口から血を吐き、意識が飛ぶ。

ドサ

美鈴は地面に落ちた。

優「恵みの波動。」

優は美鈴に近づき、優しい波動を放つ。

紅「う…ん…」

美鈴の傷が治り、意識が戻る。

優「大丈夫か?」

紅「…はい。」

優「じゃあ、ここ、通るからな。」

紅「はい。」

優「行こうぜ、茜、アントニオン。」

優達は門を開け、紅魔館へ入った。

ギーー

バタン

優「中の方が広いなあ…」

茜「外もなかなかだけど…」

ア「一度で二度ビックリでス。」

そんな話をしている時…

ストトン

優「？」

茜「？」

ア「？」

優達の足元にナイフが刺さっていた。

？「あなた達は誰ですか？紅白や黒白とは違うみたいだけど。」

優「俺達は霧の原因を探しに来たんだ。」

？「じゃあ、侵入者は排除しなければいけないわね。」

優「本気で頼むぜ、門番何かすぐ終わっちまったからな。」

？「外来人にしては相当の実力をお持ちね。
私は　十六夜　咲夜　（いざよい　さくや）　よ、
あなたは私に勝てるかしら？」

咲夜と言うメイドはナイフを手に持ち、構える。そして…

シュッ

咲夜はナイフを優に投げる。

優「うわ？」

優はナイフをかわす。が…

咲「じゃあ…」

「奇術　エターナルミーク！」

シュシュシュッ

咲夜は大量のナイフを優に投げる。

優「どっからナイフ出してんだよ？」

優は驚くもナイフを全て避ける。
その時…

シューーン

優「ん？」

優の周りは灰色で茜とアントニオンは動かない。

優「どっかのマンガで見た、時を止める奴か？」

優は疑問を抱いたが、すぐにやめる。なぜなら…

優「よし、これでこの能力は俺の物だ。」

シューーン

優が能力を見終わったと同時に周りの色が戻り、時が動き出した。
よく見ると、床に刺さっていたナイフが無い。咲夜が拾っていたようだ。

咲「なかなかやるわね、でもこれならどうかしら？」
「幻符　殺人ドール！」

咲夜の後ろにナイフが集まる。そして…

ババババッ

ナイフが一気に優に向かう。

優「危ねぇ！」

優はかろうじて避ける。

優「俺は避けるだけは嫌いでな。」

バッ

優は波動拳を放つ。

咲「こんなもの…」

咲夜が波動拳を避けた、その時…

優「これはかわせるか！」

「波動　波動百烈拳！」

バババババッ

優は百発の波動拳を放つ。

咲「無駄。」

シューーン

再び時が止まる。が…

優「これでも無駄って言えるか?」

咲「な、なぜ?なぜ動ける?」

優「俺の能力は
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）　だ。お前の能力の　（時を操る程度の能力）　は効かない。」

咲「くそ…」

優「後一つは
（全ての技を自分の物にする程度の能力）
お前の能力や技はいただいた。」

咲「？」

優「自分の能力を受けてみろ！」
「白世　クイックシルバー！」

バシューーン

世界はカメラで言う　ネガ　や　ポジ　の世界に変わった。咲夜は動かなくなった。

優「アタタタタタ？」

ドガガガガ！

咲夜に容赦無くケン○ロウ並みの百烈拳を叩き込む。そして…

優「そして時は動き出す…」

バシューーン

咲「グハッ？」

咲夜は吹っ飛んで壁に背中をぶつける。

優「やれやれだぜ。」
「恵みの波動。」

優は倒れている咲夜に優しい波動を放つ。

咲「なぜ私を治したの？」

優「お前、俺が殺すと思っているのか？
俺達は原因を探しに来た、それだけだ。」

優は咲夜の傷を治し、茜、アントニオンと紅魔館を歩き始めた。

優「いや～幻想郷は強い奴ばかりだな。」

茜「でもみんな楽勝で勝っているじゃん。」

ア「そうですヨ、優さんは最強の外来人でス。」

優「あそう？それよりも、何か扉があるぞ。」

優は怪しい扉を見つけた。

優「行くぞ！」

茜「よし！」

ア「ハイ！」

優達は扉を開ける。と…

優「本？」

茜「図書館か何か？」

ア「とても広いでス。」

図書館に出た優達に…

？「誰なの？」

また女性の声、優達は声の方向を向く。

優「あんたはこの図書館の管理人か？」

？「ええ、そうよ。」

茜「ここの主人を探しているんだけど、知らない？」

？「…私と戦って、勝ったら教えてあげる。」

茜「結局、闘うのね。」

茜は二本の刀を抜き構える。

茜「私は大島　茜、あなたは？」

？「私はパチュリー、パチュリー・ノーレッジよ。」

紫の髪をしたパジャマ着のような少女はかなり大きい本を開く。そして…

パ「水符　プリンセスウンディネ！」

パチュリーは水の弾幕を放つ。

茜「簡単、簡単。」

茜は水の弾幕を楽々と避ける。

パ「やるわね、次はどうかしら？」

「金木符　エレメンタルハーベスター！」

パチュリーは浮かび上がり、周りから回転する刃のバリアを張りながら近づく。

茜「そんな攻撃が通用するとでも?」
「朱　玄　白　青符　　聖獣壁!」

茜は四本の刀　朱雀、玄武、白虎、青龍を融合
、聖獣刀を作りだし、聖獣刀から力を放ち、聖なる壁を作りだした。

ガギン!

刃のバリアと聖なる壁がぶつかる。

パ「なら…」
「月符　　サイレントセレナ!」

茜の足元から青白い光が出始める。

茜「朱　玄　白　青符　　四聖獣の閃き！」

茜は四聖獣の力を受ける。
茜の足元の光はエネルギーとなり、茜に直撃。

パ「ふ、これでトドメよ。」

パチュリーはスペルカードを取り出そうとした、その時…

茜「させない！」
「聖剣　聖獣閃？」

茜は光のなかから飛び出し、オーラを帯びた聖獣刀でパチュリーを斬った。

ドッ？

パ「あぁ！」

パチュリーは床に落ちた。

茜「安心して、峰打ちだから。」

そう言うと、茜は刀をしまう。

優「大丈夫か？」

優はパチュリーに恵みの波動を放つ。

パ「ええ、何とか…」

優「主人のとこへ、案内してくれるか？」

パ「負けたし、良いわよ、別に。」

～しばらく～

パ「ここよ。」

優「サンキュー。」

パ「じゃあ、私は戻るから。」

パチュリーは浮遊しながら戻って行った。

優「ついに来たな。」

茜「ラスボスだね。」

ア「行きましょう、優さん。」

優「よし！開けるぞ！」

～続く～

第3話　紅い霧の異変　その2（後書き）

次回はついに後編。
最後の敵とは…
ではまた次回。

第４話　紅い霧の異変　その３（前書き）

ついに紅魔郷編ラスト。
優達奮闘。
以上です。
どうぞ。

第４話　紅い霧の異変　その３

紅魔館にて

優「開けるぞ！」

ダン！

？「開ける時ぐらいノックをしたら？」

優達の目の前にはかなり幼い少女がいた。

優「あんたがここの主人か？」

？「ええ、そうよ。」

少女は異様な程の妖力を放つ。
だが、優達は妖力に押される事は無い。

？「私はレミリア・スカーレット。二つ名は
（永遠に紅い幼き月）」

優「俺は瀧沢　優。二つ名は
（最強の外来人）てとこかな？」

茜「私は大島　茜。二つ名は
（四聖獣を操る剣士）かな？」

ア「僕はアントニオン・ライブラリー。二つ名は　（最凶の現代兵器）　ですかネ？」

レ「…まあ、いいわ、でも、今日はこんなにも月が紅いから本気で殺るわよ。」

優「いいぜ。本気で来てくれた方が思いっきりできる。」

茜「そうそう、みんな楽勝で勝っちゃったし。」

ア「みなさん、本当に本気だったのですかネ?」

レ「・・・」

今の話で優達の実力がわかった、いや…わかってしまったレミリア。
かなりの力を出さなきゃ殺られてしまう。

レ「ちなみに私は何だかわかる?」

優「何なんだ？」

レ「私は吸血鬼よ。」

優・茜「マジ？」

ア「血が吸われてしまいまス…」

優・茜「お前　（あんた）　は大丈夫？」

そんな会話の中でレミリアは一人とり残されていた。

レ「そろそろ始めましょうか？　（怒）　」

優「ああ…」

そして…

ア「まずは僕からヲ！」
「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンはミサイルを放つ、が、レミリアは軽くかわす。

茜「なら！」
「幻影　無限幻影剣！」

茜は　無幻　を構え、周りに幻の剣を展開。

幻の剣はレミリアへ一直線。

ササササッ

だが、レミリアは無限に飛んでくる幻剣を全て避ける。

茜「そんな…」

レ「どうしたのかしら?私の思い過ごしだったかしら?」

レミリアは少しガッカリしたが、その考えはすぐに覆される。なぜなら…

優「おい、まだ俺がいるんだ、本気を出せ、じゃないと…死ぬぞお前…」

優は気を身体から放つ。その気はレミリアを圧倒していた。

レ「…わかったわ。」
「天罰　スターオブダビデ！」

レミリアを中心に紅いレーザーが放たれる。
そのレーザーから丸い球ができ、球からまたレーザーが放たれる。

優「うっわ？」

優はレーザーを避けるが…

レ「まだよ。」

レミリアは弾幕を放ち、丸い球からも弾幕が放たれる。

優「そう来るか。」

優は弾幕を全て避ける。

レ「さすがね。なら…」
「運命　ミゼラブルフェイト！」

レミリアはスペルカードを発動。
紅い鎖が優を縛る。

優「な？何だこりゃ？」

レ「その鎖から抜けられるかしら？」
「神槍　スピア・ザ・グングニル？」

レミリアは手にエネルギーを集め、紅く、
長い槍を作りだした。

優「まずい！」

ギギ…

優は身体全体に力を入れ、鎖をひき千切ろうとする。そして…

バキン？

鎖をバラバラに千切った。が…

レ「遅かったわね。」

パーーン？

レミリアは出来上がった紅い槍を優に投げる。

優「まだだ！」

バーーン？

優はかろうじて波動を放つ。
放った波動が紅い槍を相殺する。

優「はぁ…」

レ「驚いたわ…あなたみたいな人間がここまでやれるなんて。」

レミリアは少し驚く。

レ「あなたは私の　（運命を操る程度の能力）が効かないとはね。でも…」

レミリアは近接戦闘の構えをとる。

レ「これならどうかしら?」

ズバッ

レミリアは優に素速く近づき…

ドカッ？

腹に拳を叩き込む。

優「ぐっ？」

レ「どうしたの？」

ボガッ？

優「うぐっ！」

レ「さっきまでの…」

ズガッ？

優「ぐふっ？」

レ「動きは…」

バゴッ？

優「ぶっ？」

レ「まぐれだったのかしら？」

バギッ？

優「うあ？」

優はレミリアの連撃で吹っ飛ぶ。

レ「これでトドメよ。」

レミリアは優の前に来て、トドメの拳を打とうとした。その時…

パッ

レ「？」

レミリアは驚愕した。何故なら…

優「フフ…」

優はレミリアの拳を人差し指一本で止めているからだ。

レ「何で？」

優「最弱じゃあ、足りないか…
まあ、それなりの力を持っているのは妖力を感じた時からだけど…」

レ「な…なにを…」

優「ちょっと力出してやる、今度は退屈させねぇよ。」

優はそう言うと、気を身体全体から放つ。
その気は今までに無い程の勢いと力を出していた。

優「覚悟は出来てるな？」

ドガン？

優はかなりの威力のパンチをレミリアの小さい腹にぶち込む。

レ「グハッ？」

レミリアは吹っ飛び、壁に直撃する。

優「どうした？力は全然出してないぜ？」

レ「バケモノね…」

優「吸血鬼には言われたくないな。」
「波動　波動百烈拳！」

優は百発の波動拳を放つ。

レ「くっ？」

レミリアはかわそうとするが、避け切れず幾つか直撃。

レ「な、何で？」

優「お前の能力を俺が使っているだけだ。」

レ「？」

優「俺の能力は
（全ての技を自分の物にする程度の能力）　だ。
お前の能力や技は全部もらった！」

レ「何ですって？」

優「今度は本気で殴る。ちょっとでも痛いぜ。」

優はそう言うと、握り拳をつくる。
すると…

レ「紅魔　スカーレットデビル！」

レミリアはスペルカードを発動。
紅いエネルギー波はレミリアを取り巻き、
バリアとなる。

優「ぅおおらあああ？」

優は思いっきり突っ込み、拳を繰り出す。

バァーーン

優の拳がバリアとぶつかり合う。

レ「無駄よ、このバリアは運命でも破れない。」

優「誰も能力を使うとは言ってないぞ。」

レ「え？」

バリバリ…

バリアは崩れ始め、そして…

バァーーン！！！

バリアは崩れ、レミリアも床に崩れる。

優「・・・」

レ「わかったわ…霧は後で…「今すぐやれ！！！！」はい…」

ドゴーーン！！！

優「何だ！」

〜続く〜

第４話　紅い霧の異変　その３（後書き）

実は後編の後編があります。
狂気の…
それではまた次回。

第5話　紅い霧の異変　ＥＸＴＲＡ（前書き）

後編の後編、ＥＸＴＲＡです。
真の敵は…
・・・
どうぞ。

第5話　紅い霧の異変　EXTRA

紅魔館にて

優「あの音は何だ？レミリア！」

レ「・・・」

優「おい！レミリア！」

レ「優！力を貸して！」

優「何があったんだ？」

レ「私の妹が…暴れ始めたの。」

優「妹？…よくわかんねぇけど、助けてやる！」

茜「私も行く！」

ア「僕モ！」

優「お前らはここで待ってろ？」

優は茜達を怒号で止める。

茜「何で？」

優「俺はお前達を巻き込みたくない…俺は親友を死なせたくない。」

（あの日からずっとそうだった…）

茜「…優？」

優「お前達は待っててくれ、俺はまだ死ぬ気は無い。」

茜「わかった。」

ア「生きていてくださいネ…」

優「ああ、んじゃ、行こう！」

レ「ええ。」

優とレミリアは部屋を出て行った。
そして、階段を下に降りて行き、地下牢に到着した。

優「すげぇヒビだ…今にも壊れそうだな。」

レ「この扉を開けたら死ぬと思った方がいいわ…あの娘は私より強いから…」

ドーーーン？」

ピキッ

優「大丈夫…俺はまだ死ねないから…」

レ「そう…なら気をつけて…」

優「ああ。」

優はそう言うと、ヒビの入った扉を蹴り崩す。

ドゴーーン！

？「アハハ…開いた。」

優「よう。」

優の目の前には口が裂けるような狂った笑顔を浮かべる赤い服の少女。
少女の背中には不思議な羽がついている。

？「あなただ～れ？」

優「俺は瀧沢　優って言うんだ。お前は？」

？「私はフランドール、フランドール・スカーレットって言うの…」

優「じゃあフラン、俺と弾幕ごっこするか？」

フ「うん！する！」

優「ただし、条件がある。」

フ「な～に?」

優「弾幕ごっこと言っても、お遊び抜きの本気の闘いをしよう、それが条件だ。」

フ「フフ♪いいよ♪」

フランは狂った笑顔で答える。

フ「あまり早く壊れないでね。」

優「心配御無用、お前の能力は効かない。」

優は手を動かす。

優「来い…」

フ「アハハ♪」

ダッ

フランは優に突っ込んで行く。

優「うぉ？」

フ「ハハ♪」

ヒュン！

バシ！

優「危ねっ！」

優はフランのパンチを手で受け止める。

フ「フフ…お兄さん強いね♪でも…」

「禁忌　クランベリートラップ！」

フランはスペルカードを発動。

色々な場所に呪式を配置。

呪式から弾幕が放たれる。

パパパパパン？

優「飛ぶか…」

優は飛び上がり、浮遊する。

優「よっと！」

優は弾幕を上手く避ける。

フ「避けてばかりいないで少しは攻撃してよ～。」
「禁忌　フォーオブアカインド！」

フランは突然４人に増える。

優「トラウマになりそうだ…」

フラン　１２３４「行くよ！」

４人のフランはそれぞれ分かれ、攻撃をする。

優「全く…」

優は1人目をかわす。
2人目もかわす。
3人目もかわすが…

フ「こっちだよ！」

ブン！

優「くそ！」

シュッ

4人目はギリギリでかわした。

フ「次はどうかな？」

「禁忌　恋の迷路！」

フランは円を描くように弾幕を放つ。

優「く…キツイな…」

優は迷路と言うのを理解し、上手くかわすが、さすがに辛くなってきた。

ドバン！

優「ぐはっ？あっ！しまっ？ぐあ～～！！！」

ドバババン！

優に一発の弾幕が直撃すると続けて弾幕が直撃。優は弾幕にまみれる形になる。

フ「アハハ♪まだまだ♪」

「禁忌　レーヴァテイン！」

フランは炎のオーラを帯びた剣を振るう。

ズバン？

優「ぐあっ…！」

優は避けられず、斬撃をまともにくらう。

バシュ！

優「く…ああ…がは…！」

優の身体に大きな深い切り傷を負う。
切り傷から血が流れる。

フ「どうしたの?まだ終わらないよ♪」
「禁弾　スターボウブレイク！」

フランはボウガンを作りだし、優に向けて撃つ。

ボン?

優「は…！」

ビシュ?

放たれたボウは優に突き刺さり、壁にぶつかる。

後からやって来た茜とアントニオンは目を疑った。

茜「…優？」

ア「…優…さン？」

フ「あ～、壊れちゃった…つまんない。」

レ「…まさか…こんな事になるなんて…」

不安になったレミリアが現れた。

フ「他のお兄さんにお姉様まで、私と遊んでくれるの？嬉しい♪」

レ「く…」

優「おい…勝ってに殺すなよ…」

カラン

優はゆっくりそう言う。
そう言った後、優の身体に突き刺さっていたボウが落ちる。優は壁にはまっていただけだった。

茜「優？」

ア「優さン？」

レ「あなた…なぜ？」

優「言ったろ、俺はまだ死ねないって。」

フ「お兄さん生きてたんだ～♪」

スタッ

優「ああ、さすがに最弱じゃあ足りなかったか～。んじゃ…」

ズギャーーーン!!!

優は一気に気を解放する。

優「ちょっと出して行くか。」

フ「？」

優「さすがに子供に合わせ過ぎたからな～♪
…フフ…フフフ…フハハハ…」

レ「…え？」

優「おっと、ちょっとお前の変なのが移っちまった…だけど、こっからが本番だ、ちゃんと本気出して無いと…死ぬぜ、お前。」

ダッ

優はあり得ないスピードでフランに近づくと…

ズガーーン！！！

フ「グッ…？」

優の放った拳がフランの顔面に直撃する。
その瞬間にフランは吹っ飛び、壁に激突する。

フ「ウグッ…」

優「さっきまでの威勢はどうした？ハハ…」

フ「ク…さすがだね…」
「禁忌　カゴメカゴメ！」

優を囲むように弾幕が展開。が…

優「ただの弾幕だな。」

優は普通の弾幕と言い、簡単にかわす。

優「少し攻めるぜ。」

ズガッ！！

フ「ァグ…！」

フランは痛みのあまり声が詰まる。

優「もっと来いよ。」

フ「ク…」

「秘弾　そして誰もいなくなるか？」

フランの姿が消え、追尾する弾幕が現れる。

優「それがどうしたよ？」

優はあらぬ方向に波動を放つ。すると…

フ「グッ…アア…？」

波動を放った場所からフランが現れた。

フ「なぜ…わかったの？」

優「隠れても無駄だ…遊びじゃないんだ。」

フ「…わかった…これで最後にするよ。」
「ＱＥＤ　４９５年の波紋？」

フランは弾幕を放つ。
その弾幕はまるで波紋のように広がり、跳ね返る。

優「さすが悪魔の妹、フランドール・スカーレット。だけどな…」

優は波紋の弾幕をあっという間に避ける。
そして…

バッ

優は右手をフランに向け…

優「お前は狂気に頼り過ぎた。」

シュン

バァーーン？

優はフランの目の前に瞬間移動し、波動を真ん前で放つ。

フ「ウアアアアッ？」

フランは身体の外部と内部を同時に壊されるような痛みを感じ、悲鳴をあげる。

ドサッ

フランは倒れた。

優はフランに近づき、恵みの波動を放つ。

フ「…うぅ…」

優「悪りぃな、これでも手加減した方なんだ。」

フ「お兄さん、傷…」

フランは優の胸の傷を指差して心配する。

優「おぉ、忘れるところだった。」

「恵みの波動。」

優の傷はたちまち治り、傷跡も残らなかった。

レ「全く…心配掛けさせて…」

茜「やっぱり優は強いね♪」

ア「さすが　（最強の外来人）　ですネ！」

優「レミリア、今度からは気をつけろよ！次はどうなるか…わかるな？」

レ「わからにゃ～い…「ガキっぽいのは嫌いなんだよ！うぜぇ？」う～☆」

咲「お、お嬢様！どうしましたか？」

気づくといつの間にか咲夜がレミリアの前に居た。
鼻からヤバイモノが流れている。

優「咲夜？鼻からヤバイモノが…」

咲「優さん…これは…私のお嬢様に対する…
忠誠心です？」

優「何が忠誠心だ！タダの変態じゃねえか？」

茜「引くわ…」

ア「・・・」

咲「う～☆」

レ「そんな事より、あなた達、今日は泊まって行きなさい。」

優「良いのか？」

レ「せめてものお詫びよ。」

優・茜・ア「じゃあ…お言葉に甘えさしていただきま～す！」

こうして俺ら、は紅魔館で疲れた身体を休める事にした。

～続く～

第5話　紅い霧の異変　ＥＸＴＲＡ（後書き）

次回は三人を紹介します。
まだ知らない方々が多いと思うので。
では、また次回。

キャラ紹介　超絶で最狂の三人（前書き）

優「さあて、幻想郷に来てからの俺達を今回は作者も含めて紹介するぞ！」

作者「まあ、僕は一応ですから、楽しんでくれると嬉しいです。」

キャラ紹介　超絶で最狂の三人

瀧沢（たきざわ）　優（ゆう）　〇〇学園　中等部　２年Ａ組
年齢：１４歳
性別：男
身長：１６８ｃｍ

能力
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）
（見た技全てを自分の物にする程度の能力）

通常攻撃技
波動
波動拳

スペルカード
波動「波動百烈拳」

飛龍「翔龍波」

瞬烈「刹那の百烈拳」

龍撃「滅龍拳」

「究極かめはめ破」
５個

身体能力が常人の１０倍。
幻想郷に来てからさらに倍加。
力が覚醒し、（超化）と言う力が使える。
刃物が効かない。

大島（おおしま）　茜（あかね）　優と同じクラス
年齢：１４歳
性別：女
身長：１６０ｃｍ

能力
（四聖獣を操る程度の能力）

通常攻撃技
二天一流の極み
次元斬
疾走居合斬り

スペルカード
舞斬「朱雀炎舞」
舞斬「玄武水舞」
風雷「風神の竜巻・雷神の雷鎚」
風雷「風切の壁・稲妻の罠」
朱　玄　白　青符「四聖獣の閃き」
朱　玄　白　青符「聖獣壁」
聖剣「聖獣閃」
幻影「無限幻影剣」
幻世「幻影の世」
龍虎二刀流「龍虎二天閃」
龍虎二刀流「龍の爪・虎の牙」
１１個

龍虎二刀流の伝承者であり、普通の中学生。

刀は全部で
名刀　（朱雀）＼
（玄武）ーーー　聖獣刀

（白虎）ーーー／
（青龍）ーー／

妖刀　（無幻）

風雷　（双剣・風丸）　（双剣・雷電）

アントニオン・ライブラリー　優と同じクラス
年齢：１４歳
性別：男
身長：１８０ｃｍ

能力
（物体を誘導する程度の能力）

通常攻撃技
無い

スペルカード
爆撃「ミサイルボンバー」

眼撃「アイレーザー」

爆閃「マインド・クラッシュ」

実はサイボーグであり、その真実は優達だけが知っている。
誰よりも気遣いで、誰よりも抜けている。

おまけ

作者
年齢：秘密
性別：男に決まっているだろ！
身長：知ってどうする？

能力
（創造する程度の能力）

通常攻撃技

昇龍拳～！なんちゃって…

スペルカード
スペルカード？何それおいしいの？

空想の人物を創り出せる。
創った物、創られた物を例外無く消せる。

東方キャラ

幼女　１１０～１３０ｃｍ

少女　１４０～１６０ｃｍ前半

女性　１６５～１６８ｃｍ

東方キャラはこれくらいの身長です。

作者「こんな具合です、ではまた次回。」

キャラ紹介　超絶で最狂の三人（後書き）

次回は優の過去の話。
以上です。

第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。（前書き）

優の過去とは…
それは優の力と関係が…
ではどうぞ。

第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。

～優視点オール～

今から1年以上前の事…

優が○○学園の中等部　1年A組だった頃。

優「なあ悟志、一緒に帰ろうぜ！」

悟「うん！」

俺の親友の　海導　悟志　（かいどう　さとし）
小学４年の頃から友達になった。
こいつはとっても良いやつで、でも気が弱いんだ。だからいつもいじめっ子にいじめられる。

いじめっ子「お～い悟志、今日も決まってんな～。」

悟「や、やめてよ…」

優「おい！嫌がってんだろ！やめてやれよ？」

いじめっ子「何だよ、俺はこいつと遊んでいるだけだぜ？」

優「髪を引っ張るのが遊ぶ事なのか？」

いじめっ子「文句あんのか？」

優「大有りだな！」

いじめっ子「んだと～？」

いじめっ子は俺に突っ込んで来たけど…

優「オラ？」

ドカッ！

いじめっ子「うっ…痛ぇ…くそ！覚えてろよ！」

優「わかった、お前の痛がるとこ、しっかり覚えててやるよ！」

いじめっ子「くそ～！」

優「悟志だっけ？大丈夫か？」

悟「あ…ありがとう！」

優「なあ悟志、俺と友達になろうぜ。」

悟「え？いいの？」

優「ああ！俺もクラス換えで友達がいないからさ、俺の名前は瀧沢優、よろしく！」

悟「うん、よろしく。」

それが俺と悟志の出会いだ。
それから、俺と悟志はよく遊ぶようになった。
俺は勉強が苦手だけど、悟志はとても頭が良い。だから勉強を教えてもらった。悟志はケンカが出来ないけど、俺はケンカが強かった。だから俺は悟志を助けた。それぞれがそれぞれの弱点を補い、小学

校を楽しく過ごした。
そして小学校を卒業し、〇〇学園に入学した。
俺と悟志は一緒のクラスにだった時、とても嬉しかった。

優「悟志！一緒のクラスだな！」

悟「そうだね！」

でもいじめは無くならない。
学園に来てからもいじめっ子はいる。
俺は勿論悟志を守り続けた。
だけど悟志はどんどん傷付いてゆく。
俺は何があったのか聴くが、悟志は黙る一方。
悟志はついに不登校になった。

優「悟志…一体、何があったんだよ…」

俺は誰がやったのか突き止める事にした。
そしてわかったのは…

斎藤　源（さいとう　はじめ）

山田　淳也（やまだ　しゅんや）

橋本　隆司（はしもと　りゅうじ）

腹わたが煮えくりかえるが、俺がやるより先生に対処してもらう事にした。
先生に頼んだ結果、三人はいじめた事を認めた。
俺はその事を悟志に伝えようと家に行った。
たくさんの食べ物や花を買い、悟志に会いに行く。

優「悟志〜！」

俺は悟志の家におじゃまして、悟志の部屋へ向かう。悟志は落ち込んでいる、だから俺が元気にする。

（驚くだろうな、悟志の奴。このお土産の山を見たら！）

俺はそんな事を考えながら、悟志の部屋のドアを開ける。が…

優「悟！…志…」

信じたく無かった。あいつが…悟志が…首を吊っていた何て。

悟志の親は今朝までは話しをしていたと言う。

そんな事よりも…

俺は…とても…悔しかった…
悟志を…助けてやれなかった…
悲しくて…そして…

ムカついた…

自分の無力さに…悟志を守れなかった事に…
自分の全てにムカついた…

果てしない怒りが俺の体から溢れ出す。

怒りが頂天に達した時…

優「ううううあああああ！！！！！！！」

怒りと共に悲しみも溢れ、涙が流れる。

ズギャーーーーン！！！！！！

この瞬間に俺の身体能力が異常かつ、気や波動が使えるようになった。
そして俺は誓った。

俺はたとえどうなろうと、友達は絶対に守る、と…

優「はっ？」

「夢か…たく…思い出したく無ぇのに…」

夢…そう言えば…この頃夢なんて観てないな。

優「まだ夜中の2時か…」

時計を見たらその時間だった。

（そう言えば、ここは紅魔館だったな。あいつらは寝てるだろうし、目も覚めちゃったし、出てる月でも拝むか…）

俺は部屋を出たが…

ガチャ

優「暗いな…灯りも無いし、作るか。」

俺は波動拳を出さずに手に止めるようにする。

バォン！

波動が俺の手で溢れ出し、青い光と気を放つ。明るさは懐中電灯よりも明るい。

優「よし…」

俺は歩く、目的は無い。

咲「あら、あなたも眠れないのかしら？」

ふと、咲夜が目の前に現れた。

優「咲夜か…何だ、見回りか？」

咲「そんなところね…」

優「大変なんだな、咲夜。」

咲「そう言えばさっき、あなたのお友達が眠れないからって、屋上に行ったわ。」

優「屋上？」

咲「ここの階段を上って行けば屋上があるわ、そこに友達もいるから。」

優「ありがとう。」

咲夜は歩いていき、消えるように居なくなった。

タ、タ、タ…

階段を上って行く。

すると、扉が見えた。

ガ…チャ

優「…茜…アントニオン。」

俺は屋根に座って夜空を観ていた茜とアントニオンを見つけた。

茜「優…起きてたんだ…」

優「少し眠れなくてな…」

茜「私たちもなんだよね…」

ア「何ででしょう…サイボーグの僕も眠れないなんテ…」

俺と茜とアントニオンは夜空を見上げていた。

優「なあ、茜、アントニー…お前らは帰りたいか？俺は帰れたら帰りたい…でもここにも居たい。お前らはどうだ？」

茜「そりゃ、私だって帰りたい…でもここにも居たい…それは一緒だよ。」

ア「僕も同じでス。ここでいろんな人と出会って、闘ってばかりですが、心が繋がった気がするんでス。」

優「…そうだな…よし、俺はここに…幻想郷にいることにする。まだこの世界は見たことないものがあるだろうし。」

茜「そうだね…私も幻想郷を冒険したいし。」

ア「まあ、帰ると言っても方法がわかりませんから初めから無理何ですけド…」

優「あっ…そうだった…あはははは。」

茜「あっはははは。」

～夜が明けて～

優「ありがとな、泊めてくれて。」

レ「いいのよ、あなたにはフランを止めてもらったし、また来てもいいわよ。」

優「これたらな。」

茜「今度来る時までに強くなっておいてよね。」

パ「無理言わないでちょうだい。」

ア「でもみなさん十分強いですヨ。」

咲「言われても嬉しくないわ…」

優「じゃあ、またな。」

レ「またね。」

～続く～

第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。（後書き）

次回は博麗神社へ…
ではまた次回。

第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？（前書き）

優達は再び博麗神社へ…
そこで信じられない事実が…
ではどうぞ。

第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？

優「さあて、博麗神社へちょっと行くか。」

茜「博麗神社？何で？」

優「幻想郷に居るって決めたけど、やっぱり帰れるのかどうか知りたいからな。」

ア「でも、ここからだと距離がかなりありますガ…」

優「俺の能力、知っているよな？」

茜「　（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）　と…あっ？」

ア「　（見た技全てを自分の物にする程度の能力）　ですネ！」

優「そう！俺は瞬間移動を覚えた。」

茜「でも、見てないのに何で？」

優「頭の中に残っている記憶から探し出して、見て覚える事もできるんだ。俺はアニメのド〇ゴン〇ールの悟〇の瞬間移動を覚えたんだ。」

茜「なるほ。んじゃ、早く行こう！」

優「よっしゃ！じゃ掴まれ！」

シューン！

シュバー！

優「到着！」

茜「凄い！本当に一瞬だ！」

ア「優さん！すごくカッコいいでス？」

霊「・・・」

ふと神社を見ると、視線に入る口が開いたままの紅白の巫女。

優「よう、霊夢！」

霊「常識破りね…」

優「幻想の住人に言われたかないな。」

俺はそう言いながら指で５００円を弾き、お賽銭箱に…

チャリン¥

霊「あっ！」

優「それと、聞きたい事があるんだけど…」

霊「お賽銭をくれたし、いいわよ、何でも言ってみなさい。」

優「俺達は元の世界に帰れるのか？」

霊「無理よ。」

優「無理？」

茜「何でよ？」

霊「あなた達は能力を持っている上に力も並じゃないわ、あなた達の存在は常識から幻想に変わったのよ。」

優「何でそれを言わない？」

霊「言ったら、あなた達からの文句が絶えないでしょうからね。それに、無理にでも帰そうものなら、結界が崩れてしまうわ。」

優「そうか…なら大丈夫だ。俺達はここに居ることにした。」

霊「え？」

優「ここで暮らすのも悪くないと思ってな…それに幻想郷はよく異変が起こるんだろ？異変の解決は霊夢もするんだろ？俺らがそれを手伝うってのも良いかと思ってな。」

霊「わかったわ。あなた達の家の提供をしてあげる。紫、いるんでしょ？」

スーー

紫「わかってるわよ。」

優「…あの顔、どっかで見たような…」

茜「確かに…見たことある…」

ア「あれは確カ…」

優達は見たことのある金髪の美女を目の前に記憶を探索する。すると…

優・茜・ア「あ～～～！！！！！」

霊「！？」

紫「ウフフ♪」

優・茜・ア「お前　（あんた）　（あなた）　は！」

優は紫に向かってずんずんと歩く。

優「お前！」

紫「ウフフ♪ゴメンなさい♪」

優「顔が謝ってねぇよ！つか、そんな変な物に乗ってねぇで降りてこい！」

紫「わかったわ。」

紫はスキマから出て降りてきた。

優「・・・」

紫「どうしたの？」

優「ちっちゃいな…」

紫「・・・」

優「それよりも、俺らに家を提供してくれるんだろ？」

紫「ええ。」

優「よろしく頼むぜ。」

紫「ウフフ♪」

〜続く〜

第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？（後書き）

優達は住居をもらった。
次回は妖々夢編です。
お楽しみに。

第8話　春に降る雪の異変　その1（前書き）

ついに妖々夢編です。
またもや優達の活躍。
ではどうぞ。

第8話　春に降る雪の異変　その1

優達の住居にて

あれから6ヶ月…もう4月だっていうのに、雪が吹き荒れる。

優「寒…？」

茜「冬は好きだけど、さすがに長いよね。」

ア「確かに、4月だというのに雪が降っていまス。どう考えてもおかしいでス。」

優「じゃあ…い、異変だって、い…言うのかよ…？」

ア「ハイ。」

優「でも誰がやったのかわからないぞ。」

ア「それは…」

優「…わかった…行こうぜ、犯人を探しに！」

俺達は雪の降る寒空に出た。

優「う～…誰だよ…犯人はよ…」

？「待ちなさい、あなた達。」

何だか声がしたから振り返ると…

優「誰すか？」

？「私はレティ・ホワイトロック、あなた達こそ何者？」

優「瀧沢　優です。どうぞよろしく。」

青い服を着た女性に俺は挨拶をする。

優「で、なんすか？」

レティ「あなた達を「ここで永遠に眠らす　だろ。」え？」

～outside～

優「寒いからとっとと来い！」

レティ「…わかったわ。」

「寒符　リンガリングコールド！」

レティは優に弾幕を放つ。

その弾幕は放った直後に広がった。

優「・・・」

スッ

優は無言で弾幕を避ける。
レティの周りからも弾幕が放たれているが、優には一発も当たらない。

優「じゃあ…冬眠へ…」

レティ「そんな…」

優「ＧＯ。」

バコッ！

優は精一杯の弱い一撃でレティをのした。

優「ああ、寒い…行こうぜ。」

優達は飛んだ。

優「はあ～何かよくわからないけど、寒く無くなってきた。」

茜「慣れたんじゃない？」

優「かもな。」

ア「何か飛んで来ます！」

？「誰？あなた達？」

猫耳の中国の服を着た少女はそう聴く。

優「何だ?今度は猫ちゃんか?」

?「猫ちゃんじゃない!私は橙　（チェン）　て言う名前があるの。」

優「はいはい、言いたい事はわかったから、とっとと来い。」

橙「む…」

「仙符　鳳凰卵!」

橙はスペルカードを発動。

丸い形に広がる弾幕が優に当たる。が…

ドン！

優「はぁ～…眠…」

橙「効いてない？」

橙はとても驚いた。無理も無く、弾幕をくらって平気な相手は今だかつていないからだ。

優「どうした？終わりか？」

橙「まだ！」

「式符　飛翔晴明！」

橙は星の形を描くように翔ぶ。
かどを曲がった瞬間弾幕が放たれる

優「おお、速い速い。」

優は拍手しながら弾幕を避ける。

橙「そんにゃ…」

優「はいはい、次は？」

橙「にゃ！」
「天符　天仙鳴動！」

橙は翔びまわりながら弾幕を放つ。

優「んじゃ…」

スバッ

橙「にゃ？」

優「終わりな。」

バシッ！

橙は優のパンチで気絶、真下の森へ落ちていった。

茜「弾幕くらったけど、大丈夫なの？」

優「よくわからないけど、大丈夫だった。」

ア「行きましょう、優さん、茜さん。」

優達は再び飛ぶ。

優「そう言えば、茜は能力で飛んでるんだろ？」

茜「うん、（四聖獣を操る程度の能力）で、青龍の力を使っているの。」

優「アントニーは一目瞭然だな。」

ア「僕は足のジェットで飛んでまス。」

優達がそんな会話をしてると…

？「ちょっといいかしら？」

水色のドレスのような服を着た金髪の少女が突然現れ、そう聞く。

優「何でしょう～か？」

？「あなた達は異変を解決しようとしてるのかしら？」

ア「そうですガ…」

？「ならあなた達の実力を試さしてもらうわ。」

優「…すまないアントニー、代わり頼む。」

ア「ハイ、わかりましタ。」

優「行こうぜ、茜。」

茜「頑張って。」

ア「さて、始めましょうカ…」

？「ええ。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

？「私はアリス・マーガロイド、行くわ。」

「蒼符　博愛の仏蘭西人形！」

アリスはスペルカードを発動。
アリスの周りから人形が現れ、弾幕を放つ。

ア「なるほど、やるべき事ハ…」
「眼撃　アイレーザー！」

アントニオンは目からのレーザーで、人形を焼き消す。

アリ「く…なら…」
「魔符　アーティフルサクリファイス！」

ポーン

ア「？」

アリスは人形をアントニオンに放り投げる。
すると…

ドガーン？

ア「ウア？」

突然人形は爆発した。

アリ「もう一回…」
「魔操　リターンイナニメトネス！」

ビュン

ズガーーン！！！

今度の爆発はさっきより強力な威力。

ア「うぐっ…！」

アリ「切り裂いてあげる！」
「戦操　ドールズウォー！」

アリスは数体の人形を出し、人形は武器を構える。そして…

ズバババババッ？

人形がアントニオンを切り裂く。

アリ「悪く思わないでね。」

ア「その心配はいりません、僕はサイボーグですから。」

アリ「え？」

アリスは驚いた。その理由は生きていた事と…この世界の物の姿をしてないと言う事。

アリ「あなた、一体何者?」

ア「僕はアントニオン・ライブラリー、サイボーグでス。」

アントニオンの姿は、服は少し切れているが、皮膚の部分は切れ、特殊合金が露になっている。

ア「今度は僕の攻撃でス。」

「爆撃　ミサイルボンバー!」

アントニオンの撃つミサイルが人形をぶっ壊す。

ア「ちゃんと守って下さイ！」
「爆閃　マインド・クラッシュ！」

パチン

シュー…

アリスのはるか下の地面に光が発せられる。
そして…

ズガーーーン！！！

大爆発が起こり、アリスを呑み込む。

アリ「うあああぁぁぁ！」

アリスは地面に落下した。

ア「急がないト…」

その頃、優と茜は…

優「何か空間の穴があるぞ。」

茜「きっとあそこが…」

優と茜が穴に入ろうとすると…

バッ！

優「うわ？」

茜「何？」

突然優達の前に一発の弾幕が飛んできた。

？「それ以上はダメ。」

？「あなた達人間がくる場所じゃないよ。」

？「だから帰ってくれない？」

優「む・り・だ！」

茜「同じく。」

？「なら追い払うだけね。」

三人の女性？少女のようだが、

一人は黒い服の金髪
二人目は白い服の白髪
三人目は赤い服の黒髪
それぞれが楽器が持っている。

？「私はルナサ、ルナサ・プリズムリバー。」

？「私はメルラン。」

？「リリカだよ♪」

優「俺は瀧沢　優。茜、ここは俺に任せて、行け。」

茜「わかった。」

優「さて、始めるか。」

ルナ「じゃあ…」

「弦奏　グァルネリ・デル・ジェス！」

ルナサは楽器を演奏する。

それにより、音符が現れる。

そして音符が弾け、弾幕が放たれる。

優「簡単だなっと、うぁ…！」

優は弾幕を簡単に避ける。が、突然苦しみだす。

メル・リリ「じゃあ、三人で行くよ。」
「騒符　ファントムディニング！」

ルナサ、メルラン、リリカが三人に集まり、演奏し、音符を放ち、
音符が弾けて弾幕が放たれる。

優「う……」

優は動かない。ルナサ達の弾幕が当たろうとした時…

ドン！

直撃！かと思いきや…
弾幕は直前で何か遮られたようだった。

優「フフ…フフフ…」

ルナ「？」

メル「？」

リリ「？」

優「ハハハハハハ！！！」

優は狂ったように笑いだす。
その時の目は赤黒く光る。

優「よう……俺は、こいつの　（闇）　だ…」

ルナ「闇？」

優「お前らはラッキーだ…この俺に殺されるんだからな…」

ドバーーーン！！！

瞬間、優の身体から黒い気が放たれる。
不敵に笑うと…

シュバッ

優「ハハハ…」

あり得ない速度でルナサ達の目の前に現れる。優の後ろには残像が残っている。

ルナ「？」

メル「？」

リリ「？」

優「波動　波動百烈拳？」

優は黒い波動拳を百発撃つ。
黒い波動拳はルナサ達に直撃！

ルナ「うあああああ？」

メル「あああああ！」

リリ「わあああああ？」

ルナサ達は落ちた。

優「ハァ！」

優は闇から抜けていた。

優「あれ？何が…」

優は何が起こったかわからず、そのまま茜の後を追った。

ア「優さ～ン！」

優「おーアントニー、速く来い！」

後から来たアントニオンは優と上空の空間の穴に入った。

～続く～

第8話　春に降る雪の異変　その1（後書き）

次回は見知らぬ地へ…
空ですから…
ではまた次回。

第9話　春に降る雪の異変　その2（前書き）

いよいよ空の上の世界に…
そこでの剣士　対　剣士の闘い、ご覧あれ！

ではどうぞ…

第9話　春に降る雪の異変　その2

霊界？にて

茜「暗いなぁ…」

茜は見知らぬ場所にいた。
茜が歩いていると…

茜「何これ？」

茜の目の前には途轍もない程長い階段があった。

茜「上れば…」
「能力・白虎！」

茜に白い何かが当たると…

茜「よし。」

タタタタタッ

茜は疾風の速さで階段を上る。
その長い階段をどんどん上り、そして階段が終わる。

茜「うわ～…」

茜は驚いた。その光景はただ美しい物だった。
と、光景に見惚れていると…

？「ちょっとよろしいですか？」

目の前に現れた少女はそう言う。
彼女は銀髪の緑色の感じの服、
後ろには白い魂が浮かび、
背中と腰には刀がある。
茜と同じ剣士のようだ。

？「人間がここに何の用ですか？」

茜「異変解決…て言えばわかるでしょ。」

？「なるほど、把握しました。」

少女は素早く刀に手をかける。

茜「の…前に自己紹介と、ここが何処か教えてくれない？」

茜の問いに、少女は刀から手を離す。

？「いいでしょう。ここは冥界、幽霊が集まる場所です。そしてあの屋敷が白玉楼（はくぎょくろう）、私はそこで働いている魂魄　妖夢（こんぱく　ようむ）です。」

茜「私は大島　茜、見ての通りの外来人。
そして…龍虎二刀流の伝承者。」

妖「龍虎二刀流…同じ剣士と言う事ですか…
なら、相手にとって不足無し！」

茜「それじゃ…」

茜と妖夢はともに刀を構える…
そして…

茜・妖「はぁぁあああ？」

ガキン？

茜の刀と妖夢の刀がぶつかり合う。

茜「やるね！」

妖「さすがですね、この楼観剣（ろうかんけん）と白楼剣（はくろうけん）を思い切り振るえる日がくるとは。」

茜「私だって、朱雀、玄武、白虎、青龍や無幻の全部を使えるんだから。」

茜と妖夢はそう言う。

妖「行きますよ！」
「人符　現世斬！」

妖夢はスペルカードを発動。
楼観剣を鞘に居れ…

スバーーン？

居合いの一閃？目にも止まらぬ速さで茜に向かう。

茜「速いけど…」
「二天一流の極み！」

茜は妖夢の動きを見る…
そして…

茜「見えた？」

カキン！

左の刀で妖夢の攻撃を払い、

バシッ！

回転し、右の刀の峰で妖夢を叩く。

妖「うぁ！」

妖夢はよろめくが、すぐに体制を立て直し…

妖「魂魄　　幽明求聞持聡明の法？」

妖夢の体が分裂するようになる。

妖「はあ？」

茜「？」

茜は妖夢の斬撃を避けるが…

スバァーン

茜「あい…た…！」

茜の腕に切り傷が…

妖「避けても、避けきれないですよ、この技は。」

茜「避けても…切れる。」

妖「気を引き締めてください！」

妖夢は再び斬りかかる。

茜「能力・青龍！」

茜は妖夢の攻撃と同時に飛び上がる。

茜「よし切れてない…て事は…」
「斬撃が二回に増えてるだけ！」

茜はそう理解すると…

茜「白虎、あなたの出番だよ。」

茜は名刀　（白虎）　を取り出す。
鞘から抜き出し…

茜「切り裂け?白虎?」

妖「剣伎　　桜花閃々!」

茜と妖夢は突っ込む、そして…

ズババン！！！

茜の攻撃が通る。斬撃は三回、三回の斬撃が妖夢を切り裂く。

妖「あぅ…」

茜「これで同じね。」

茜と妖夢は同じ傷を負った。

妖「まだです！」

「人鬼　未来永劫斬！」

妖夢は居合いの構えをとる。

茜「じゃあ…」
「舞斬　玄武水舞？」

茜は名刀　（玄武）　を持ち、回転しながら刀から水を放つ。
そして…

ズバーン！

茜「あっ！」

茜が妖夢の攻撃で舞い上がる。

妖「隙あり！」

茜「まだ？」
「次元斬！」

ジャキン

スパーーン？

妖「？」

妖夢は紙一重で次元斬をかわす。

茜「はぁああ！！！」

妖「くっ…！！！」

茜と妖夢は刀をぶつけ合う。

ガキン？

ギャン？

シャキン？

それぞれの刀がぶつかり、音が鳴り、斬撃が現れる。
二刀流の達人同士が戦うと途轍もない物になる。周りの物体は斬撃の衝撃波でバラバラになり、足場はひび割れ、瞬間的な空気圧の低

下で周りの温度が下がり、氷が現れる。

ガキン！！！

茜「はぁ、はぁ、はぁ、強い…」

妖「はぁ、はぁ、はぁ、あなたこそ…」

茜「次で決めようか。」

妖「そうですね。」

茜と妖夢は刀を構え、力を溜める。

そして…

茜「これで…」
「龍虎二刀流　龍虎二天閃！！！」

妖「決める？」
「空観剣　六根清浄斬！！！」

妖夢は茜を囲むように六人に分裂する。
茜は持っている刀の全てを浮かし、背中に構える。
そして…

茜・妖「はぁぁぁあああああ！！！！！」

一閃！！！！！

ジャキキキーン！！！！！

茜は妖夢の後ろに、妖夢は茜の後ろに…
それぞれが刀を前に振り抜いていた。

妖「あぁ…」

バタン！

倒れたのは妖夢、茜は戦いに勝った。

優「お～い！茜！」

ア「無事ですカ～？」

優とアントニオンが階段を上ってきた。

茜「ふふ…遅いよ！」

優「ゴメンな～、階段が長くてよ～。」

？「それはゴメンなさいね。ウフフ…」

～続く～

第9話　春に降る雪の異変　その2（後書き）

ついに異変の犯人登場。
その正体とは…

ではまた次回。

第１０話　春に降る雪の異変　その３（前書き）

ついに冥界と白玉楼の主の登場。
優がなんと…

ではどうぞ。

第１０話　春に降る雪の異変　その３

冥界にて

優「その声、あんたがここの主であり、異変の犯人　て事か？」

？「そうよ…私が幻想郷の春度を集めた、
西行寺　幽々子（さいぎょうじ　ゆゆこ）　。」

おしとやかな桃色の髪の女性は浮遊しながらそう言った。

優「なぜ春度を集めた？」

幽「あれを見て。」

女性はそう言い、持っている扇で指し示す。
その方向には…

優「木？」

茜「ただの木じゃない…」

ア「見てくださイ！あの木、何かを吸っていまス。あれガ…」

幽「そう、吸っているのは春度。私はあの西行妖（さいぎょうあやかし）をもう一度咲かせたいのよ。」

西行妖と言う木は春度を吸って、桜の花を咲かせている。
が、満開ではなく、後少しのところで止まっている。

優「　んな事はいい…大事なのは…　（怒）　」

幽「？」

優「とっとと春を返しやがれ！！」

茜「ゆ、優？」

ア「優さン？」

優「こっちは寒くて寒くてたまんないってのに、そっちは春を集めてよ！何だ？宴会でもすんのか？たくよ、許可無しに春を取りやがって？本来は冬眠から目覚める動物も目覚めねぇだろうが？この迷惑野郎？」

幽「…そんなの「ほう、白を切るのか。なら…」　？」

優「ぶっ倒す！！！」

優はキレた。

優「茜、アントニオン、ここは俺一人でやる。下がっていろ。」

茜「う～ん…わかった、好きにして。」

ア「え…あの…「ほらほら、サイボーグでも怪我するよ。」え？」

茜はアントニオンを連れて下がる。

優「本気で来い！じゃねぇと…死ぬぞ、お前。」

幽「わかったわ。」

幽々子は理解したように一枚のスペルカードを取り出し…

幽「幽雅　死出の誘蛾灯！」

優「な、何だ？弾幕が迫るだと？」

優の周囲に桜の弾幕が現れ、優に迫りよる。

優「と、思ったけど、こういう弾幕知っているから問題無い。」

サァッ

優はそう言うと、音を超えるスピードで弾幕から抜け出す。

優「ふんっ…」

幽「手応えがありそうね。」

「亡郷　亡我郷ー自尽!」

幽々子はゆらゆらと揺れる弾幕を放ちながら時折レーザーを撃つ。

優「魅せる弾幕か…本気だせって言ってんだろ！！！」
「飛龍　翔龍波！！！」

ドォーーーン！！！

優は波動の龍を放つ。
龍はこれまでにない速度で幽々子に向かう。

幽「龍？いいわね、それ。
私も本気をだすわ。」

幽々子は全身から妖力を放つと、
突然…

パーーン

幽々子の後ろに巨大で綺麗な扇が現れ、広がる。

幽「行くわよ。」

幽々子は容赦の無い美しい弾幕を放つ。

優「ふっ…いいぜ！」

スバッ　スバババッ

優も幽々子の放つ弾幕を華麗に避ける。

幽「ウフフ。」

「亡舞　生理必滅の理ー死蝶ー！」

幽々子は弾幕で大きな円を描くように放つ。

大玉弾幕も同時に撃つ。

優「全部消しちまうか…」

「波動　波動百烈拳！！！」

百発の波動拳を放ち、幽々子の弾幕を相殺。

幽「ウフフ、さすがね。紫が一目置くだけあるわ。あなたに見せてあげる。」

「反魂蝶　－一分咲－？」

パァーーーン？

幽々子は全妖力を解放し、スペルカードを発動。

幽々子は次から次えと綺麗な桜の弾幕を放つ。

優「す…すげぇ…」

その美しさに優は見惚れ、避けるのを忘れる。

幽「終わりね。」

バァン！！！

優「何？」

幽「私の能力は（死を操る程度の能力）、あなたに死をあげる。」

その瞬間…

優「！！！」

優の動きが止まり、そのまま落ちそうになる。

優「！！！　（苦）　」

優の目が閉じ、ゆっくりと仰向けになる。

茜「！！！」

ア「！！！」

幽「さよなら…」

優「はぁ…」

優が死ぬ、その時…

優「・・・」

幽「！！！」

優は落ちずにその場にとどまる。

優「フフ…」

優はゆっくりと体制を直す。
顔が下向きになり、優が顔を上げる。

優「一つ言い忘れてた。」

幽「…何？」

優「俺の能力は
（自分の害なる物全てを　無　にする程度の能力）　と
（見た技全てを自分の物にする程度の能力）　だ。」

幽「？」

優「いや～正直能力でも危なかった。強いな…幽々子様よ…」

ズギャーーーン！！！

「久しぶりに本気を出せそうだ！」

優は全身から気と波動を放つ。
巨大な気は幽々子を圧倒していた。

幽「これが紫の言ってた…彼の力…」

優「行くぞ、幽々子。」

ズバッ

優は音速超えるスピードを超えるスピードでダッシュする。
つまり…

光の速さで翔んでいる。

優「遅えぞ！！！」

幽「？」

優が幽々子の場所まで　０．１秒。
優の出したスピードにより、ソニックブームが発生する。

ジィーーーン！！！

幽「きゃああ！！」

幽々子はソニックブームに吹っ飛ばされた。

幽「…やる…わね…これで最後よ！」

「反魂蝶　一八分咲ー　！！！」

幽々子は逃げる隙間が無い程の美しい弾幕を放つ。

優「綺麗だけど…」

シュンッ！！！

優は弾幕が張り詰められた場を抜け、幽々子に向かって…

優「んじゃ…」

「桜龍　龍桜（ドラゴンさくら）　！！！」

優は拳に力を溜め、地面に殴りつける。

すると、地面から美しい桜の龍が飛び出し、幽々子に直撃する。

ズバーーン！！！

幽「きゃあああぁぁ！！！」

幽々子に直撃後、さらに飛び、綺麗に咲き誇り散った。

ドサッ

幽々子は西行妖の前に落ちた。

幽「…あ…ぅ…」

優「恵みの波動。」

優は幽々子に近づき、優しい波動を放つ。

優「大丈夫か？」

幽「ウフフ…やられちゃったわね…」

優「桜龍は魅せる技だぜ、本気だったから威力があったが…」

優「春度を返してくれるか？」

幽「…ウフ…わかったわ。」

優「サンキューな！」

優は幽々子の手を掴んで立たせる。

優「じゃあな。」

幽「また、戦いましょうか。」

優「ああ。」

優は茜とアントニオンのとこへもどろうとすると…

スーー

優「ん?あ!うわ!!!」

スーー

茜「優?」

ア「優さん?」

幽「紫…」

〜続く〜

第１０話　春に降る雪の異変　その３（後書き）

何かに吸い込まれ、姿を消した優。
一体何が？

ではまた次回。

第１１話　春に降る雪の異変　ＥＸＴＲＡ（前書き）

優は何者かに拉致られた。
妖々夢編　ラストです。

ちなみに学校の行事で遅れてます。
ではどうぞ。

第11話　春に降る雪の異変　EXTRA

？にて

優「・・・」

（ここはどこだ？俺は一体…）

優「あっ！ここは！」

紫「ウフフ…ようこそ、私の世界へ。」

優の目の前には紫が居た。

優「何だ?…うぇ…気持ち悪…」

紫「人間をスキマの中に入れたのは生まれて初めてよ。」

優「なら入れんなよ…うぇ…」

紫「あら?大丈夫?」

優「大丈夫なわけあるか?こんな気色の悪い目玉に見られて囲まれて、気持ちの悪くならないのがおかしい!…おぇ…」

優は今にもＲｅｖｅｒｓｅしそうだ。

優「で、何の用だ？」

紫「あなたと戦いたいの。」

優「はあ？それだけの理由でスキマに入れたのかよ？何か言ってから入れろよ！」

紫「でも、強行手段があなたには良いと思って。」

優「はぁ…もういいよ…いくらでも付き合ってやる…」

紫「ウフ、ありがとう。」

優「その代わり、本気で来い！手加減すんなよ…！」

紫「わかってるわ、でも…」

「式神　八雲　藍　（やくも　らん）　。」

紫はスペルカードを発動。
そして現れたのは…

藍「ふぅ。」

帽子を被った金髪の女性、よく見ると、頭には耳らしきものがある。
一つ追加で、胸も豊満だ。

藍「お前が私の相手か…私の名は、
八雲　藍（やくも　らん）だ。」

紫「藍はね、元々は九尾の狐だったのよ。」

優「それがどうした？」

優は藍に歩み寄る。
藍も臨戦体制に入る。

藍「式神　　仙孤思念！」

藍はスペルカードを発動。
大玉弾幕を放つ。
と、大玉弾幕が炸裂し、小さい弾幕が放たれ、広がる。

優「そらっ！」

サッ

優は弾ける弾幕を軽く避ける。

藍「なら…」

「式神　十二神将の宴！」

藍から呪式が幾つか現れ、そこから弾幕が一斉に放たれる。

優「んじゃ、新スペルカードを。」

「気爆　超爆発破？」

優は気を全身に溜め…

ズカーーーン!!!

大爆発を起こす。
決して自爆技では無い技である。
優の爆発破により、弾幕が消え去る。

藍「く…」

優「どうした?来い。」

藍「式弾　アルティメットブディスト!」

藍は卍型のレーザーを放つ。

優「届いてないぞ。」

藍「まだ！」

藍がそう言うと、卍型のレーザーが巨大かし、範囲が広がる。

優「うわ！」

優は突然レーザーが巨大化した事に驚き、とっさに避ける。

優「ふっ…なら！」

「瞬烈　刹那の百烈拳！！！」

シュバッ

優は一瞬で藍の後ろに行く。

藍「な！いつの間に？」

優「痛みは遅れてやって来る。」

ズガガガガガン！！！！！

藍「ぐふっ…うぅ…」

藍は苦しそうに体を押さえる。

優「心配すんな、力は抜いたから。」

藍「紫…様…す、すみません…」

紫「藍、休んでなさい。」

優「さて、後は紫、あんただけだ。」

優は紫に指を指す。

紫「人に指を指しちゃいけないって、教わらなかったの？」

優「あんたは人じゃないだろ。」

紫「行くわよ！」

「結界　客観結界！！」

優の周囲に黄色の結界が迫る。

優「結界か…」

スバッ

優は音を超えるスピードで結界を破り抜ける。

紫「幻巣　飛行虫ネスト？」

紫は優に青く光る電気弾幕を放つ。

優「よっと…」

ビチッ！

優「痛え！」

紫「まだよ。」

「空餌　中毒性のあるエサ！」

紫はエサをばらまく。すると散らばった飛行虫が再び優に集まる。

優「痛、痛たた！」

紫「捕らえたわ。」
「人間と妖怪の境界！！！」

紫は優を取り囲むレーザー弾幕を配置する。

優「くそ！」

優は逃げようとするが、隙間が全く無い。
その状態から紫は優に向けて弾幕を放つ。

紫「逃げ場は無いわよ。」

優「しゃあねぇ…」
「飛龍　翔龍波！」

優は波動の龍をレーザー弾幕に向けて放つ。
そこからわずかながら隙間ができ、そこから優は猛スピードで抜ける。

優「はぁ…危ねぇ！」

紫「本気で行くわよ！」

「境符　四重結界！」

バババッ

紫は手に結界を四重に合わせて優にぶつける。

ズバババッ

優「うわあああああぁぁぁぁ！！！」

優は四重結界の威力で吹っ飛ぶ。

優「・・・」

吹っ飛ばされた拍子に優は力無く顔を落とす。

紫「そろそろ終わりかしら？」

優「・・・」

と、その時…

ズギャーーーン！！！！！

優は突如、金色の気を放つ。

紫「？」

優「ふ～…」

優は顔をゆっくりと上げ、話し出す。

優「まだ少しも本気も出してないけど、今回は特別サービスだ。」

フォン…

優が目を開けた時…
瞳が金色に染まっている。

優「これが…

（超化）　だ！！！」

紫「・・・」

「結界　魅力的な四重結界？」

紫は先程の四重結界より精密な結界を作り出し、優にぶつける。

ズバババッ

優「効かねえよ。」

紫「？」

紫は驚きのあまり言葉を失う。
自分の全力の攻撃を受けて平気でいられるなんて。

優「そらっ！！」

ズガッ！！！

紫「うぐっ…？」

優は四重結界を破り、紫にボディパンチを当てる。

優「せりゃ！！！」

ズガン！！！

紫「あが！！！…」

優は続けて裏拳を溜め無しで紫の顔面にぶつける。
紫は裏拳をくらって吹っ飛ぶ。

紫「これで…終わりよ？」
「紫奥義　弾幕結界！！！」

紫は姿を消し、スキマを使って、弾幕の結界を張る。

優「？」

弾幕の結界はある程度固まると、弾けて広がる。

優「ふんっ！」

優は難なく避ける。
再び優に弾幕結界が張られる。
弾幕の量は繰り返す度に数を増やし、どんどんかわすのを困難にして行く。

優「これでラストか？」

優の言う通り、弾幕結界は最高難易度に達した。もう隙間のすの字すら無い弾幕結界が優に迫る。

優「終わりだ！」

「龍撃　滅龍拳！！！」

優は波動を拳から放ち、自ら龍と化して弾幕結界から抜ける。

優「うおらあああ！！！」

優は龍の状態で弾けようとする弾幕結界に突っ込む。

そして…

ドバーーーン！！！

優「弾幕！決壊？」

バリーーーン！！！

優は紫の弾幕結界を破り、ついでに紫のスキマも壊した。

紫「…ウフフ、負けちゃった…」

優「人間舐めんな。」

～続く～

第１１話　春に降る雪の異変　ＥＸＴＲＡ（後書き）

ギリギリです…
次回は更新できません。
妖々夢編　完。
ではまた次回。

第１２話　優、心の闇、そして…真の力　後　花見。（前書き）

紫との闘いの後、優の力が…
これ以上強くなっても意味が無い？
いや、あるんだな～これが…
それは花映塚編で…

ではどうぞ。

第１２話　優、心の闇、そして…真の力　後　花見。

桜の木の下にて

優達は花見をしていた。

優「綺麗だな～。」

茜「桜って、こんなに綺麗だったんだね。」

ア「お花見は楽しいですネ。」

優「幽々子、何か言う事は？」

優の一言でゆらりと現れる幽々子。

幽「ゴメンなさい…」

優「いいよ…」

ぽす

幽「？」

優は幽々子の帽子に手を置く。

優「お前達だって、こっちで花見ができないからあっちの方で花見

をしたかったんだろ？」

幽「…ええ…」

優「わかるけど、限度があるだろ？だからこれから気をつけてくれ。」

幽「ウフ…わかったわ。」

幽々子は頬を赤くしながら返事をした。

優「しかし…」

霊・魔「優～～？　（酔）　」

優「何でいんの？つかお前ら未成年だろ？」

霊「みしぇえねん？なにしょれ？」

魔「酒はな～、楽しく飲む物なんだよ？」

優「あ～！酒臭え！寄るな？」

霊「いいじゃない、一緒に飲みましょうよ～。」

魔「そうだぜ～、ほら！」

霊夢と魔理沙は無理矢理お酒を飲ませようとする。すると…

優「いい加減しやがれ～！！！」

ズギャーーン？

霊・魔「きゃあああああ！！！」

優は気を放ち、霊夢と魔理沙を遠ざける。

優「はぁ…」

茜「モテモテだね～♪」

優「あんな奴等にモテても嬉しくねえよ！」

ア「青春ですネ。」

茜とアントニオンが茶かすなか、優は誰かを見つけた。

優「あれは…」

優は近づいてみる。

優「よう。」

紅「わあ?」

優が声をかけたのは紅　美鈴だ。

紅「もう〜脅かさないでくださいよ〜。」

優「悪りぃ、お前がいるってことは…」

優は美鈴の後ろを見る。

優「やっぱいた。」

レ「あら…」

フ「？」

咲「あなたは…」

優「よう。」

レミリア、フラン、咲夜がいた。

優「お前達も花見か？」

レ「ええ、そうよ。」

フ「お兄さんは？」

優「俺達も花見だ。」

レ「て事は…あなたが異変を…」

優「そうだな。」

咲「さすがです。」

優「咲夜、お前は飲まないのか？」

咲「え？」

優「ほら、突っ立ってないで座れ。」

咲「あっ…」

咲夜はストンと座らされた。

優「毎日頑張っているのは良いけど、たまには息抜きをしろ。」

咲「あ、ありがとう…御座います。」

咲夜は顔を赤らめる。

レ「あなたはもう飲んだの？」

フ「良かったら私たちが…」

レミリアとフランも負けじと優に抱きつき、甘い言葉を発する。だが…

優「悪りぃ、俺、未成年だから。」

レ・フ「へ？」

レミリアとフランのアタックは効かなかった。

優「ついでに、子供みたいなバ バアはもっと無理だ。」

優はレミリア達の歳も把握していたようだ。

優「おい、ここには俺達の知らない奴もいるのか?紫。」

紫「ええ、いるわよ。」

優「へぇ…」

紫「優、聞いてくれる？」

優「何だ？」

紫「あなたをスキマの中に入れた後、あなたから闇の力を感じたわ。」

優「闇？」

紫「その力の代償かもしれないわ。」

優「なら大丈夫、俺は闇には負けない。」

紫「ウフフ、後もう一つ、あなたの超化と同じだけど、さらに強い力を感じたわ。」

優「さらに？」

紫「あなた、本当に強過ぎ。これ以上強くなってどうするの？」

紫は笑みを浮かべながら聞く。

優「そんな事俺に聞くなよ。」

紫「まあ、その力でこの幻想郷を守ってくれるなら、いいんだけど。」

優「大丈夫、守ってやる。絶対に。」

優達はその後、思いっきり花見を楽しんだ。

〜続く〜

第１２話　優、心の闇、そして…真の力　後　花見。（後書き）

いよいよ来ました、永夜抄編。
これ結構楽しみだったんですよ。

ちなみに次回はスペルカード紹介をしたいと思います。
出来るだけ詳しくやります。

ではまた次回。

超絶で最狂の三人のスペルカード紹介（前書き）

優「ところで作者、お前本当に紹介好きだな。」

作者「幻想入りは前からやりたかったやつなので、つい主人公の事をたくさん教えたくなっちゃうんですよ。」

優「はあ…」

作者「と言う訳で、今回は優達のスペルカードの詳細みたいな事を紹介します。」

超絶で最狂の三人のスペルカード紹介

瀧沢　優

波動　身体の外部と内部を同時に破壊する。
波動拳　波動と違い、外部しか破壊できないが、弾速が速い為、避けるのは難しい。

スペルカード

波動「波動百烈拳」（はどうひゃくれつけん）
波動拳を百発撃つ技。
弾幕のように撃つうえに、波動拳はかなり速いため、避ける事はまず不可能。

飛龍「翔龍波」（しょうりゅうは）
波動の龍を拳から放つ。
少し溜めてから放つのと、スピードが少し遅いのが弱点。
だが龍自体が巨大なのと、若干の追尾能力を備えているため、避けられても問題は無い。
威力は凄まじく、二撃ある。
一撃目は相手を喰らい、二撃目はそのまま貫く。ちなみに龍は胴長龍。
受けた相手が相当な人間や、中級妖怪以上でない限り、即死確定、形が消えて無くなる。
（力の制御にもよるが…）

瞬烈「刹那の百烈拳」
目にも止まらぬ速さで相手に近づき百烈拳を身体に打ち込む。その間わずか０．１秒
打ち終わると相手の後ろに行き、宣告をする。
相手は打たれたのにも気づかない。そのため、痛みと衝撃が遅れてやってくる。
威力は上級妖怪ですら瀕死に追い込む程。

気爆「超爆発波」（ちょうばくはつは）
自爆技に近い技。
身体に気を溜めて一気に爆発させる技。
威力は東京のスカイツリーが消え去る。
でも本気じゃない。

桜龍「龍桜」
龍桜はドラゴン桜と読む。
優　ゆういつの魅せ技。
地に翔龍波を打ち付け、相手の真下から桜色の龍を放つ。
相手に攻撃を与えた後は、桜のように美しく散る。

龍撃「滅龍拳」（めつりゅうけん）
伝説の龍を滅する程の威力を持つ。
優が相手を空中に上げた直後に使う技。
相手を打ち上げた拳を思いっ切り引いて、波動を溜める。そして、溜まった波動を拳から放つように相手に向かって拳を放つと、波動

が龍を形作り、優自身が飛翔する龍になる。
龍は相手を貫き、相手の形を消し去る。

「究極かめはめ波」
悟〇の必殺技では無く、究極の威力を持つ、優の切り札であり、絶対的必殺技。
優が両手の手首を合わせ、腰に持っていく。
そして波動を溜める。溜めた波動は大きくなり、最終的には優の身長と変わらない程に巨大化する。
放つと、その大きさは、富士山を覆い尽す。
さらに、優が左手を下げ、右手だけ残し、力を思いっ切り注ぐと、その力を（解放）し、果てしない威力を持つ。
その威力は幻想郷を塵一つ残さず消し飛ばす程。

「真・究極かめはめ破」
究極かめはめ破と変わらないが、溜めた時のデカさが優を覆う程になり、その威力は半端なく、地球を消せる。
（解放）をしてしまえば、宇宙が消えて無くなる。そのため、優は超化以上でないと使えないうえに、優は使うのをためらう。
もちろんサイズは超絶で最狂。

大島　茜

二天一流の極み　二本の刀を交差して構える。その間に相手の動

きを見極め、見極めたら刀の連撃を相手にぶつける。

次元斬　　抜刀と同時に納刀を終え、相手を凄まじい斬波で切り裂く技。

疾走居合斬り　　居合の構えで全力で走り、目にも止まらぬ速さで抜刀を繰り返す。
すると抜刀した場所だけ斬撃の衝撃波が起こり、どんな物でも切れる。

スペルカード

舞斬「朱雀炎舞」　（スザクえんぶ）
舞斬「玄武水舞」　（ゲンブすいぶ）
それぞれ同じ技。
右手に朱雀か玄武を持っている時に使う。
刀の持つ属性の力を両方の刀が纏い、朱雀なら炎、玄武なら水を纏う。
力を纏った刀を構えて回転しながら斬り、最後は右の刀で斬り上げる。
斬られた相手は朱雀なら焼死、玄武なら、溺死する。

風雷「風神の竜巻・雷神の雷鎚」
（ふうじんのたつまき・らいじんのいかづち）
双剣・風丸、雷電を持っている時に使う。
風丸を右に構え、雷電を左に構える。
風丸を横に振って自分自身も高速回転する。

すると、竜巻が起きて、相手を巻き上げながら切り裂く。
そして十分に回ったら、左の雷電を振り下ろす。
すると、雷が相手に落雷。
相手にまるコゲになる。

風雷「風切の壁・稲妻の罠」
（かぜきりのかべ・いなずまのわな）
持つ物は同じ。
発動すると、茜の周囲を風切の壁が囲み、稲妻の罠がさまざまな場所に配置される。
稲妻の罠は近づくだけでも稲妻が相手を攻撃する。風切の壁は近づくだけでも相手を切り裂く。

朱　玄　白　青符「四聖獣の閃き」
（しせいじゅうのひらめき）
茜の持つ刀である、
名刀（朱雀）（玄武）（白虎）（青龍）を融合して力を得る技。この時、茜の上に何か浮かんでいる。（おそらく朱雀、玄武、白虎、青龍）
刀は融合し、聖獣刀と名を変え、刃渡り１．３ｍの太刀となる。
聖獣の力を茜に降ろし、効果を得る。

朱雀　炎の強化（攻撃）（耐性）
玄武　水の強化（攻撃）（耐性）
白虎　攻撃強化
青龍　防御強化

朱　玄　白　青符「聖獣壁」
聖獣の力を借りて聖なる壁を貼る。
「四聖獣の閃き」を使わなくとも、これで聖獣刀が作れる。（効果は得られない）
壁は茜の周りに貼られる。
「四聖獣の閃き」をやらなければ強度が無い事もある。

聖剣「聖獣閃」
朱　玄　白　青符の発動で聖獣刀を持っている時に使う。
実は刀がそれぞれの力を持っていて、

朱雀　炎を操る
玄武　水を操る
白虎　一回の斬撃が三撃になる
青龍　特殊なオーラで刀のリーチを伸ばす
（オーラが刀を覆って、刀ではなくオーラが刀の役目になる）

この力で聖獣刀を強化して相手を叩ッ斬る技。刀のリーチは１０ｍにもなる。

幻影「無限幻影剣」
茜が　妖刀　（無幻）　を持っている時に使う。
無幻の名前でもある、無限　の　幻　と言う技。
茜が無幻に体力を注ぎ込み、周りに半透明の幻影剣を無限に展開し、相手に幻影剣を飛ばす技。
スピードはあまり速くないが、無限に数があるうえに発射されるリズムが不規則な為、
これを破るには、茜を攻撃するか、殺られるかである。

幻世「幻影の世」
持つ物は同じ。
無幻に体力を注ぎ込み、特殊な霧を出現させる。
霧の中に隠れられるのは茜のみ。しかも茜からみる霧は無いに等しい程良く見える。
隠れられたら最後、死　あるのみ。

龍虎二刀流「龍の爪・虎の牙」
龍と虎の力を使い、茜は特殊なオーラを纏う。
茜に触れようとすれば、龍の場合は触れた相手の身体を肉ごと裂き、虎の場合は触れた部分
（手なら肘まで、足なら膝まで）　を喰い千切る。

龍虎二刀流「龍虎二天閃」
龍と虎の力で茜の持っている全ての刀　剣を浮かせる。
茜が手を相手に向けた瞬間、浮かんでいる刀剣が相手をバラバラに切り裂く。
酷い時は塵も残らない。

アントニオン・ライブラリー

スペルカード

爆撃「ミサイルボンバー」
アントニオンのショートアフロから小型ミサイルを数発　発射する技。
ミサイルは小型だが、威力は通常のロケットランチャーの２倍。
弾幕を相殺できる。

眼撃「アイレーザー」
まさしく、目からビームの技。
貫通力があり、富士山を三個貫ける。
ちなみにレーザーの色は赤。

爆閃「マインド・クラッシュ」
指を相手に向けてエネルギー溜める。
そして指パッチンをすると、相手の足元が光り、絶大なエネルギー爆発を起こす。
威力は優の翔龍波と同じ。

「アルティメットプラズマ」
アントニオン最後の技。
これを使う時、アントニオンは死を覚悟する。
彼の全てのエネルギーを胸から放出する。
原水爆１０個並のエネルギーが相手を襲う。
使用後、アントニオンがどうなるかは不明。

これにてスペルカード紹介終了。

超絶で最狂の三人のスペルカード紹介（後書き）

次回は永夜抄編。
そろそろ霊夢と魔理沙が出てきますが…

ではまた次回。

第１３話　永遠に続く夜の異変　その１（前書き）

来ました！永夜抄編です。
後、新しい小説書きました。
タイトルは
東方龍神録　です。
こちらも見てみてください。
ではどうぞ。

第13話　永遠に続く夜の異変　その1

人里にて

～優視点～

花見から2時間後の事…

優「いや～楽しかったけど、騒がしくもあったな。」

茜「騒がしいくらいが良いんだよ。」

ア「僕はお酒を飲まされそうで危なかったでス。」

優達は会話をしながら歩く。と…

ドン

優「うおっ？」

？「あぁ？」

優と誰かの肩がぶつかった。

ドサ

優「あっ、すいません！大丈夫ですか？」

？「あぁ、なんとか…」

青い服をきた女性は、銀の髪と蒼の髪を揺らしながら立ち上がる。

優「大丈夫ですか？」

俺は女性に手を差し伸べる。

？「すまない…」

優「いいえ。」

なんだかとても気になる帽子を被っているが、気にせず話しを続ける。

？「ああ！こうしちゃいられない？じゃあ、また！」

優「あ、はい…」

女性は走って行ってしまった。

優「・・・」

茜「何ボーっとしてんの？あっ！まさかあの人の事…」

優「ちげーよ。少し帽子が気になっただけだ。」

俺達はその後、家に戻り、何事も無かったかのようにその日を過ごした。

その夜…

優「う…う～ん。」

俺は目が覚めた。

優「…まだ夜中か？」

俺は時計を見たら…

優「7時…だと？」

俺は驚いた。
外はまだ暗く、月が出ているのに…
時計は朝の7時を指している。

ガチャ

茜「優！おかしいよこの時計！まだこんなに暗いのに朝の7時を指しているんだよ？」

ア「優さん！これはもう…」

優「ああ…」

「確定だな…」

そう…異変確定。

優「よし、すぐ着替えて行くぞ！」

茜「うん！」

ア「ハイ！」

俺らは即効で着替え、外に飛び出る。

優「今度は一体何だ？」

俺達は夜空を飛び回る。

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

優達は夜空を飛び回っていると…

？「何ですかあなた達は？」

優達に声を掛ける少女の声が…

優「そっちこそ名前を名乗ってほしいな。」

？「わかりました。私はリグル・ナイトバグと言います。さあ、今度はあなたが名乗る番です。」

優「俺の名前は瀧沢　優だ。じゃあ、行くぜ！」

優はリグルにそう言う。

リ「行きます？」
「蠢符　リトルバグ？」

リグルは弾幕を自分の周りに張る。
そして、張った弾幕を周りに放つ。
二重、三重、四重と、張る弾幕の層を増やす。
だが優は…

優「簡単過ぎんぞ。」
「波動！」

バァン？

優は弾幕を避けながらリグルに向けて波動を放つ。

ブワァン！！！

リ「きゃあああ？」

優の波動がリグルに直撃！
リグルはそのまま落ちる。

優「さて、いこ「待ちなさい！」ん？」

優達が先を行こうとした時にまた少女の声が…

優「誰だよ?」

?「私はミスティア・ローレライ。リグルちゃんの友達よ!」

優「友達?」

優はミスティアの言葉に驚く。
なにせ優は友をやられるのが一番許せないからだ。

ミス「リグルちゃんをよくも…」

優「・・・」

ア「ここは僕に任せてくださイ!」

優がなにもできずにいる状態を見兼ね、アントニオンが変わりに前に出る。

ミス「くらえ？」
「鷹符　イルスタードダイブ？」

茜「うわ？」

ア「アウッ？」

突然茜とアントニオンが驚いている。

優「どうした？」

茜「暗くて何も見えないんだよ？」

ア「何も見えませセン？」

ミス「♪」

ミスティアは突如歌い始めた。

茜「あああ！やめて？」

ア「回路が…おかしくなりそうです…」

茜とアントニオンは耳を押さえながら苦しむ。
その間にも弾幕が飛んで来る。すると…

優「ミスティア…」

ミス「？」

ミスティアは驚いた。
優が鳥目になってないのと、歌で狂っていない事に。

優「お前能力は俺には…効かない。」

ミス「そんな…」

優「波動！」

バァン？

優は波動を放ち、ミスティアにぶつける。

ミス「あああああぁぁぁ！！！」

ミスティアは波動をくらい、落ちる。

優「茜、アントニオン、大丈夫か？」

茜「見えなくなっただけで大丈夫だよ。」

ア「同じク。」

優「そうか…よし、行こうぜ！」

～続く～

第１３話　永遠に続く夜の異変　その１（後書き）

次回は人里であったあの人が…
後、霊夢と魔理沙が最初に出てきてない時点で気づいている人も多いと思います。
出ますが…

また次回。

第１４話　永遠に続く夜の異変　その２（前書き）

例のあの人が登場。
その人は…

ではどうぞ。

第１４話　永遠に続く夜の異変　その２

夜空にて

優達が空を飛んでいると

優「ん？」

優の視線の先は…

？「？」

優「あんたは？」

？「君は…あの時の…」

優「何で飛んでんの？」

？「まあ、理由は後だ。私は上白沢　慧音（かみしらさわ　けいね）だ。君の名前は？」

優「瀧沢　優だ。それよりあんたは一体何者なんだ？」

慧「私は人里の寺子屋で教師をやっている。私は人間であり、獣人でもある。」

優「獣人？」

慧「今日は満月だ。私の本当の姿を見せてあげよう。」

慧音はそう言うと、頭に被っている帽子をとる。すると…

シュー…

慧音の服と髪色が緑色に変わり、帽子を被っていた頭からは角が生える。

慧「これが私の本当の姿だ。」

優「あんたはこの異変に関わりがあんのか?」

慧「少なからずある。」

優「なら…」

「俺と闘う事だ。」

優は声を低くしてそう言う。

慧「わかった、手加減はしないぞ。」

優「それが普通だけどな。」

慧音の言葉を優は素早く返す。

慧「じゃあ…」

「野符　武烈クライシス？」

慧音は球を両横に放つ。

放った球は回転しながら弾幕を放つ。

優「弾が遅いぜ！」

優は弾幕を体をそらす程度でかわす。

慧「さすがだ。」

「国符　三種の神器　剣！」

慧音は弾幕を弾幕を自分ともう一つの球を動かしながら放つ。

優「これくらいなら前に行けば…」

スバッ

優は慧音の近くに移動する。が…

慧「ふんっ！」

「終符　幻想天皇？」

優が近づいて来たと同時に球を配置。

そこからレーザーを放ち、自らも弾幕を放つ。

優「うぉっと！」

優はとっさに下がり、右手を構え…

バァン？

波動を放つ。

慧「なっ？」

慧音は波動をギリギリで避ける。
球は波動によって消える。

慧「ならこれで…」
「無何有浄化？」

慧音は弾幕を放つ。と、思いきや、弾幕が慧音に吸い込まれていく。

優「珍しい攻撃だな。」

だが優は驚くどころか、笑う。

優「それが最後なら…」
「飛龍　翔龍波？」

「俺の勝ちだな。」

優は波動の龍を拳から放つ。

ガキン？

ジャキーーン！！！

波動の龍は慧音を喰らい、貫く。

慧「うぐっ…ぐふぁ…！！！」

慧音は血を吐きながら、落ちる。

と…

スバッ

優「よっと！」

慧「ぅふっ…」

優は落ちそうになった慧音を抱き抱える。

優「恵みの波動。」

優は慧音に優しい波動を放つ。

慧「助けてくれて…ありがとう。」

優「いいんだよ…けど、早くここから離れた方が良い。」

慧「？」

優「茜、アントニオン！慧音を連れて先に行け！」

茜「わかった。」

ア「優さん、また…」

優「気にすんな…早く…」

茜とアントニオンは慧音を抱えて先に進んだ。

優「さ～て…その、なんだ…気持ち悪いから殺気を放つのをやめてくれないか？」

霊「気づいていたとはね。」

魔「殺気では無いんだけどな…」

咲「殺気に近い物だけどね。」

アリ「理由は無いけど、闘いにきたわ。」

妖「私はあなたの実力が知りたくて来ました。」

レ「ま、私はリベンジだけどね。」

幽「私も。」

紫「私もよ。」

優「はぁ…で、いっぺんに俺にくんのかよ。」

レ・幽・紫「もちろんそのつもりよ。」

優「フェアじゃないね…」

魔「まあ、私達は一人ずつでもいいぜ。」

優「いや、めんどいからいい…」

「まとめて相手してやるよ。」

～続く～

第１４話　永遠に続く夜の異変　その２（後書き）

多勢に無勢の状態になってしまった優。
１対８で勝てるのか？
優はついに…

ではまた次回。

第１５話　永遠に続く夜の異変　その３（前書き）

優の圧倒的不利状態からスタート。
霊夢、魔理沙、咲夜、妖夢、アリス、レミリア、幽々子、紫。
優はついにその力を…

ではどうぞ。

第１５話　永遠に続く夜の異変　その３

夜空にて

優「来い。」

優は指で挑発する。

魔「まずは私から行くぜ！」

魔理沙が先に動いた。

魔「くらえ？」
「恋符　マスタースパーク？」

バァーーーン！！！

魔理沙は手に何かを持ち、その何かから極太レーザーを放つ。

優「おぉ…すげえな。」

優はそう言いながら、レーザーを避ける。

霊「今度は私の番ね。」
「神霊　夢想封印！」

霊夢は七つの光の弾を優に放つ。

優「よっと！」

優は光の弾を避けるが…

優「あれ？」

避けたはずの光の弾が優に再び向かってくる。

優「なら…」

スバババッ

優は音速で光の弾を避ける。
光の弾は追尾し切れずに光の弾同士ぶつかって消える。

咲「幻葬　夜霧の幻影殺人鬼！」

咲夜はナイフを自分の周りに放る。
するとナイフは高速で飛んで消え、消えたナイフは突然現れ、優に

向かって高速で飛んでくる。

優「単調過ぎる技だな。」

優はそう言うが動かない。
すると…

スバッ

カキキキキン!!!

優はギリギリで飛んでくるナイフをかわす。

妖「では今度は私が…」
「人符　現世斬？」

妖夢は抜刀の構えをし、高速で動き、刀を振り抜く。

優「無駄だ。」

ガキーン！！！

妖「なっ…何故？」

妖夢の刀は優の体に防がれた。

霊「能力ね。」

アリ「今度は私。」
「呪符　上海人形！」

アリスは人形を取り出し、人形からレーザーを放つ。

優「波動！」

優は波動を放つと言うよりも、手を横に振るいながら波動を放つ。

バシン？

優の波動がバリアの役目をし、レーザーをかき消す。

レ「じゃあ…」
「夜符　バッドレディスクランブル！」

幽「今度は…」
「霊符　无寿の夢！」

紫「私達の番よ。」
「境符　四重結界！」

レミリアは飛び上がり、翼を広げる。

幽々子は霊魂を集め、飛ばす準備をする。

紫は結界を重ねる。

そして…

レ・幽・紫「はあ！」

優に向かって一斉攻撃を行う。

優「全部避けてやるよ。」

「はぁぁぁあああ！！！」

ズギャーーーン！！！

優は金色の気を放つ。
そして…

レミリアは回転しながら突進。が、紙一重で優は体を動かす。
幽々子は霊魂を飛ばす。が、優は気で霊魂を消す。
紫は四重に重ねた結界を優に放つ。が、優は結界を拳で壊す。

優「一斉攻撃も意味無しだな。」

魔「まだだぜ！」
「魔砲　ファイナルマスタースパーク？」

魔理沙は先程のレーザーより巨大なレーザーを放つ。

優「魔理沙、俺の能力　知っているよな？」

霊「能力…はぁ！魔理沙！危ない！」

魔「？」

優「霊夢、よく気づいたな！」
「魔撃　マスタースパーク？

優は右手に魔力を集め…

バァーーーン！！！

放つ！

優の放つレーザーは魔理沙のレーザーより一回り大きい。よって…

ズバーーーン!!!

威力も上だ。
優のレーザーは魔理沙のレーザーを呑み込む。

魔「マジかよ…」

優「そら!」

優は放ったレーザーを魔理沙に当たる直前に消す。

優「これが　（超化）　だ。」

優は金色の瞳を光らせる。

霊「神技　天覇風神脚！」

霊夢は優に近づき…

ブンッ

蹴りを繰り出す。

優「格闘なら…」

サッ　サッ　サッ

優は霊夢から繰り出される蹴りを全てかわす。そして…

優「格闘なら俺が上だ。」

「拳撃　爆裂乱舞！」

優は容赦無い拳と蹴りのコンボを高速で叩き込む。

ドガガガガッ！！！

ズガガガガガッ！！！

霊「うぐふ…！！！

優「うぉぉらあああああ！！！」

ズガンッ！！！！！

霊「あぁぐ！！！」

霊夢は優の一撃で吹っ飛ぶ。

優「うっ…これは…」

優は覚えのある苦しみを感じる。

優「…そうか、これが！」

「ううううおおおおおお！！！」

霊「？」

魔「？」

咲「？」

妖「？」

アリ「？」

レ「？」

幽「？」

紫「？」

優は超化より遥かにデカい気を放つ。
それは新たな力…そう…

ズギャーーーン！！！！！

優「…これが…」

「真・超化だ？」

紫「ここで目覚めるなんて…」

幽「凄過ぎるわ…」

レ「何？この力は…」

優の髪は逆立ち、金色に染まり、瞳は澄んだ緑色になっている。

優「ここからは本気以上でこねぇと、死体も残んねぇぜ…お前ら…」

霊「本気どころか、死ぬ気で闘っているってのに…バケモノなの？」

魔「バケモノの方がまだ良いぜ…こいつ、全ての攻撃が私達を殺せる程の威力を持っているのに、本気で攻撃をしないんだ。」

アリ「確かにバケモノの方がまだ良いわね…」

咲「お嬢様、もしかしたら死ぬかもしれません…」

レ「最後の晩餐をしておくべきだったわ…」

妖「幽々子様、私は命をかけて幽々子様をお守りします！」

幽「妖夢…彼に対して私達は全くもって無力よ。死力を尽くして闘うわよ。」

妖「はい。」

紫「ここで命を落とす事になるとはね…でも私だってやられてばっかりは嫌よ。」

霊・魔・咲・アリ・妖・レ・幽・紫
「最後のスペルカードを出すしかないわね。」

優「来い！」

霊夢、魔理沙、咲夜、妖夢、アリス、レミリア、幽々子、紫は最後のスペルカードを取り出し…

霊「夢想天生！！！」

魔「ブレイジングスター！！！」

咲「デフレーションワールド！！！」

妖「待宵反射衛星斬！！！」

アリ「グランギニョル座の怪人！！！」

レ「スカーレットディスティニー！！！」

幽「西行寺無余涅槃！！！」

紫「深弾幕結界　　－夢幻泡影－　　！！！」

霊夢は陰陽玉を展開し、薄く白くなり、弾幕を放つ。

魔理沙は自ら彗星の如くエネルギーを放出しながら、優に突っ込む。

咲夜はナイフを幾つか投げ、時を止めて数を増やす。

妖夢は桜の弾幕を優の進路に展開し、溜めて神速で斬りかかる。

アリスは人形を出し、人形から弾幕を大量に放つ。

レミリアは紅く鋭い弾幕と紅い大玉弾幕を大量に放つ。

幽々子は反魂蝶と同じようで違う弾幕を数多に放つ。

紫は弾幕結界を展開、これまでに無い程の難易度で優に挑む。

そして優は…

優「俺が究極を見せてやるよ！！！」

「無想転生！！！」

優は霊夢のスペルカードに似たような技を発動。
優は構え、気を落ち着かせる。
そして…

シュゥーン！！！

優は一瞬にして霊夢より高い場所に行く。
そして…

ビシューーーン！！！

優は瞬間、霊夢を貫く。すると…

バキーーーン！！！

陰陽玉の全てが割れ、白い状態も無くなる。

霊「夢想天生が…破られた…」

魔「うぉぉおおお！！！」

魔理沙は優に突っ込む。

優「お前自身が突っ込んでくるならこうすれば良い。」

バァン！！！

優は波動を魔理沙に放つ。
すると…

バシューーン！！！

魔「うわっ！！！」

魔理沙を覆っていたエネルギーが剥がれ、魔理沙はのけぞる。

咲「！！！」

咲夜はナイフを投げる。が…

優「そら！」

スバッ　スバッ

優は音速でナイフを全て奪う。

優「くらえ！」
「瞬技　　時を刻む刃！」

優は奪ったナイフ全て投げると、後ろに時計が現れる。

カチ

ビシュ！

咲「うあ！」

カチカチカチカチ

ビシュビシュビシュビシュ！

時計の針が音をたてる度に咲夜にナイフが飛んでくる。時計が１２を差した時…

ゴーーン

シュバババババババ！！！

残り全てのナイフが咲夜を襲う。

咲「うぅあああああ！！！」

妖「斬る！！！」

妖夢は桜の弾幕を展開、妖夢は空高くから神速で斬りかかる。

優「瞬烈　　刹那の百烈拳！」

優は妖夢に音速で突っ込む。

ジャキーーーン！！！

優と妖夢は互いに背中を向けた状態。
そして…

ズガガガガガッ！！！

妖「がは…」

優は頬に切り傷を負う。

アリ「行くわよ！」

アリスは人形を操り、弾幕を撃つ。
アリス自身も大量の弾幕を高速で放つ。

優「人形を壊すだけだ。」
「波動　波動百烈拳！」

優は百発の波動拳を撃つ。
波動拳は人形を壊し、アリスにも当たる。

ドガガガン！！！

アリ「きゃあああ！！！」

レ「受けてみなさい！」

レミリアは紅い弾幕と大玉弾幕を回すように放つ。

優「どうした？」

スバッ

レ「はっ？」

優「弱いぞ？レミリア。」

ズガッ！！！

レ「ごふっ！！！」

幽「これならどう？」

幽々子は反魂蝶より美しく、激しい弾幕を大量に放つ。

優「やっぱ綺麗なだけじゃねぇか…」

スバッ　スバッ　スバッ

幽「速い…」

優「んじゃ…」

ドゴッ！！！

幽「うぐっ…！！！」

紫「まだよ！まだ終わってない？」

紫は弾幕結界を上回る弾幕の壁を放つ。

優「よいしょ！」

スパーッ

優は光速で動き、弾幕の壁をかわす。

紫「そんな…弾幕結界が…」

優「それじゃあ反撃と行きますか！！！」
「究極かめはめ破」

優は巨大な波動の球を溜めて…

シュバーーーン！！！！！

放つ。

霊「デカ過ぎ…」

魔「私のマスタースパークより何倍もでけえ…」

咲「避け切れない…」

妖「くっ…ここまでか…」

アリ「いけない…走馬灯が見えてきた…」

レ「死ぬわね…」

幽「亡霊なのにまた死ぬのね…」

紫「強すぎるわ…でも、悔いは無い。」

彼女達がそんな事を言っていると…

優「誰が殺すって言った？」

「ふんっ！」

バォーーーン！！！

優は両手を引き、波動を拡散させる。

優「たく、何死ぬ覚悟してんだよ…本気出せとは言ったけど、死ねなんて一言も言ってねぇぜ？」

霊・魔・咲・妖・アリ・レ・幽・紫「・・・・」

シューン

優は元の髪、瞳の色に戻る。

優「お前達は俺の邪魔をした罰として、異変解決を手伝ってもらう。嫌とは言わせない。」

霊「わかった、手伝ってあげるわよ…」

魔「たまになら…悪くないな。」

咲「手伝いなら任せてください。」

妖「この刀に斬れない物は…少ししか無い！」

レ「異変解決ね、問題無いわ。」

幽「なんだかおもしろそうね～。」

紫「異変を解決する側も、良いかもね。」

優「決まりだな…よし！行くぞ！」

その頃茜とアントニオンと慧音は…

茜「アントニオン何か見えない？」

ア「見えます、何かのお屋敷でしょうカ？」

慧「あれは永遠亭、あそこが異変の本拠地だ。」

茜「マジ？なら…」
「突撃～！！！」

ア「エッ？」

〜続く〜

第１５話　永遠に続く夜の異変　その３（後書き）

長いです…
しかもわからない漢字ばっかりで誤字ありです。わからないのでわかる方、教えていただけないでしょうか？
ちなみに次回は茜達が解決まで持ち込みます。

ではまた次回。

第１６話　永遠に続く夜の異変　その４（前書き）

今回は茜とアントニオンが頑張ります。
後、また新しい小説書いちゃいました。
タイトルは
魔戒騎士と魔剣士が幻想入り　です。
あのドラマとゲームが融合！て言うんですかね？
頑張っておもしろい物にしたいと思います。

ではどうぞ。

第１６話　永遠に続く夜の異変　その４

永遠亭の前にて

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

茜「突撃～！！！」

ア「エッ！」

茜はそう叫び、永遠亭の門を切り裂く。

シュン　シュンッ！！！

スパーー

ドドン！

茜「行くよ！アントニオン！」

ア「あ…ハイ…」

茜達は永遠亭に入った。

茜「広いなぁ～。」

ア「古き良き日本の御屋敷ですネ～。」

茜達がそんな事を言っていると…

ズボッ

茜「あっ…」

ドッ

「痛っ！」

茜は穴に落ちる。

？「あっはははははは！！！」

茜・ア「？」

どこからともなく笑い声がする。

？「引っ掛かった引っ掛かった～？」

ア「誰ですカ？」

？「あはは！人間はバカ　ウサね！こんなにわかり易い罠に引っ掛かるなんて。」

茜「バカ？それは誰に言っているのかな？」

茜は落とし穴からゆっくり浮き上がる。

？「ウサ？」

茜「誰に言っていると聞いているんだけど！！！」

茜「あ…茜さン？」

？「これはヤバいウサ…」

茜「疾走居合斬り？」

？「くらうウサ！」

兎の耳のついた少女は弾幕を放つ。

茜「効かない効かない？」

ズバン？

茜は弾幕を切り裂く。

？「弾幕が…！」

茜「斬！！！」

ジャキーン！！！

？「きゃあああああ？」

少女は吹っ飛ぶ。

ズサー

？「痛たた…」

トコ　トコ　トコ…

茜「命があるだけありがたいと思いなさい…」

？「人間に負けるなんて…」

シャキ…

茜は刀を少女の首に向ける。

茜「ここは？」

？「フンッ！」

シャキ

？「ウサ…」

茜「こ・こ・は？　（怒）」

茜は笑顔で聞くが、心が笑ってない。
茜は刀を首の前につける。

？「永遠亭ウサ…」

茜「あんたは？」

？「因幡てゐ。」

茜「この終わらない夜にしたのは誰？」

て「…言えないウサ…」

キッ

茜「言いなさい！」

茜はさらにてゐの首に刀を入れる。

て「し…師匠と姫様ウサ…」

茜「ありがと。」

茜は刀を首から離す。

て「はぁ…」

茜「アントニー、師匠と姫様とか言う人、探そう。」

ア「ハイ。」

茜達が再び歩き始めた。その時…

シュン！

茜・ア「？」

茜達の横を白い弾丸が通り過ぎる。

？「待ちなさい！」

目の前に現れたのはてゐと同じ兎の耳を付けている少女。

髪は青紫で、服装はブレザーにスカート。まるで学生の様である。

茜「何よ？」

？「ここから先は通さない！」

茜「通る、何と言われようと。」

？「なら倒すだけね。」

茜「望むところ！」

？「自己紹介しとくわ。私は鈴仙・優曇華院・イナバ　（れいせん・うどんげいん・いなば）よ。」

茜「私は大島　茜！」

鈴「行くわよ！」

ババババッ！

鈴仙は弾幕を放つ。

茜「能力・玄武！」

バシャーン！！！

茜は能力を使い、水の壁を張る。

ボボボッ

水の壁は弾幕を防ぐ。

鈴「じゃあ…」

鈴仙は目を閉じ…

鈴「これはどう？」

開ける。

鈴仙の瞳は赤く輝く。

茜「何のつもり？」

鈴「狂気の瞳！」

茜「な…何これ…」

茜は突然ふらつく。

鈴「私の目をあまり見ない方が良いわよ。」

「弱心　喪心喪意　（ディモチヴィエイション）　！」

鈴仙は赤い瞳を光らせながら茜に向ける。

バリーン！！！

茜「うあ！」

茜は瞳の特殊な力によって吹っ飛ぶ。

茜「くっ…」

鈴「狂気はまだ続くわよ。」

「幻惑　花冠視線（クラウンヴィジョン）？」

鈴仙は瞳を光らせると瞳から赤い波動の輪が放たれる。

茜「くぁ…くっ！」
「能力・白虎！」
「舞斬　朱雀炎舞？」

茜は能力を使い、神速の如く走り抜ける。
そして、朱雀で攻撃を仕掛ける。

茜「ふっ！！！」

ブン！

「えっ？」

鈴「どこを狙っているの？」

茜が攻撃した筈の鈴仙の姿が突然消える。

茜「何で？」

鈴「こっちよ！」

「波符　赤眼催眠（マインドシェイカー）！」

鈴仙は弾幕を周りに放つ。

茜「これくらいなら！」

茜は弾幕を避けようとすると…

ヴォーン

茜「ちょっ…えっ！」

茜は驚いた。
弾幕が二つずつに増えている。
通常より二倍多いので、茜は避けるのが厳しくなる。

茜「能力・朱雀！」

茜は能力で弾幕を消す。

鈴「耐え切れる？」

「幻朧月睨　（ルナティックレッドアイズ）　？」

鈴仙は瞳の力を解放し、赤い輪の波動を全体に放つ。

茜「範囲がすごく広い…けど、私の新技はそんな技なんかで終わらない？」

「空間斬　絶刀！！！」

茜は刀を鞘に入れ、抜刀の構えをする。

そして…

茜「はぁぁあああ！！！」

シュン！

茜の姿が消えたと同時に特殊な球体が鈴仙の前に現れ…

ジャ　キーン！！！

切り裂く。
鈴仙はギリギリでかわすが、脚に傷ができる。

鈴「何これ…」

ジャ　キーン！

ジャ　キーン！

ジャ　キーン！

特殊な球体から斬撃が現れる。
凄まじい速度と脅威の追尾の能力で鈴仙を追い詰める。

鈴「速い…！」

鈴仙は避け続けるが…

ジャ　キーン！

鈴「ぐぁ！」

ズバババババン？

「あああああぁぁぁ！！！」

鈴仙は絶刀の斬撃によって倒れた。

茜「服がボロボロな程度なら、大丈夫でしょ？」

鈴「・・・」

ア「茜さん、行きましょウ。」

茜達は再び歩き始めた。

茜「師匠と姫様って誰だろう？」

ア「あっ！茜さん！あそこに！」

アントニオンが指した方向を見ると…

？「客人かしら？…そうでは無さそうね。」

？「大方私達を倒しに来たんでしょ。」

茜「確かに…師匠と姫様だ…」

茜は納得のいった様子。
何故かと言うと、それは彼女達の姿にあった。
一人は銀髪を後ろでまとめ三つ編みをした、赤と青の服の女性。
もう一人は黒髪の雛人形のような髪形をした、いかにもな服を着た女性。いや…少女。

茜「んじゃ…あんた達がラスボスって事ね。」

？「そうね。」

茜「私は大島　茜。あんた達は？」

？「私は八意　永林（やごころ　えいりん）。」

？「私は蓬莱山　輝夜（ほうらいさん　かぐや）。」

優「じゃあ俺の名前も言っとくか？」

茜「優？」

ア「優さン？」

優「よう、待たせたな！　（ス〇ーク声）　」

永「誰あなた？」

優「俺の名は瀧沢　優だ。覚えておけ！」

輝「それで？」

優「茜、アントニー、今回は闘わなくて良いぞ。」

茜「どうして？」

優「援軍を連れて来た。」

優がそう言うと、後ろから…

霊「久しぶり。」

魔「よう！」

咲「あれからですね。」

妖「茜さん、また会えて嬉しいです。」

アリ「いたいた、サイボーグ少年。」

レ「これも運命かしら？」

幽「また会ったわね。」

紫「ま、ちょうど退屈してたとこだし。」

優「そう言う事だ。」

～続く～

第１６話　永遠に続く夜の異変　その４（後書き）

次回は霊夢達が闘います。
優達はしばらく休憩です。

ではまた次回。

第17話　永遠に続く夜の異変　その5（前書き）

今回は霊夢達の活躍ですね。
優達はほとんど出ません。

ではどうぞ。

第17話　永遠に続く夜の異変　その5

永遠亭にて

優「じゃあ、少し見てようぜ。」

茜「どれだけの実力を持っているか、この目でしっかり見ているからね！」

ア「あの…頑張ってくださイ。」

優達は少し離れて観戦するようだ。

霊「じゃあ、始めましょうか。」

永「そうね。」

魔「手加減はしないぜ！」

輝「こっちも、死んでも知らないわよ？」

霊夢と魔理沙は強い相手が目の前にいるためか、いつも以上に闘志が湧く。

ツツーー

タン！

庭にあるししおどしが音を鳴らすと同時に霊夢達は攻撃を始める。

霊「霊符　夢想妙珠！」

永「天丸　壺中の天地！」

霊夢は七つの弾を拡散するように放つ。
永林は霊夢に球を放ち、囲む。球から霊夢の逆の方向に大量の弾幕が放たれる。球から霊夢に向けて少し弾幕が放たれる。

永「ふっ！」

永林は七つの拡散弾を避ける。

霊「はっ！」

霊夢も自分に飛んで来る弾幕を軽く避ける。

魔「星符　メテオソニックシャワー！」

輝「難題　龍の顎の玉　－五色の弾丸－　！」

魔理沙は数多の星の弾を放つ。

輝夜は五色に輝く弾幕とレーザーを放つ。

魔「危ねっ！」

魔理沙は五色の弾幕とレーザーを避ける。

輝「ふぅ。」

輝夜も星の弾を避ける。

咲「そろそろ…」

「傷符　インスクライブレッドソウル！」

妖「私達も…」

「断霊剣　成仏得脱斬！」

アリ「行くわよ。」

「人魚　未来文楽！」

咲夜はナイフを持ち、神速で斬撃を繰り出すと、衝撃波が形となり、永林や輝夜を襲う。

妖夢は刀を思いっ切り斬り上げると衝撃波が永林に飛んで行く。

アリスは魔力で糸を作成し、一体の人形を動かし、輝夜に攻撃を仕掛ける。

だが…

永「こんな技で私は倒せないわよ。」

輝「全く、舐められたものね。」

永林と輝夜はあっさりと全てをかわす。

永「覚神　神代の記憶！」

輝「難題　仏の御石の鉢　－砕けぬ意志－　！」

永琳は大玉弾幕を後ろの１８０。全体に放ち、弾幕は前に放ち、さらに矢をレーザーのように高速で放つ。

たくさんの球を前の１８０。に配置、球からレーザーを放つ。さらに後ろから弾幕をゆっくり流すように放つ。

レ「私達を…」

「夜王　ドラキュラクレイドル！」

幽「わすれちゃ…」
「蝶符　鳳蝶紋の死槍！」

紫「困るわ。」
「結界　魅力的な四重結界！」

レミリアは永琳目掛け、高速回転しながら突撃。
幽々子は後ろに特殊な扇を展開し、そこから蝶のような弾幕を永琳と輝夜に放つ。
紫は結界を四重に重ね、魅力的な結界を輝夜に放つ。

永「さすが力が並じゃないわね。」

ボーーーン！！！

弾幕と弾幕がぶつかり合い、相殺。

輝「でも私達も強いわよ。」

そう言うと、レミリア、幽々子、紫の技を避ける。

霊「本気で行く！」
「神霊　夢想封印！」

魔「私も本気だ！」
「邪恋　実りやすいマスタースパーク！」

霊夢は七つの弾を永琳に放つ。
魔理沙は長細いマスタースパークを輝夜に放つ。

永「弾速が遅いわよ。」

輝「こんな攻撃で勝てると思っているの？」

永琳達が嘲笑していると…

霊・魔「舐めんな？」

霊夢と魔理沙が言葉を飛ばすと…

永「何？」

永琳は驚く。
避けた筈の弾がすぐ真後ろに迫る。

魔「ううおおおお！！！」

魔理沙は手に持つミニ八卦炉に力を注ぐと…

ブアーーーン！！！

長細いレーザーが超極太レーザーに変化する。

輝「何これ？」

永琳は七つの弾に直撃、輝夜は超極太レーザーに呑み込まれる。

ドギャーーーン！！！

霊「どうよ？」

魔「私の力を舐めるな！」

霊夢と魔理沙はガッツポーズをとる。
が…

永「…フフ、やってくれるわね…」

輝「こっちも本気を出すしか無いわね。」

霊夢と魔理沙の喜びもつかの間、永琳と輝夜は煙の中から現れる。
永琳と輝夜の服はボロボロで、相当な傷を負ったようだ。

永「天綱蜘綱捕蝶の法？」

輝「難題　蓬莱の弾の技　―虹色の弾幕―　？」

永琳は持っている弓で矢を放つ。
矢は神速で飛び交い、光を帯びる。
その矢の飛び交う姿はまるで蜘蛛の巣のよう。

輝夜は虹色の弾幕を大量に放つ。
避けるのも難しい程の速度と弾幕の量が霊夢達を襲う。

霊「うわ！」

魔「なっ！」

霊夢と魔理沙はギリギリで避ける。が、少しだけカスったようだ。

咲「危ない！お嬢様！」

レ「？」

咲夜は時を止め、レミリアを助け出す。

妖「幽々子様！」

幽「逃げるわよ！妖夢！」

妖夢と幽々子は遠くに離れて避ける。

紫「まいるわね…」

紫はスキマの中に入って避ける。

優「茜、アントニオン！掴まれ！」

茜「うん！」

ア「ハイ！」

シュン！

優は茜とアントニオンを掴み、瞬間移動で避ける。

霊「ならこっちも…」
「夢想天生？」

魔「最後の切り札だ！」
「魔砲　ファイナルスパーク？」

霊夢と魔理沙は最後のスペルカードを発動。
霊夢は陰陽玉を展開し、無敵状態になり、高速弾幕を放つ。

魔理沙はミニ八卦炉に全ての力を注ぎ込み、超全力の極太レーザーを放つ。

ズガーーーン！！！

力と力がぶつかり合い、大爆発が起こる。

霊「これで…終わったかしら？」

魔「だと…良いな。」

霊夢と魔理沙は全ての力を使い切ったため、床に座り込む。

永「…まだ…まだ終わってない。」

輝「永琳…あれを使うしか…無いわ…」

永琳は深く息を吸い込むと…

永「はぁぁあああああ！！！！！」
「禁薬　蓬莱の薬！！！」

永琳は全ての力を解放、矢を神速で放ち、弾幕を高速かつ大量に放つ。その弾幕の密度と弾幕の間の狭さはまさしく最終奥義。
だが霊夢と魔理沙は力を使い切り、立つことも出来ない。と、その時…

スバッ

優「良く頑張ったな、霊夢、魔理沙。」

優が現れ、霊夢と魔理沙の周りに波動のバリアを貼る。

優「行くか！」

スバッ

優は音速で飛び、弾幕や矢を簡単にかわす。

永「くらえ～？」

優「闇雲に撃って勝てると思っているのか？」

「飛龍　翔龍波！」

優は拳に力を溜めて波動の龍を放つ。

優「くらえ！」

波動の龍は永琳の弾幕を一切弾き、そのまま永琳を…

ガキン！！！

ジャキーーーン！！！！！

喰らい、貫く。

永「うぐ…ぐばっ？」

永琳は血を吐きながら倒れる。

輝「これで…最後よ？」
「永夜返し　－初月－　？」

輝夜は超大量の弾幕を全体に放つ。
弾幕の隙間が凄まじく狭く、攻め込む隙が無い。

優「さすが姫様だな。」

スバッ

優は音速で弾幕を避けながら輝夜に近づく。

優「この程度か？まだ行けんだろ！」

輝「くっ！」

「永夜返し　－丑の四つ－　？」

輝夜は弾幕を曲げながら放つ。先ほどとは違い、隙間はあるが、大玉弾幕がかなり飛んで来る。

優「さっきの技の方が良かったぜ。」

スバッ　スバッ

優は弾幕と大玉弾幕を軽く避ける。

優「どうした?弱いぞ?」

輝「負けない?」

「永夜返し　一寅の四つ一　?」

今度は一度大量の弾幕を放った直後、引いてもう一度放つ。大玉弾幕もたくさん飛び交う。

優「甘いぞ!」

スバン

優は音速で弾幕と大玉弾幕を再び避ける。

優「同じ手はくわない。本気の本気で来い？」

輝「最後…真の最後よ？」
「永夜返し　一世明け一　！！！」

輝夜は最後の最後…ファイナルスペルを発動。
大量の弾幕から少しずつ大きくなり、弾速も速くなり、そして小さくなり、最後には虹色の大量の弾幕が放たれる。

優「待ってたぜ！」

スパーン！

優は光速で弾幕の全てを避け、輝夜の目の前に現れる。

輝「…バカな……永夜返しが…」

優「お前の全てを俺は否定する。それだけだ！」

優は右手を構え…

バァン！！！

波動を放つ。

輝「うぅ…ぐ…」

輝夜は波動をくらい、倒れる。

優「恵みの波動。」

優は優しい波動を永琳と輝夜に放つ。

優「んじゃ、俺はまだやる事があるから…」

茜「どこいくの？」

優「ふっ…」

スバッ

優は微笑み、飛び去る。

～続く～

第17話　永遠に続く夜の異変　その5（後書き）

忙しいです…
次回はようやくＥＸＴＲＡです。

ではまた次回。

第１８話　永遠に続く夜の異変　ＥＸＴＲＡ（前書き）

今回はようやくＥＸＴＲＡ編です。
突然飛んで行った優はどこへ行く…

ではどうぞ。

第１８話　永遠に続く夜の異変　ＥＸＴＲＡ

～優視点～

慧「優～？」

優「？慧音！」

俺は慧音を見つけたので、慧音の所へ向かう。

優「慧音、どうした？」

慧「優、頼む！妹紅を止めてくれ！」

優「妹紅？誰だ？それ。」

慧「妹紅は私の友だ。あいつ、今日こそ輝夜を倒すと言った直後に力が暴走して…あちこちを火の海に変えてしまっているんだ。」

優「そいつはやべえな…けど、俺はちょうどそいつの所へ向かう途中だったんだ。」

慧「…そうなのか。」

優「ああ、永琳と輝夜を倒した後に危ない気を感じたんだ。」

慧「優、頼む、あいつを元の妹紅に戻してやってくれ！」

優「うん。」

優は頷き、妹紅の所へ…

ズバッ

ズギャーン！

飛ぶ。

妹紅の所へはそう時間はかからない。
俺のスピードにもよるが…

優「あれは…」

俺の目の先には炎を身体中から放つかなりヤバい少女がいる。
あれが妹紅だろうか…

優「お～い！妹紅～！」

？「ん？」

少女は振り返る。

優「反応したって事は妹紅だな。」

妹紅「誰だ！何故私の名前を知っている！」

優「お前の友人の慧音から聞いた。」

妹紅「慧音？だと？」

優「ああ、お前を止めろとな！」

妹紅「ふふふ…はっはっはっはっはっ？笑わせるな！お前のような人間が私に敵うと思っているのか？慧音も馬鹿な奴だ。」

優「ほう…俺に勝てると？」

妹紅「当たり前だ！お前など、この炎で焼き尽くしてやる！」

優「その言葉、忘れんなよ？」

妹紅「ふっ…何を言って…」

ズギャーーーン！！！

妹紅「な…何？」

優「ちょっと出して行くか…」

俺は気を思いっきり放つ。
ちょっと出すとあいつがどうなるか知らないが、まあ、少し力をセーブすれば良い。

～outside～

優「さあ、来い！」

妹紅「うぅおおおおお！」

妹紅は火の弾幕を放つ。

優「あっち～な、たく…」

優は熱がりながら避ける。

優「そう言えばお前のその髪、どうなっているんだ?」

妹紅「私のこの髪は蓬莱の薬を飲んだ事でこうなった。」

妹紅の髪は白い長髪、所々にリボンが付いている。それより…

優「蓬莱の薬?何だそりゃ?」

妹紅「あの輝夜のとこの永琳とか言う奴が作った薬だ。私はその薬を飲んで死なない身体を手に入れた。だが、死なない事程恐ろしい物は無い。死ななくても腹減る、傷を負えば痛い。この髪はそれによる結果だ。」

優「不老不死の薬、つまりは禁薬か…」

妹紅「説明は終わりだ！本気で行くぞ！」

「不死　火の鳥　－鳳凰天翔－？」

妹紅は火の弾幕と火の鳥を放つ。

優「よっと。」

サッ

優は火の弾幕と火の鳥を避ける。

妹紅「くらえ！」

今度は火の弾幕と火の鳥を大量に放つ。

優「数を増やしても意味無いぜ！」

スバッ

優は音速で弾幕の全てを避ける。

優「さっきまでの威勢はどうした？」

妹紅「くそ！」
「蓬莱人形！」

妹紅は側面から弾幕を配置し、放つ。
妹紅自身も弾幕を放つ。

優「忙しい弾幕だな。」

優は避け…

優「波動　　波動百烈拳！」

優は波動拳を百発　拳から放つ。
波動拳は弾幕を打ち消しながら進む。

妹紅「なっ…！」

ドバババババン？

優の波動拳がいくつか当たる。

妹紅「ぐっ…」

妹紅はダメージを負いながらも…

妹紅「リザレクション！」

妹紅はスペルカードを発動。
妹紅のダメージが回復していくのが見てわかる。

優「回復とか…」

妹紅「まだまだ！」
「蓬莱　凱風快晴　―フジヤマヴォルケイノ―！」

妹紅は弾幕を放つと同時に爆発を所々に起こす。爆発から弾幕が放たれる。

優「富士山大噴火ってか。」

優は弾幕を軽々とかわし、爆発も飛んで避ける。

優「さて、そろそろ本気だしたら？」

妹紅「は？」

妹紅は驚く。
きっと妹紅は本気などずっと前から出していたに違いない。

妹紅「バケモノが…」

優「飛龍　　翔龍波！」

優は拳から波動の龍を放つ。

ガキン！！！

ジャキーーーン！！！

妹紅「うがあああぁぁぁ…」

優「死なない奴に言われたくねぇよ。」

妹紅「リザレクション！」

妹紅は回復を行う。

優「来い？」

妹紅「はぁぁあああああ？」

「フェニックス再誕！！！」

妹紅は細かい弾幕を超大量に放つ。

弾幕と共に火の鳥を大量に放つ。

優「ふんっ！」

スバッ

優は音速で弾幕と火の鳥をかわし、妹紅の目の前に現れる。

妹紅「はぁ…！」

優「くらっとけ！」
「気爆　超爆発破！」

ズガァーーーン！！！

優は気を溜め、身体全体から気の大爆発を起こす。

妹紅「くそ…」

妹紅「…うぅ…」

優「目、覚めたか？」

優は妹紅を抱えていた。
妹紅の服は焦げてボロボロだ。

優「力はちゃんと制御できるようにしろよ。」

妹紅「…あぁ／／／／／」

妹紅は顔を赤くする。

優「飛べるか？」

妹紅「大丈夫だ。」

妹紅はオーバーオールのようなズボンのポケットに手を突っ込み、浮かぶ。

茜「優～～？」

ア「優さ～～ン？」

茜とアントニオンは優に向かって飛んで来る。

優「おう！」

茜「何してたの？」

優「もう一つの異変解決。」

霊「全く、いつも通りって感じね。」

魔「同じくだぜ。」

優「あれ？来てたの？」

慧「私も付いて来たぞ。」

優「慧音も？」

優の周りはいつの間にか賑やかになっていた。

優「さあて、帰るか。」

茜「そうだね。」

ア「帰ったら寝ましょウ。」

優達が帰ろうとした、その時…

ドクン！

優「あぅ！」

茜「？優？どした？」

ア「優さん？」

ドクン！

優「うっぐ…？」

霊「優？」

魔「どうしたんだぜ？」

慧「どうしたんだ？優？」

ドクン？

優「ううう…ぐぐ…？」

茜「優？」

優「…みんな…逃げろ…！」

慧「優？」

優「来るな！！！」

ア「優さん！」

ドックン？

優「うぅぅ…ぐうううぅぅ…！！！」

霊「みんな！優から離れて？」

魔「ものスゲえ力を感じるぜ…」

ドックン！！！

優「うあっ！！！」

優は力無く顔と腕をぶらりとさせる。

霊「来る！」

魔「ヤバい…これは…マジでヤバい？」

すると…

優「クックックッ…」

ズギャーーーン

優の身体からドス黒い気が放たれる。

優「フッフッフッ…」

優は身体を上げると…

優「ハ～ハッハッハッハッハッ！！！」

優の瞳は血の色に染まり、顔は真っ黒の業火に包まれる。

優「フゥーー…」

茜「…優？」

優「優？違う…俺は…狂鬼（きょうき）だ…」

優の顔だけが闇の炎に包まれている。
顔と思われる部位に鋭く細く、長く真っ赤な目が現れ、口はギザギザと、口が裂けたように開く。

優「さあ…」

「お前達を殺し尽くしてやろう…」

～続く～

第１８話　永遠に続く夜の異変　ＥＸＴＲＡ（後書き）

優の闇の力は最悪の被害を生む。
次回はみんなの奮闘です。

ではまた次回。

第１９話　目覚めてしまった究極の　闇（前書き）

前回、謎の状態に陥った優。
それは究極の闇の力であった。

ではどうぞ。

第19話　目覚めてしまった究極の　闇

～outside～

優「お前達を殺し尽くしてやろう…」

霊「茜！アントニオン！あなた達は助けを呼んで！」

魔「それまで私達がこいつを足止めしとく！」

茜「わかった！」

ア「わかりましタ！」

茜とアントニオンは大急ぎで助けを呼びに行った。

霊「慧音は妹紅と逃げて！」

慧「すまない…」

妹紅「死ぬなよ…」

慧音と妹紅は逃げて行った。

魔「しかし、あの時の優の張ったバリアが力をくれなかったら、私達は動けないままだったぜ。」

霊「ほんと、あれが無かったら茜達は大変な事になってたかもしれない…」

魔「だけど霊夢、こいつの力は果てしない。もし最初っから本気で来たら、あの世行き確定だぜ…」

霊「そんなの、やってみなきゃわからない！」

「神霊　夢想…「余所見しながら戦闘とは、なかなか勇気があるな。」え…」

優は音すら鳴らない程のスピードで霊夢の目の前へ。

霊「…う」

優「どうした？スペルカードを使え…」

優　（狂鬼）　はかなり低い声でそう言う。

霊「神霊　夢想封印？」

霊夢は焦りながらも発動。
七つの七色の弾を優に放つ。が…

優「フッフッフ…」

優は顔の黒い闇の炎を右腕にもつけ、闇の腕となった腕はあり得ない程長く大きく伸び、七つの弾を握り潰す。

霊「そんな…」

優「どうした？この程度か？」

魔「ならこれでもくらえ！」
「星符　ドラゴンメテオ！」

バァーーーン！！！

魔理沙は高く飛び、極太レーザーを優に向けて放つ。

優「ふんっ…」

優は闇の腕の手の平をレーザーに向ける。
すると…

ブオン！

優が闇の手の平を向けただけでレーザーが止まり、さらにレーザーは魔理沙に向かって跳ね返る。

魔「うわっ？」

魔理沙はギリギリで跳ね返るレーザーを避ける。

優「さあ、次は何だ？」

優がそう言った時…

ビシャーン！！！

優「何？」

闇の腕に痛みが走り、優は闇を顔を包んでいる炎に戻す。

優「拒絶反応か…」

優自身の身体が闇を拒絶したようだ。

優「まあいい、例え拒絶されても俺は消えない。俺は狂鬼、優では無い…」

優改め、狂鬼は闇の力をさらに強める。

霊「くっ…どうしたら…」

と、その時…

茜「霊夢！魔理沙！お待たせ！」

霊「茜！」

咲「待たせたわね。」

フ「フランも助けに来たよ♪」

レ「ピンチだって言うじゃない、仕方ないから助けに来たわよ。」

ア「すみません！少し遅れましタ！」

妖「大変そうですから助けに来ました。」

幽「まあ、暇じゃないけど助けてあげるわ。」

紫「私もついでに来たわ。」

霊「ありがとう！」

魔「安心するにはまだ早いぜ。」

レ「そうね、なんでも優が闇に支配されてしまったんでしょう？」

幽「闇ね～…恐いわ～。」

紫「目覚めてしまったのね…」

霊「こっからは力をフルに使わないとあいつに殺されると思って！」

茜・ア・魔・咲・フ・レ・妖・幽・紫
「うん！」

茜達が揃って頷く。と…

狂鬼「話しは終わったか？」

狂鬼が低い声で聞く。

霊「ええ、いつでもどうぞ。」

狂鬼「そうか、なら…」
「邪鬼　狂・撃咆哮！」

狂鬼はギザギザとした口を思いっ切り開け、
叫ぶ！

狂鬼「ギャアアアオオオオ！！！！！」

霊「うぅぅぅぅ…！！！」

魔「あああああ！！！」

茜「鼓膜が…千切れそう…！！！」

ア「ショート…しそうでス…！！！」

他のみんなも苦しむ。

狂鬼「行くぞ！」

「狂砲　滅殺波！」

狂鬼は口を開け、口の前に闇のエネルギーを溜める。

そして…

狂鬼「？」

ギュォーーーン！！！！！

狂鬼は口から暗黒の巨大な波動を放つ。

魔「魔砲　ファイナルスパーク？」

魔理沙は極太レーザーを暗黒の波動に向けて放つ。

ズバーーン！！！

しかし…パワーでは圧倒的に暗黒の波動の方が上だった。
魔理沙の放ったレーザーはあっけなくかき消される。

霊「夢境　二重大結界！」

紫「境符　四重結界！」

霊夢と紫は何重にも結界を貼る。

ズバーーン！

暗黒の波動が結界にぶつかる。

霊「…力が…強過ぎる？」

紫「ダメ…耐え切れない…！！！」

バリーーン！！！

霊夢と紫は力一杯防いだが、耐え切れず、結界が割れる。

レ「フラン！行くわよ！」

「神槍　スピア・ザ・グングニル？」

フ「ええ！お姉様！」

「禁忌　レーヴァテイン？」

レミリアはエネルギー収束させ、紅い長槍を作り、暗黒の波動に思

いっ切り投げる。

フランは剣に炎のオーラを纏わせ、暗黒の波動目掛けて思いっ切り振る。

ズガーーン！！！

スガガガガガ…！！！

二人の技が暗黒の波動にぶつかり、そして…

シュバーーーン！！！

二人の技がかき消されると同時に暗黒の波動も消える。

狂鬼「ほう、やるな。」

妖「はあっ？」
「断迷剣　迷津慈航斬！」

妖夢は刀にオーラを纏わせ、狂鬼に斬りかかる。

ガキン！！！

妖「なっ？」

妖夢の刀は余所見をしている狂鬼の手に防がれた。

狂鬼「後ろからの不意打ちはいけるとでも思ったか？考えが甘いんだよ？」

狂鬼は刀を握り…

ベキーン？

折る。

妖「か…刀が…」

狂鬼「じゃあな…」

「狂鬼　消えて無くなれ…　！」

狂鬼は両腕に闇を纏わせ、真っ赤な目を妖夢に向けて光らせる。

妖「あぁ…」

妖夢が石のように動かなくなり、そして…

狂鬼「ふんっ？」

狂鬼は闇の手を巨大化させ、妖夢を押し潰そうとした。その時…

幽「させない！」

「桜符　センスオブチェリーブロッサム！」

茜「妖夢！」

「空間斬　絶刀！！！」

幽々子は持っている扇を広げ、振り上げる。

すると、紫のエネルギーが狂鬼に突っ込む。

茜は刀を鞘に納め、姿を消すと、巨大な球体が斬撃を起こす。

狂鬼「チッ。」

狂鬼は攻撃に気づき、妖夢から離れる。

咲「さらに離さなければ…」
「奇術　エターナルミーク！」

咲夜は妖夢から狂鬼を遠ざける為、大量のナイフを投げる。

狂鬼「・・・」

狂鬼はナイフ避けずそのまま身体でナイフを受ける。
当たったナイフは刃の部分だけ潰れる。

幽「妖夢を今行くから…」

茜「はぁぁあああああ？」

茜はかなりの速さで妖夢のとこへ向かい、妖夢を抱えて行く。

茜「妖夢！起きて！」

妖「…あっ！茜さん！」

茜「良かった。」

狂鬼「さあて、そろそろ…」

と、その時…

ドクン！

狂鬼「うぅっ！」

狂鬼は苦しみ出す。

優「…頼む！早く攻撃を！俺を攻撃しろ？」

姿は狂鬼だが、声は優その物だ。

茜「みんな！スペルカードを！」

霊「夢想天生！！！」

魔「魔砲　ファイナルマスタースパーク！！！」

咲「幻葬　夜霧の幻影殺人鬼！！！」

レ「夜王　ドラキュラクレイドル！！！」

フ「ＱＥＤ　４９５年の波紋！！！」

妖「空観剣　六根清浄斬！！！」

幽「反魂蝶　一八分咲ー！！！」

紫「廃線　ぶらり廃駅下車の旅！！！」

みんなが総攻撃を狂鬼に行う。

狂鬼「ウゥゥヲオオオオオオ！！！」

パーーン！！！

狂鬼が優から剥がれる。

狂鬼「クソ～～～！！！！！」

ドギャーーーン！！！

狂鬼は大爆発を起こし、消える。

優「…はぁ…ありがとうな、助かったよ。」

茜「良いって事よ。」

ア「これで大丈夫ですネ。」

～続く～

第１９話　目覚めてしまった究極の　闇（後書き）

無事に狂鬼を倒した茜達。
だが、闇はまだまだ続く。
次回は萃夢想編です。
本当は永夜抄より前なんですよね…

ではまた次回。

第２０話　三日に一度の宴会の異変　その１（前書き）

さあ、萃夢想編です。
その異変の犯人は…

ではどうぞ。

第２０話　三日に一度の宴会の異変　その１

優達の住居にて

優「しかし、俺達も幻想郷の暮らしに慣れちまったな。」

茜「住めば都とはこの事だね。」

ア「あれからどれくらいの時間が流れて行ったのでしょウ。」

優「確かに、もう既に何ヶ月も経っているもんな～…学園で勉強してた頃が懐かしい。」

霊「優～！居るの～？」

優「おっとこの声は…ちょっと行ってくる。」

俺は障子に見える影へと向かう。

サーー

優「よう、霊夢。やっぱりお前か。」

霊「ちょっと来て。」

霊夢は手招きをする。

優「何だよ。」

霊「話しがあるの。」

優「話しだったらここで「大切な話しなの！」え～？」

霊夢は無理矢理俺の手を引っ張り、家から少し離れる。

優「何だよ本当に…話しって何だよ？」

霊「ここ最近、三日に一度宴会が行われているのは知っている？」

優「ああ、騒がしいのはその所為か。宴会をそんなにやって大丈夫なのか？」

霊「気にするのはそっちじゃない！おかしいとは思わない？こんなに宴会が開かれるなんて。」

優「確かに…で、それを俺に解決しろと？」

霊「ええ、犯人はきっと強い力を持った奴よ。だから私と一緒に解

決して。」

優「茜とアントニオンは？」

霊「連れて行ったら逆に茜とアントニオンが危ないわ。」

優「……わかった。俺もあいつらを失いたくない。一緒に犯人を見つけようぜ。」

霊「うん。」

優「じゃあ、茜とアントニオンには急用ができたとでも言っとくか。」

俺は住居に戻る。

優「茜！アントニオン！ちょっと急用ができたから出かけて来る！」

茜「急用って何？」

優「霊夢に仕事を頼まれたんだ。雑用に近いくらいの。」

ア「仕事ですカ？」

優「ああ、じゃあ行ってくる。」

茜「いってらっしゃーい！」

ア「頑張ってくださイ。」

俺は今日初めてあいつらに嘘をついたかもしれない。
今までは本当の事しか言った事がなかったから、はっきり言って辛い…

優「行こうぜ。」

霊「ええ。」

俺と霊夢はまず、犯人の手掛かりを探る事に…

優「…何だ？妖気を感じるぞ。」

霊「私だって同じ。でも何だかわからない。」

優「おい！隠れているんなら堂々と出て来たらどうだ？」

霊「ちょっと、優！」

優「そこか…」

「あのな、誰だか知らねえけど、お前が犯人だろ。」

霊「？妖気が…」

優「隠れて様子を見ているとは、悪趣味だな。」

霊「妖気が消えた？」

優「行くぞ。」

まず向かったのは魔理沙の家。
森にあると聞くが迷いそうで気になる。

優「ここか…」

コンコン！

ドアをノックすると…

ガチャ

魔「うい、？あれ？優に霊夢じゃねえか。どうした？」

優「最近、三日に一度、宴会が行われているのを知っているか？」

魔「宴会か？宴会なら一昨日やったぜ。いや～楽しかったな～。」

霊「そうじゃない。おかしいと思わないの？三日に一度なんて普通有り得ないのよ？」

魔「そう言う霊夢も一昨日一緒に飲んでたじゃねえか。」

優「…はい？霊夢、お前どう言う事だ？」

霊「・・・」

優「まあいいや、とにかく何か知っているわけじゃないんだな？」

魔「ああ…そう言えば…あの時…変に妖気が高かったな。何か妖怪が暴れているのかとは思ったが、酔っている私達は何とも思わなかったな～。」

優「それ以外わからないと？」

魔「サッパリだ。」

優「そうか、悪りぃな。」

魔「まあ、お陰で暇が潰せた。」

優「じゃあな。」

魔「ああ。」

結局情報と言えば妖気が高まった事だけ…
俺達はアリスの家に行く事に…

優「魔法の森？アリスの家がそこにあんのか？」

霊「そう。」

優「大抵の魔法使いは森に住んでいるのが当たり前なのか？」

霊「さあね。」

話しをしていると、何やら入り口らしきものが…

優「こっから魔法の森か。」

霊「見えてきたわ。」

かなり西洋の感じの家が見えた。
フランスやらイタリアとかにありそうな家だ。
と、アリスが帰りの途中なのを見つけた。

霊「アリス！ちょっといい？」

アリ「何よ？」

霊「最近起こっている三日に一度の宴会の事で、聞きたいのだけど。」

アリ「宴会？」

霊「好きそうでも無いあんたが何故ここ最近よく来るのか気になっているのよ。」

優「何か変な事が無かったか知らないか?」

アリ「……あの時妙に妖気が高まった事かしら?それ以外思い当たらないわ。」

優「そうか…だってよ。」

霊「ふ~ん…まあいいわ。」

優「じゃあな。」

アリ「ええ。」

同じく情報は妖気のみ…
休憩に博麗神社に行く。

優「ふぅ…成果無しか…見つかるのかね？」

霊「さあね、そのうち良い情報が出るわよ。」

優「そうだな。……霧？しかも、あの時の妖気…」

霊「一体…？」

すると、空から誰か飛んで来る。

優「？あ、お前…」

妖「どうも、こんにちは。」

優「妖夢か、何処か行くのか？」

妖「はい、買い物で出掛けてたんですけど、優さん達を見かけたので、挨拶しに来ました。」

優「挨拶だけでわざわざ、別にいいのに。」

妖「いえ、挨拶が真面にできなければ、剣の道を極めるのは無理だと思っていますので。」

優「流石だな。お前には頭が下がるよ。」

霊「ちょうどいいわ、あなたはここ最近の宴会の事だけど、何か知らない？」

妖「宴会ですか？いいえ、存じませんが…」

霊「どうだか、大抵宴会に来てない奴程怪しいのよね。」

優「霊夢、疑うのはやめろ。じゃあ、何か知っている事無いか？」

妖「…そうですね…私が庭の掃除をしていたら、強い妖気を感じました。冥界にも届くなんて、余程の力の持ち主で無い限り、あり得ません。」

優「それ以外は？」

妖「すみません、全く…」

優「謝らなくていいよ、協力してくれただけでも嬉しいから。」

妖「あ、…はい。では、私はこれで。」

優「ああ。」

妖夢は飛んで行った。

優「努力家だな。」

霊「そうだ、紅魔館へ行こう。」

優「J○　東○…じゃ無かった、何で紅魔館へ行くんだ？」

霊「この霧が怪しいのよ。霧と言えば紅魔館。優が解決した異変。レミリア達が怪しいわ。」

優「何でも疑えば良いってもんじゃ無いだろう。」

霊「いいから行くわよ！」

優「全く…」

霊夢はレミリア達を怪しく思い、紅魔館へ…

霊「着いた。門番、通るわよ。」

紅「ええ?ち、ちょっと?何ですか?いきなり?」

優「実は、三日に一度の宴会の事で情報を集めてたら妖気を持つ霧が発生して、その霧で霊夢がレミリア達を怪しんだんだ。あの時の事もあるからな。ゴメン。」

俺と霊夢は門を通り、紅魔館へ入った。

霊「行くわよ。」

優「はいはい。」

紅魔館に入ってから少し歩くと咲夜が現れる。

霊「邪魔してるわよ。」

咲「ちょっと待って頂けますか？」

優「すまん！お前、三日に一度の宴会の事、知っているか？」

咲「はい…」

優「実はその情報を集めてたら妖霧が発生して、霊夢がレミリア達を怪しく思ったんだ。すぐ終わるから、ゴメン。」

俺は咲夜を説得して、霊夢の後を追い、レミリアの部屋へ…

ガチャ！

レ「入る時くらいノックしたら？」

霊「良く聞きなさい！あなたは今回の宴会の異変の事を知っているか、もしくは犯人なのか！はっきり言いなさい！」

レ「？」

優「ゴメン、説明も面倒いので能力で悟ってくれ。」

レ「……なるほど、フフフ…ウッフッフッフッ、アッハッハッハッハッ！」

霊「何がおかしいのよ！」

レ「あなたはまだ犯人がわからないでいるの？呆れた、あなたはそれでも博麗神社の巫女なの？」

霊「…くっ！」

優「霊夢！…あそこまでキツく言わなくたって良いだろ！」

レ「いいのよ、霊夢はプライドが高いから、あれでかなりムキになって異変解決に近づくでしょうね。」

優「レミリア…お前…」

レ「行きなさい、霊夢を助けてあげて。」

優「わかった。」

レミリアは全てわかっていた。
俺は霊夢の後を追う。

優「霊夢！」

霊「・・・」

優「霊夢、何怒ってるんだよ。」

霊「絶対に犯人を見つけてやるんだから。」

優「ふぅ…たく、らしいっちゃ、らしいな。」

霊「神社に戻って、異変が起きてから解決するわよ。」

霊夢は異変が起きてから解決すると言う。
レミリアの言葉が効いたのだろう。

優「あれ?何これ?」

俺は目を疑った。
博麗神社だけ昼と夜が半々だ。

霊「……！紫！あんた何してるの！」

紫「あら、異変が解決しないようだから手伝ってあげているのよ。」

優「へ？手伝い？昼夜半々にするのが？……まさか何か狙ってやっているのか？」

紫「御名答。これを見て。」

優・霊「？」

俺と霊夢は言われた通り、指す方を見る。すると、空間に何者かの姿が…

優「これが…犯人…」

霊「優、行くわよ！」

優「待て、良い方法がある。」

霊「何？」

優「掴まれ。」

俺は霊夢に手を差し出す。

霊夢は顔を赤くしながらも、手を掴む。

優「行くぞ！」

シュゥン！

良い方法とは、瞬間移動だ。
詳しくは　第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？　を見てくれ。

シュゥン！

優「着いたぞ。」

霊「？あれは…」

？「？」

優「お前、一体何者だ？」

？「私かい？私は…」

「伊吹　萃香（いぶき　すいか）だ。」

～続く～

第２０話　三日に一度の宴会の異変　その１（後書き）

会話ばっかりですね。
次回はバリバリの戦闘です。

ではまた次回。

第２１話　三日に一度の宴会の異変　その２（前書き）

鬼ＶＳ人間の戦い再び…
正々堂々　拳と拳のぶつかり合い…

ではどうぞ。

第２１話　三日に一度の宴会の異変　その２

おそらく草原にて…

優「伊吹　萃香…　お前は一体何者なんだ？」

萃香「鬼さ。」

優「鬼？」

幼女の姿は捻れた長い二本角…
手首には鎖が付いている。

優「確かに、格好で鬼だとわかるな。」

霊「三日に一度、宴会をさせているのはあなたね。」

萃香「そうだけど？」

霊「一体どうやって？」

萃香「気づかなかった？あの霧。」

霊「…もしかして！あの妖霧が？」

萃香「そう、私の能力は
（密と疎を操る程度の能力）、私は密を操る事で身体を変えられるんだ。」

優「ふ～ん…で？そんなのとっくにわかってたよ。」

萃香「…なかなか勘が良いんだな。」

優「勘？勘だけに勘違いしてないか？」

萃香「？」

優「霊夢、こいつは俺に退治させてくれ。」

霊「……わかった。」

霊夢はそう言うと、後ろに下がる。

優「俺がお前の能力に気がついたのは、お前の妖霧が理由だ。どう感じても形ある者の気を感じた。幽霊などの妖霧じゃない。」

萃香「感じたか…まあいいさ、とっとと始めるよ。」

優「行くぜ…っ！」

ダッ！

優は素速く走り、萃香に飛び蹴りを放つ。

萃香「ふんっ。」

ブン！

萃香は飛び蹴りをかわし、優の腹目掛け、正拳を繰り出す。

ドガッ！！

優「ぐっ…！！」

優は正拳をくらい、横の状態で吹っ飛んだ。

ズドッ！

優「くぅ…なんて力だ…」

萃香「人間如きに鬼は負けないよ。」

優「鬼には豆まきが良いと聞いたが、持って無いから意味無いや…」

萃香「じゃあ私を倒す術は無いって事ね。」

ダッ！

萃香は神速で優に向かって高く跳び…

萃香「萃符　戸隠山投げ！」

萃香は手に石を集め、巨大な石の塊を作りだし、優に投げる。

優「全く、すげえ能力だ。」

優はしゃがんだ状態から地面蹴り、横に避ける。

萃香「なかなかやるね。」

優「気になったんだけど、鬼って妖怪と同じなんだろ？」

萃香「鬼を妖怪と同じと思っているのか？あっはっはっはっはっ！！！妖怪と一緒にするな。我が群隊は百鬼夜行、鬼の萃まる場所に人間も妖怪も居られん！」

優「鬼はそんなに強いのか…」

萃香「鬼の強さをその身を持って味わえ！」

「鬼火　超高密度燐禍術！」

萃香は両手を掲げ、巨大な炎の球を作り出し、優に投げる。

優「ヤバそう…」

優は後ろに跳んで避ける。が…

ボボン！

炎の球はバウンドし、小さい炎の球となって拡散する。

優「なっ？」

ボォン！

優「あっぢ～～～！！！」

優は小さい炎の球をかなり浴び、服が燃える。

優「あちゃちゃちゃちゃちゃちゃ…っ！！！」

ボサッ！

優は草に転がり、服の火を消す。

優「あ～っち～。くそ～シャツが黒焦げじゃないか！」

萃香「知るか！」

優「まあいっか、幸いズボンは燃えてないし。」

ちなみに優はいつも学校服で闘っていた。
茜やアントニオンも同じく。

優「さあ、拳で行くぜ！」

スバッ

優は音速で萃香に近づき、拳で殴る。

ドガッ！

ところが…

優「なっ？」

萃香「それで攻撃のつもりかい？」

萃香は顔面を殴られたにも関わらず、平気で立っている。

萃香「攻撃はこうすんだ！」

ベギッ！

優「ぶおっ！！」

優は萃香に顔面を殴られ、吹っ飛ぶ。

萃香「そら！」

ズガッ！！！

優「…！！！」

萃香はさらに追撃として両手を合わせて優の腹にハンマーパンチをぶつける。

ズガン！！！

優は地面に叩きつけられる。

優「…！」

スタッ

優は体制を直し、立つ。

萃香「さあ、そろそろ終わりにするか！」

「鬼符　大江山悉皆殺し！！！」

萃香は優の足首を掴む。

優「！？」

萃香「そぉぉらあああ！！！」

萃香は優の足首を掴んだまま高く跳び、着地と同時と優を叩きつける。

ドガン！！！

優「ぐはっ！！」

萃香「まだまだ！」

ドガン！！！

優「ぬっぐ…っ！！！」

萃香「うぉおおおりゃぁぁぁあああ！！！」

ドガァーーーン！！！

優「ぐう！！！…」

何度も叩きつけた後、空高く跳び上がり、思いっ切り優を地面に叩きつける。

優の叩きつけられた勢いで地面が割れる。

優「・・・」

萃香「ふぅ…」

萃香は背中に掛けていた瓢箪の中身を飲む。

ゴクゴク…

萃香「はぁ…久しぶりに良い闘いをしたよ。」

霊「萃香、あなたの負けよ。」

萃香「負け？お前の目は節穴か？よく見てみな、あの通りさ。それとも、お前が闘うのか？」

霊「まだわからないの？もう一度後ろに目を向けて見なさい。」

萃香「見たって意味無い……まさか…そんな…」

萃香は優に視線を移した。と、その後に持っている瓢箪を落とす。

優「う～ん…絵本にも聞いた通り、鬼は強いな～。」

優は首をゴキゴキ鳴らしながら起き上がる。

優「少し力を出せば簡単にお前の力を上回れるな。…はぁぁぁあああああ！」

ズギャーーーン！！！

優は気を身体から放つ。
その気は凄まじい程の勢いと爆発力がある。

萃香「この力…一体、何？」

優「鬼も知らない、力…鬼も敵わない相手…それが俺だ。」

萃香「くそ！」
「萃鬼　天手力男投げ！」

萃香は優を再び掴み、能力を使って石を集める。が…

萃香「！？何故？何故萃まらない？」

優「言い忘れてた、俺の能力は
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）　だ。お前の萃める力は全て　無　だ！」

萃香「何？」

優「ふんっ！」

優は萃香の掴みから抜けると、身体を縦に一回転させて…

優「そぉぉぉおおおれぇ！」

ズガッ！！！！

かかと落としを萃香の肩に叩き込む。

萃香「おぅ…ッ！！！」

ズゴォーーーン！！！

萃香は凄まじい勢いで地面に顔から激突する。

優「どうした？鬼の力見せて見ろよ。」

萃香「ぐっ…なら、見せてやる！」

「鬼神　ミッシングパープルパワー！！！」

萃香は突然一気に巨大化した。

萃香「くらえ！！！」

萃香は巨大な拳を優に向けて放つ。

優「ふんっ…」

ガシッ！

萃香「…そんな…バカな！？」

優は萃香の巨大な拳を片手で受け止める。

優「デカくなってもこの程度か…」

「ふんっ！」

優は萃香の拳を押し返すと…

優「くらえ！」

「波動拳！」

優は拳に青い波動を溜め、その光が自分の顔を覆う程の大きさにな

った瞬間…

優「特別技だぜ。」
「特大波動拳！！！」

優は萃香に向けて拳を放つ。
すると、光が巨大な波動の弾となり、萃香に向かって一直線に飛んで行く。

萃香「くっ！」

萃香は腕を交叉させ、特大波動拳を防ごうとする。

バン！！！

ゴゴゴゴゴゴ…

特大波動拳は萃香の腕にぶつかり、萃香に向かい続ける。

萃香「くく…く…何？この力は？」

ゴゴゴゴゴ…

優「終わりだ…っ！」

シューーー…

萃香「!?」

ドギャーーーン!!!

萃香「ぐあああぁぁぁぁあああああ!!!」

特大波動拳は萃香の目の前で青い大爆発を起こす。

シュルルルル…

萃香の巨大化が解け、元のサイズに戻った。
そして、グッタリと座り込む。

萃香「く…」

優「今は鬼が人間に勝てる程、世の中上手く成り立って無いんだよ。」

萃香「強いな…お前、名前は？」

優「瀧沢　優だ。またの名を…（最強の外来人）　…」

萃香「　（最強の外来人）　…か…　道理で強いわけだ。」

霊「萃香はとりあえず、私が面倒をみるわ。これで一件落着ね。」

優「ああ、そうだな。」

優と霊夢は互いに笑顔を交わした。
そして優は茜とアントニオンのもとへ戻った。

〜続く〜

第２１話　三日に一度の宴会の異変　その２（後書き）

萃夢想編　　完

次回は花映塚編です。

ではまた次回。

第２２話　咲き荒れる花の異変　その１（前書き）

花映塚編…
来ましたね…
優と同じ、いやそれ以上か…
最強の妖怪…

ではどうぞ。

第２２話　咲き荒れる花の異変　その１

優達の住居にて…

あの時の異変以降、萃香は霊夢の神社に住み着いたそうだ。
霊夢はなにやらウザそうだった。

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

優「なぁ…茜…その後ろのカッコイイ奴は何なんだ？」

茜「これ？紹介してなかったね、朱雀と玄武と白虎と青龍だよ。」

優の目の前には青い龍に白い虎、朱い鳳凰に黒い亀が居た。

朱雀「どうも初めまして、私は南ノ朱雀と申します。」

朱い鳳凰、朱雀。
声は優しい女性を感じさせる。

玄武「わしは北ノ玄武と申す。」

黒い亀、玄武。
声は頑固親父を感じさせる。

白虎「僕は西ノ白虎です。」

白い虎、白虎。
声は若い男性を感じさせる。

青龍「俺は東ノ青龍。」

青い龍、青龍。
声はクールな人を感じさせる。

茜「どう？凄いでしょ？」

優「何かカッコイイ…」

玄武「若者よ、お主の名は何と申す。」

優「俺？俺は、瀧沢　優。」

朱雀「では優さんと呼ばせていただきますね。」

白虎「優さん、これからよろしくお願いします！」

青龍「ところで、茜様から聞いた話しでは、お前は大層強いと聞く。それは本当なのか、試させてもらおうか。」

優「茜様って…　て言うか試す？戦闘フラグすか？」

青龍「行くぞ！」

優「ちょ待て！」

「波動！」

バォン！

青龍「ぬぉっ！！…何？」

朱雀「青龍、やめといた方がよろしいですよ。彼は常人の１００倍の身体能力を持つのですよ。」

白虎「１００倍？優さん凄いや…」

優「いや、１００倍は言い過ぎだけど、確かにそれくらい強いよ。」

青龍「なる程、人間を超えたその力、そのままにして置くのはもったいない。」

玄武「お主も神になれば良い。」

優「なれるか！」

茜「玄武に青龍、少し黙って。」

青龍「す、すみません、茜様。」

玄武「申し上げありませぬ！」

優「・・・」

ア「あの～…」

優「？どうした？アントニー。」

ア「外が大変な事ニ…」

優「何だって？」

優は障子を開ける。

サーー

優「…何だよ、この花の量は…」

茜「異変だね。」

優「ああ。」

優達の目の前には見事に咲き誇る…　いや、咲き荒れる花畑が拡がっていた。

玄武「霊が花となって出て来ていますぞ。茜様。」

朱雀「これは一体何故…」

優「よし、行こうぜ！みんな！」

茜「みんな?今までみんななんて言わなかったのに。」

優「朱雀、玄武、白虎、青龍。こいつらも仲間だからだ。」

朱雀「ありがたき幸せ。」

白虎「仲間!やった~!仲間だ~!」

玄武「仲間とは…良いものよの~…」

青龍「ふっ…なかなか嬉しい事を言うじゃないか。」

優達はそんな四聖獣を連れ、異変解決へと向かった。

優「どこもかしこも花だらけだな。」

茜「そうだね。」

ア「花はとても良い物なんですガ…」

優達が歩きながら会話していると…

？「あの～？」

優「はい？」

？「取材をよろしいでしょうか？」

茜「どなた？」

？「はい！私は、射命丸　文（しゃめいまる　あや）、新

聞記者です。」

少女は背中に黒い大きな翼を持ち、頭には赤いチョコンとした帽子がある。

優「新聞記者？幻想郷にも新聞社があるのか？」

文「はい、勿論です！早速なんですが…」

優「あ、はいはい。」

文「あなた達のお名前を教えていただけますか？」

優「俺は瀧沢　優。」

茜「私は大島　茜。」

ア「アントニオン・ライブラリーでス。」

文「できれば年齢、身長、二つ名もよろしいてすか？」

優「あ、年齢や身長も…」

ア「じゃあ、僕達が記入すれば良いのでハ？」

茜「そうだよ、わざわざ言うのも面倒臭いし。」

優「そう言い事だけど、どう？」

文「…まあ、よろしいでしょう。はい、ちゃんと丁寧に書いてくださいね。」

～1分後～

優「はいよ。」

文「ありがとうございます。…ふむふむ、なかなか良い二つ名で。」

優「ありがとう。」

文「ではまず、あなた達が幻想郷に来た理由とは？」

優「理由なんて無いよ。そもそも、全部紫がやった事だし…」

茜「私達は勝手に連れて来られたの。」

ア「僕達は何も…」

文「なる程なる程…　では、あなた達は今、何をしていらっしゃるのですか？」

優「幻想郷に来てからは異変解決を行っているよ。」

茜「今までの異変はぜ～んぶ私達が解決したんだよ。」

ア「助けてもらった時もありましたガ…」

文「ほぅ～…　では最後に、あなた達の好きな食べ物は？」

優「はい？食べ物？食べ物は…カレーかな？」

茜「スパゲッティ！」

ア「僕は白いご飯でス。」

文「なる程…　ありがとうございます。これで良い記事がかけそうです。」

優「俺らので良ければなんでも。」

茜「また取材に来なよ。」

ア「いつでも構いませんヨ。」

文「ありがとうございます。では私はこれで…」

文は黒い翼を広げ、飛んで行った。

優「じゃあ、先進もうぜ。」

優達がしばらく歩いていると…

優「?何だ?この毒の臭気。」

朱雀・玄武・白虎・青龍「茜様!危ない!」

茜の周りが四聖獣のオーラで包まれる。

茜「毒？」

ア「花の毒でス。」

？「まぁ、人間とは珍しいわ。」

優「誰だ？」

？「私はメディスン・メランコリー。」

少女は背中には羽があり、となりには小さい妖精のような同じ格好をした者が…

メディ「私の毒を吸っても平気なの？」

優「ああ、俺には毒だろうがなんだろうが効かない。」

メディ「おもしろいわね、じゃあ良い事教えてあげる。」

優「良い事？」

メディ「この異変の原因はあの世にあるわ。無縁塚に行くとあの世に行けるわ。」

茜「でも、あの世って事は…私達死んじゃうじゃん？」

メディ「大丈夫よ。多分。」

優「まあ、とりあえずサンキュー。」

メディ「じゃあね。無縁塚はその先よ。」

優達はメディスンが言った無縁塚へ向かった。
しばらく歩いていると…

優「？」

優は異様な殺気に気づく。

茜「どうした？優。」

優「ちょっと気になる用事ができた。先に行ってくれ。」

茜「…わかった。」

ア「それじゃあ、先行きまス。」

優「ああ。」

茜達が進み、見えなくなった瞬間、さらに殺気が強くなった。

優「…凄え殺気だ。」

優は殺気を探ると…

優「!?」

?「・・・」

緑髪の女性が赤い眼で優を睨んでいる。
表情は至って笑顔だ。

?「ウフフ…」

女性は笑いながら優に近づく。

優「何か用か?」

？「ええ、勿論。」

優「…たく、俺ってついてないな…」

？「酷い顔ね、親の顔が見てみたい。」

優「ニキビも無ぇし、顔もあまりブサイクだとは思わない。つか誰だよ。」

？「風見　幽香（かざみ　ゆうか）。あなたは？」

優「瀧沢　優だ。俺と闘うんだろ？」

幽香「えぇ。あなたの力、噂では相当強いそうね。」

優「はぁ…　ついてねぇ…」

幽香「ウフフ…」

優「お前、本当についてねえよ…っ！」

～続く～

第２２話　咲き荒れる花の異変　その１（後書き）

ついに来た！
優ＶＳ幽香！
これを待っていた！

ではまた次回！

第２３話　咲き荒れる花の異変　その２（前書き）

最強の外来人
四季のフラワーマスター
相手にとって不足無し！

ではどうぞ。

第２３話　咲き荒れる花の異変　その２

咲き荒れる花の畑にて…

優「お前、本当についてねえよ…っ！」

スバッ

優は音速で幽香に近づき、拳を繰り出す。

幽香「本当についてないわね…」

サッ

幽香「あなたって本当についてないわね。」

優「な、何？」

ズゴッ！！

幽香は避けざまに優の背中にエルボーの一撃を繰り出す。

優「が…ッ！！！」

幽香「ウフッ…」

ドゴッ！！

幽香はさらに膝蹴りを優の腹に打ち込む。

優「ごぅ…ッ！！」

幽香「ウフフッ…」

ドゴッ　ドゴッ！！！

幽香はまたさらに膝蹴りを連続で打ち込む。

優「ごはっ…はがっ！！！」

優は痛みに耐えるものの、声が漏れる。
また膝蹴りが来ると、今度は腕で防ぎ、背中に掛かっている幽香の

手を退かし、幽香の顔面目掛けて拳を繰り出す。

ドガッ！！

幽香「…ッ！！」

幽香は頬に来る一撃に驚く。

優「反撃開始だ！」

優はまず避けを誘う為に右正拳を放つ。

サッ

優から見て左に正拳を避けた幽香に優は足でブレーキを掛け、ブレーキを掛けた足でバックと同時に左の裏拳を顔面に放つ。

優「気ぃ抜くな！」

バキッ！！！

幽香「う…ッ！！！」

直撃。幽香は少し怯む。
優はバックを止めて直後に回し蹴りを繰り出す。

ズガッ！！！

幽香「ぐぅ…ッ！！！」

優「さて、ちょっと出すか！」

ズギャァーーーン！！！

優は身体から気を放ち、力をちょっと解放する。
説明をしたと思うが…
最弱　弱い妖怪を一撃

ちょっと　中級妖怪を一撃

少し　鬼を倒せる

本気　誰にも負けない

そして新しく登場した力が…

超化　幻想郷ブレイカー

真・超化　全宇宙崩壊

ここまで来るとチートを超えてバグを起こす…

幽香の腹に回し蹴りで吹っ飛ばした後、ちょっと力を解放し、音速で突っ込み、アッパーを繰り出す。
が…

幽香「あまり調子に乗らない方が身の為よ。」

優「何？」

幽香は足を振り上げ、かかと落としを優の肩に叩き込む。

ズゴッ！！！

優「うぉ…ッ！！！」

ズガーン！！！

優はかかと落としを真面にくらい、地面に激突する。

優「くっ…痛～…」

幽香「なかなかやるじゃない。」

優「まあ、それなりに異変解決してますし…」

「つか、よくそんな長いスカートで闘えるな。」

幽香「慣れよ、慣れ。」

優「そのままじゃズルいからハンデやるよ。」

幽香「ハンデ？」

優「飛行無し。ただしジャンプはするぞ。
後は足で攻撃をしない。これでどうだ。」

幽香「お好きにどうぞ。」

優「よし、じゃあ改めて…」

「行くぞ！」

スバッ

優は幽香に近づき、拳を繰り出す。

幽香「じゃあ…」

幽香が手を動かすと、突然花が優に向かってのる。

優「なあに？」

優は伸びる花を避ける。

がつかの間、再び別の花が伸び、優を縛る。

優「あら～！」

「？」

優はここでふと気づく。
花は全て向日葵だったのだ。
（こいつは花の妖怪か…とすると能力は花を操る能力か…）
優は幽香の特性に気づく。
そして…

優「うぁぁぁあああぁぁぁぁぁああ！！！」

ブチッ

ブチブチッ…

ブチン！！！

優は花の縛りを解く。

幽香「やるわね。」

優「そろそろ本気出したらどうだ？」

幽香「あなたに本気で挑む必要は無いわ。」

優「へっ？」

幽香「あなた弱いもの。」

スバッ

幽香は優にそう言い放つと速攻で近づき、サイドキックを放つ。

ズガッ！！！

優「うぉぉ…ッ！！！」

幽香「まだまだね。」

幽香は拳を優の腹に打ち込む。

ズガッ！！！

優「うぐっ！！」

さらに右の回し蹴りを当て、優を浮かせた後、回し蹴りの勢いをそのままに跳んで、左の後ろ回し蹴りを繰り出す。

ズガッ！！！

ズガン！！！

優「うぅ…ッ！！！」

が、優は連撃を受けたが、空中で体制を立て直す。

優「はぁ強いな！いてて…これはダメージがデカイな…」

幽香「まだ元気が残っているのね。」

優「まあな…」

幽香「なら…これでも元気が残っている自身があるかしら？」

幽香はそう言うと、地面に刺さっていた傘を引き抜き、青い光を傘先に溜める。

シュオーー…

優「何だ…？」

「攻撃してみるか。」

優は着地し、傘を攻撃してみる。

だが…

ボン！

優「なっ！何て強度だ！」

幽香「終わりよ。」
「魔砲　マスタースパーク！」

優「マスタースパーク？」

シューン…！

バァーーーン！！！！

傘先の青い光のエネルギーは、魔理沙に引け劣らない極太レーザーになり、放たれる。

ズオゥーーー！！！

優「う…くくく…うぐっ…ぐ…ッ！！！」

優は幽香のマスタースパークを受けているが、辛うじて耐えている。

幽香「耐えるじゃない。でもこれで…」

「終わりよ！！！」

バァーーーーン！！！！！

幽香はさらに力を込め、マスタースパークの威力を高める。

優「ぐっ…くそ…」

「うぅぅあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああ！！！！」

優はついに耐え切れなくなり、マスタースパークに呑み込まれる。

幽香「……さよなら。」

優は地面に仰向けで力無く倒れてた。
服はボロボロで、身体も傷だらけ。
絶大なダメージを負った優は一切動く気配は無かった。

幽香「せめて花の一つでもあげましょう。」

幽香は土をすくい、花を咲かせる。
そして咲かせた花を優の胸辺りにそっと置いた。
そしてその場から去ろうとした。その時…

優「へ～、意外と優しいんだな。」

幽香「……！？」

幽香はその一言で硬直した。
身体もボロボロなのに対して平然と置かれた花を眺める。その姿に
幽香は初めて恐怖と言う物を抱いた。
すると優は立ち上がり…

優「さて、強いあんたに良い物見せてやるよ。」

「はぁぁぁあああぁぁぁぁぁああ！！！！」

ズギャァーーーン！！！！！

優は果てしないその力を身体全体から放つ。
放たれる気は金色をしていて、優の瞳は澄んだ緑色に変わり、髪は逆上がり、金髪に変わる。
その絶大な気は幽香を押し潰す程。

優「さあ、これが真・超化だ。」

幽香「とんでもないわね…」

優「本気を出さないと、死体も残らないぜ…お前。」

幽香「仕方ないわね…」

幽香も力を解放した。
緑髪の髪は腰に達する程長くなり、放たれる妖気は常人なら気絶してるだろう。

幽香「こっちも準備ができたわ。」

優「じゃあ、行くぜ！」

シュッ

優は光速で幽香に近づく。
そのスピードはまさしく光の如く。
音すら鳴らないその速さに周りの空気が激しく歪む。

幽香「？速い…」

優「くらえ。」

優がサッと拳を繰り出すと…

バゴーン！！！

繰り出された拳は幽香の顔を歪ませる。
口からは歯が飛び出し、血が流れる。

幽香「…ッ！！！」

優「どうした？殴ったとしてもサッとやったから力なんてほとんど出してないぜ。」

幽香「くっ…！」

「魔砲　マススパーク！！」

幽香は二人に分身し、手に青い光のエネルギーを溜め、極太レーザーを放つ。

優「分身したって…」

「力が分散しちまうだけだろ。」

「飛龍　翔龍波！」

優は拳に波動を急速に溜め、波動の龍を放つ。

放たれた波動の龍は幽香の放つマススパークをかき消す。

ボーーーン…

波動の龍は幽香に当たる直前で消えた。

優「全く、意味あって分身してんのか？」

幽香は今の言葉に反応し、二人揃って優に攻撃する。

優「来いよ。」

幽香は分身と順々に攻撃を繰り出す。
パンチが来たなら分身も続いてパンチ。
キックが来たなら分身も続いてキック。
実際の攻撃速度より2倍速いと言う事になる。
だが優はその攻撃を楽々と避ける。

優「ふぁ～…遅い遅い。こんなんじゃ日が暮れるぜ？」

（何故？攻撃が全てかわされるなんて！）
幽香は自分の攻撃が、しかも分身を使っての攻撃を全てかわされるのを信じられないようだ。表情からその様子が現れる。
優はそれに気づき…

優「焦んな…すぐ終わらせっから…」

幽香「えっ？」

優はそう言うと、身体を一回転させ、エルボーを幽香の顔面に打ち

込む。
分身には打ち込んだエルボーを広げて裏拳で吹っ飛ばす。

幽香「うぐっ！」

幽香は顔の痛み耐え切れず、エルボーを受けた部位を手で押さえる。
その行為と同時に分身は消える。

優「んじゃ、本気で終わらせるぞ。」
「究極かめはめ破！」

優は両手首を合わせて波動を溜め、自分程の大きさにまで溜める。
そしてその波動を溜めた両手を前に向ける。

ビシュウーーー！

シュバァーーーン！！！！！

向けた瞬間、放たれた波動が巨大になり、巨大な山でさえも覆い尽くす。
波動は幽香に向かって一直線。
圧倒的巨大な波動は幽香を消そうと放たれ続ける。

幽香「……ふっ…」

幽香は波動を見た瞬間、死を覚悟した。
もはや抵抗する力も無い。
身体全体が脱力し、まるでこの世の終わりかのように膝を地に着く。

優「そらっ！！」

優は波動を一気に引き戻し、消し飛ばす。

幽香「？」

優「？何世界の終わりみたいな顔してんだよ。別に死ねとは言って無いし、逆に生きろって感じだよ。」

「ところでさ…お前…
ドSだろ。」

幽香「？」

幽香は何がと言わんばかりの表情を浮かべる。
もちろん、この世界でSを知っているのは紫ぐらいだろうが…

幽香「それはサディストと言う事かしら？」

知っていたようだ。

優「ああそうだ。お前、俺を蹴ってる時、笑ってたろ。」

幽香「ウフフ…バレた？」

優「わかりやす過ぎるっつうの。」

幽香「ところで、お友達のとこへは行かないの？」

優「ああっ、そうだった。じゃあな、幽香、なかなか楽しかったぜ！」

優は走って茜達の向かった無縁塚へ走って行った。

幽香「ウフフ…なかなか楽しかった。ね～。面白いじゃない、優。」

～続く～

第２３話　咲き荒れる花の異変　その２（後書き）

ちょっと文章に変化を効かせました。
あんまり変わって無いですな…
次回は無縁塚へ…

ではまた次回。

第２４話　咲き荒れる花の異変　その３（前書き）

今回は無縁塚での事…
茜達は無縁塚でどうなる？

ではどうぞ。

第２４話　咲き荒れる花の異変　その３

花の草原にて…

茜とアントニオンは、無縁塚を目指していた。

茜「う～ん…まだかなぁ…」

ア「茜さン、必ずしも目的地が近い事は無いんですヨ？」

茜「仕方ない。
ねぇ、みんなは近道知らない？」

朱雀「茜様、ここは我等にとっても異界の地、自分で探してください。」

茜「なっ…」

白虎「そうですよ茜様、僕らだってお役に経ちたいのは山々ですが、無理な物は無理なのです。」

茜「ダメじゃん…しゃあない…このまま行くか…」

茜は渋々歩き出した。
アントニオンも後に続く。

と、突然辺りが異様な空気に包まれた。
茜とアントニオンは警戒体制をとる。
すると目の前に…

茜「?あれって…もしかして…」

ア「ひょっとしたら、無縁塚でハ?」

茜とアントニオンの視線の先には、他の場所とは違い、太陽の光がとどかず、おまけに霊魂バリバリ放出している。
そう。此処こそが…

無縁塚…

青龍「気をつけてください。此処からは死人の地です。此処は無念で死んでいった者達の魂が漂っています。」

玄武「何時取り憑かれてもおかしくありませんぞ！」

茜「と言う事は…到着だね。無縁塚…」

ア「一体、原因は何なのでしょウ…」

茜「よし、行こう…」

茜は気合いを入れ、無縁塚に入り込む。

ア「……皮膚から感じる空気が冷たいですネ…」

茜「私は寒いくらいだよ。」

ア「…茜さン、見てくださイ。目の前ニ…」

アントニオンは進む方向を指し示す。

そこには、何で空いたのかわからない巨大な穴があった。

その空いた空間から霊魂が飛び出している。

茜「これって…あの世への入り口…違う？みんな…」

玄武「間違い無い…あれこそあの世とこの世を繋ぐ穴…」

ア「茜さん、行きましょう…」

茜「うん…」

茜とアントニオンは覚悟を決め、穴の中へと入って行った。
すると突如身体から魂が抜ける感覚が茜を襲う。
それに気づいた四聖獣達は光となり、茜を覆い包む。

茜「あ…ありがとう…みんな…」

朱雀「いいのですよ、御礼をされる程の事じゃありません。」

白虎「そうですよ、僕達は茜様を護る事が当たり前なんですから。」

玄武「わしらは茜様の為に存在して居ます。」

青龍「俺達がこうして話しができるのも、茜様のおかげなんです。」

四聖獣達は茜に感謝の意を込めてそう言う。

暫らく歩くと、景色が見え始めた。
どんどん景色は広がり、穴が終わりを告げているように…
そして…

茜「……抜けた～…」

ア「ここがあの…あの世ですカ…」

その景色の目の前に川と思わしき湖が広がる。

おそらく三途の川だろう。
そしてその先に見えるのは謎の屋敷…
と、その時…

？「おや？生人が何故ここに居るんだ？」

誰かの声が聞こえた。
あの世に人が居るとしたら幽霊か…
それとも…

茜「誰？」

？「私は小野塚（おのづか）　小町（こまち）。死神さ。」

見ると、その姿は赤髪のツインテール。
服は和服の軽装版。
手には大鎌といった、確かに死神らしい格好をしている。

小町「お前達は何者だ？」

茜「私は大島　茜、見ての通り。外来人だよ。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。同じく外来人でス。」

小町「ちょっと待て。お前はわかった。その爆発頭。」

ア「爆発頭？僕の事ですカ？」

小町「お前以外に誰がそんな頭をしている？」

「お前、人間じゃないだろ。」

ア「…何故わかるのですカ？」

小町「寿命が見えないからだ。」

茜「寿命？何それ見えるの？」

小町「死神は必ず死神の目を持っている。お前達の名前や年齢、そして寿命が見える。」

茜「えっ何それキモ…」

小町「だが、こいつの場合は名前は愚か、寿命が見えない。見えるのは製造年齢くらいだ。」

茜「年齢は見えるんだね…」

ア「確かに僕は人間じゃありませン。僕は…
サイボーグですから。」

小町「そうか…　ところで、お前達はなぜここに来た？」

茜「ここが異変の原因だと聞いたから…」

小町「ここがか？確かに霊魂が溢れちまって、あっちの方で沢山の花が咲いているな。だが、ここの所為じゃないさ。何処かで大量殺人が起きたんじゃないか？」

茜「大量…殺人？」

小町「その所為で、あたいは今、とっても忙しいのさ。」

茜「忙しそうには見えないけど？ただサボってるだけじゃん。」

小町「ああそうさ、今は休憩中だ。
…さて、休憩終了。今すぐ帰った方が良いよ。じゃないと…」

「あたいが力尽くでも帰らせるよ。」

茜「上等。ちょうど戦いたかったんだよね。」

ア「僕も久しぶりにたくさん動きたかったところでス。」

小町「あたいは強いよ、覚悟しな。」

小町は大鎌を両手で構える。
茜達も戦闘体制に入る。
すると突然茜の身体から…

朱雀「茜様、私達も一緒に戦います。」

玄武「わしらにできる事があれば何でも…」

四聖獣達が茜を覆い包む光から実体化した。

白虎「僕達は何をすれば?」

茜「じゃあ、力を溜めてて。新必殺技思いついたから。」

青龍「わかりました。よし、みんなやるぞ！」

四聖獣達は茜の言う通り、四聖獣は集まり、力を溜め始めた。

茜「よし、アントニオン。戦うよ！」

ア「ハイ！」

茜とアントニオンは小町に向かって走り出した。

小町「なら、相手をするだけだ。」

小町はそう言うと、弾幕を放った。

茜「早速か…」

ア「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンはショートアフロから小型ミサイルを大量に放つ。
小型ミサイルは小町の放った弾幕を相殺。
残ったミサイルは小町に向かって飛んで行く。

小町「何だ？頭から鉄の塊が飛んで来たぞ？」

ア「驚いてる場合じゃないですよ！」

アントニオンは続けてミサイルを撃ち出す。
だが、小町、今度は軽々とかわし…

小町「同じ手は喰わないよ！」
「舟符　河の流れのように！」

小町は真後ろにある三途の川の水を呼び出し、舟を自分のとこまで持ってくる。
そして、舟に飛び乗り、舟を茜達に突進させる。

茜「舞斬　玄武水舞！」

茜は二刀を振り抜き、水を纏わせる。
そして水を纏わせた二刀を振り回しながら自分も回転する。

茜は三途の川の水を利用し、二刀の纏う水をさらに強くする。
そして回転の勢いを利用し、二刀の内の一刀を振り上げる。
すると、水が刀から放たれ、舟を押し返す。

小町「ほぉ…なかなかやるね。」

「これならどうだい？」
「霊符　何処にでもいる浮遊霊！」

小町は手から幽霊をばら撒く。
ばら撒かれた幽霊は茜達に向かって飛んで行く。

ア「幽霊には申し訳ないですが、消えてもらいまス！」
「眼撃　アイレーザー！」

アントニオンは眼から赤いレーザービームを幽霊に向けて放つ。
放たれたレーザーは幽霊を一掃する。

茜「サンキュ！アントニオン！」
「幻影　無限幻影剣！」

茜は無幻を取り出し、体力を注ぐ。
すると、茜の周りに無限に幻影の剣が小町に向けて配置される。

「行けっ！！」

茜のその言葉と共に幻影剣は不規則に放たれる。

小町「何だこりゃ？…まあいい、力でねじ伏せるか…」
「死歌　八重霧の渡し！」

小町は再び舟に乗ったかと思うと、今度は舟で突進しながら霊魂を弾幕として飛ばす。
幻影剣と霊魂は互いにぶつかり、相殺。
その内の一つの霊魂が茜を直撃。

茜「あっ！」

茜の攻撃が止んでしまった。
その隙を見た小町は更に攻撃を続ける。

小町「行くよ！」
「恨符　未練がましい緊縛霊！」

小町は手から再び霊魂を飛ばす。
だが、霊魂は茜の周りを漂うだけ…
すると…

小町「破てろ！」

ドゥーーン！！！

小町がそう言うと、霊魂が急に爆発。
茜はその爆発でダメージを受け、吹き飛ぶ。

茜「うわぁッ！！！」

小町「魂符　生魂流脱の鎌！」

小町は更に追い討ちをかけるように、大鎌を振る。

ア「させません！！」

アントニオンは能力を使い、地面の石の塊を茜の前へ誘導する。

ズバッ！

石の塊は茜の代わりに斬られる。

小町が大鎌を振るった後、周囲に霊魂が舞う。

小町「やるじゃないか爆発頭。それはお前の能力かい？」

ア「そうでス。ではあなたにこの力は耐えられますカ？」

「爆閃　マインド・クラッシュ！」

アントニオンは指にエネルギーを溜める。

そして充分にエネルギーを溜めた後、アントニオンは…

パチン！

指を鳴らす。
すると、小町の足元から眩い閃光が放たれる。
そして…

ドガァーーーン！！！

小町は足元からのエネルギー大爆発を喰らう。

小町「…ッ！！！」

その時、四聖獣達が茜に声をかける。

朱雀・玄武・白虎・青龍
「茜様！チャージ完了です！！」

茜「よっしゃッ！みんな準備して！」

爆発が引くと、服がボロボロになった小町が居た。
小町は片膝を着き、大鎌を杖代わりに体制を保つ。
茜はその瞬間四聖獣達を集め、力を解放する。

茜「これで決める…ッ！！！」

「龍虎二刀流　四神奥義！！！」
「二天・四神斬！！！」

茜は四聖獣を四神と改め、四神から解放された力を使い、茜の持つ

刀の全てを二刀に纏める。

紫色に光る二刀を構え、茜は小町に向かって走り込む。

茜は跳び、小町の前まで来ると…

茜「そおぉぉおらぁぁぁぁあああ！！！」

ズバッズバッ！！！

ザシュッザシュッ！！！

バシュッバシュッ！！！

茜は横斜めクロス、縦斜めクロス、十文字に斬り裂き、計６回を一瞬の内に斬り裂いた。

小町「ぐは…ッ！！！」

小町は口から吐血をする程のダメージを負い、そのまま倒れた。

ア「さすがですね！茜さン！」

茜「そんな事無いよ、アントニオンの助けが無ければ今頃はやられてたよ。」

ア「じゃあそろそろ進みましょウ！」

茜とアントニオンはあの時に見えた屋敷に向かい、飛んで行った。

その頃…

優「…ここがあの世か。」

優は茜達が飛んで行った後にここに辿り着いたようだ。

優「？おい、大丈夫か？」

小町「あぁ…うっ！…」

優は地面に倒れている小町を見つけた。

優「恵みの波動。」

小町「あぁ…」

「…？あれ？痛くない？傷が無い！」

優「大丈夫か？」

小町「ん？また人間か…
さっき痛い目に遭ったけど、お前も帰りな。」

優（さっき？て事は茜達だな。）
「悪りぃ帰るわけにはいかない。文句あんなら来い。」

小町「いいよ。どうなっても知らないよ？」

優「それはこっちの台詞だ。」

スバッ

優は音速で小町に近づき、拳を顔面に繰り出す。

小町「ひっ？」

優「少し寝てろ…」

ズガン！！！

優は小町の顔面に拳をぶつけ、地面に叩きつける。
叩きつけられた小町は一瞬で気絶した。
その顔からは涙がうっすら見えていた。

優「距離を操る程度の能力か。使えるかどうかわからんな。」

「？あの屋敷…　あそこか…　よし、行くか。」

優は三途の川の先に見える屋敷に向かって飛んだ。

～続く～

第２４話　咲き荒れる花の異変　その３（後書き）

次回は闇魔様に…
闇魔様と言ったら？

ではまた次回。

第２５話　咲き荒れる花の異変　その４（前書き）

あまり戦わないような気が…
闇魔様ですから。

ではどうぞ。

第２５話　咲き荒れる花の異変　その４

あの世にて…

茜「アントニオン！あれだよ！」

ア「到着ですネ。」

優「お～い！」

茜「？あっ！優！」

ア「あれ？優さん？服、どうしたんですカ？」

優「また面倒くさいのに出会っちまったからな。それより、あの屋敷。やっぱり気になるよな…」

茜「うん…」

優「行こうぜ…」

再会した優達は休む事無く謎の屋敷へ歩いた。
見るからに何か居るであろう怪しい屋敷。
優達は躊躇せず屋敷の扉を開けた。

ゴーン！

巨大な扉は大きな音を起てて開く。
扉を開けた先には長い道が有った。

優「長いな…日が暮れそうだ。」

茜「日自体出てないけどね。」

ア「ハイ。」

優「とりあえず、この先を進めば…」

茜「だね…」

優達は長く続く道を歩き出した。

優「しかし…マジで長えな…」

茜「この道を行けばどうなる物か？」

「迷わず行けよ！行けばわかるさ！！」

優「アントニオ〇木かよ…」

ア「何カ？」

優・茜「お前　（あんた）じゃない。」

ア「そうですカ…」

優達はそんな会話を交わしていた。

しかし、道は進めど進めど終わりは見えない。
ただ、無限に続く道だけが見えるだけ…

すると、道の先に誰かの影が…

優「ん?誰だ?」

?「誰だ、はこちらの台詞ですよ。
誰なんですか?あなた達は…」

優「俺達か?アントニー、茜、先に名乗れ。」

ア「ハイ。僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

茜「あいよ。私は大島　茜だよ。」

優「んで、俺は瀧沢　優。異変解決に来た。」

「あんたは?」

?「私の名は、
四季映姫(しきえいき)・ヤマザナドゥ。」

その姿は見るからに少女。だが、何か他の少女とは違う何かが有る。

大きい机の前に立ち、少女はお辞儀をする。

奇抜なファッション…と言っていいのだろうかわからない服装をしている。

茜「ヤナ、ザマ…ダナドゥ？何？名前おかしくない？」

ア「四季映姫・ヤマザナドゥですヨ、茜さン。」

茜「ありがとう。」

四季「そんな事より、あなた達は何故此処に来たのですか？」

優「言った通り、異変解決だ。あんたらが怪しいと思って此処に来た。外の花のあれ…知らねえか？」

四季「…なる程、ですが、あれは私達がやった事ではありません。ですが、何らか理由は有りそうですね…」

茜「そう言えば、あの小野塚　小町とか言う死神。大量殺人が起きたとか言ってたね。」

ア「ああ、そう言えばそうですネ。」

優「もしかして、それが理由か？」

四季「かもですね。」

優「何だよ…それならそうと早く言えよ、茜。」

茜「ゴメン、忘れてた。」

優「悪りぃな…四季さん、迷惑掛けちゃって。」

四季「いいえ、私達が疑われるのが悪いのもありますし、今回の事は水に流しましょう。」

優「そうだな。じゃあとりあえず、博麗神社に行くか。茜、アントニオン、掴まれ。」

茜「ほい。」

ア「ハイ。」

優「じゃあな！」

シュン！

四季「……しかし、大量殺人…一体そんな事をできるのは、居るのでしょうか？」

「不吉ですね…」

シュン！

優「よし、到着。」

霊「？何よ？どうしたの？」

優「お前も何か知っているんだろう？今回の異変を。」

霊「・・・」

「実は…」

優「何だよ?」

霊「結界が緩んだの…」

優「結界が?」

霊「うん、結界が緩んだ所為で大量の霊魂が流れ込んだのよ。その所為だと。」

茜「なら、今回の事は仕方がないね。」

優「だけど、何で結界が緩んだんだ?」

霊「６０年に一度、博麗大結界は緩むのよ。力が弱まるから。それが今日なのよね…」

優「ふ～ん…」

霊「結界に力を送って補強しないと、大変なのよ。」

優「そっか。なら今日は帰るぜ。」

茜「それじゃあね。」

ア「また明日でス。」

霊「えぇ。」

結局、今回の異変の原因は博麗大結界の緩みによる物だった。

だが、緩んだからとはいえ、あれだけの花が咲く程の霊魂が流れるだろうか？

だからと言って、調べる術は無い。

一つ、原因として浮かぶなら…

それは……

？？？にて…

バシュッ！

ザシュッ！

シュバーーーー…

？「フフフ…これはいい…」

「生き返る……殺しは最高だ…」

「クックックッ…ハッハッハッハッハッ…」

「ハ～ッハッハッハッハッハッ、ア～ハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！」

「ハァ…待ってろよ？優…」

「この狂鬼（おれ）の復活まで後少しだ…」

続く…

第２５話　咲き荒れる花の異変　その４（後書き）

異変の原因は結界の所為か？
それとも…
次回は風神録編です！

ではまた次回。

現在の最狂の三人（前書き）

風神録編！
と、行きたい所ですが…
作者「一応、ｗｉｋｉで調べた所、風神録から先は異変じゃないそうです。」

「ですので、区切りとして、現在の優達を紹介します。」

「何度もすいません…ではどうぞ。」

現在の最狂の三人

現在の三人…

瀧沢（たきざわ）　優（ゆう）

現在は異変を解決をする（最強の外来人）

身長：１７０ｃｍ

性格や特徴

髪はストレート。前髪が少し長め。

これと言って目立つ所は無いが、仲間を大切にする。

怒らせると誰が死ぬ気で彼に挑んでも返り討ちで八つ裂きになる。

優しかったり、優しく無かったり…

（基本的に優しい。いつもじゃないけど…）

能力

（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）

毒、病、能力やそれによる効果を全て　無　にする。

他にも、火傷や刃物や鈍器の攻撃も効かない。

刃物の場合、　禁忌「レーヴァテイン」や　「待宵反射衛星斬」なら切り傷がつくが、力をちょっと上げるとすぐに効かなくなる。

（言ってしまうなら相手の弾幕やスペルカード、打撃攻撃以外の害を与える効果は全て効かないと言う事）

（見た技全てを自分の物にする程度の能力）
能力、スペルカードを見ただけで体得してしまう。
（スペルカードは相手の実際の行動を見ないと体得できないが、能力は相手を見ただけでも体得できる場合がある）

通常攻撃技

波動
青い気を手から放つ。
形としてはそのまま広範囲かつ半透明な　かめはめ〇が片手から放たれるイメージ。
相手の内部と外部を同時に破壊する。
その為、本気で放つとスペルカードに匹敵する威力を持つ。

波動拳
拳から青い気弾を放つ。
ストリートファイ〇ーじゃないよ?
波動と違い、外部しか破壊できないが、弾速が速いため、避けにくい。

スペルカード

波動「波動百烈拳」

波動拳を百発　拳を突き出して撃ち出す。
北〇百裂拳のように行う。
弾速が速いため、避ける事はまず不可能。

飛龍「翔龍波」
拳に波動を溜めて、巨大な胴長龍の形をした波動を放つ。
龍の飛翔速度は少し遅いが、龍が巨大なのと、追尾能力を持っているため、問題無い。
龍は相手に近づくと…
相手を喰らい、そして貫く。
相当な人間や中級妖怪以上でないと、即死確定。相手の形が消えて無くなる。
（力の強弱にもよるが…）

瞬烈「刹那の百烈拳」
一瞬で相手に近づき、一瞬で相手に百烈拳を当てる。
その間僅か　０．１秒　（力の強弱でスピードも変わる）

相手は殴られたのにも気づかず、身体が拳の音を起てた時にようやく気づく。
上級妖怪すら瀕死に追い込む程。
（力の強弱にもよるが…）

気爆「超爆発波」
身体に気を溜め、そして爆発させる。
凄まじい爆発は山をスッキリ消し去る。

拳撃「爆裂乱舞」
拳と蹴りのコンボを高速で叩き込む。
攻撃としてはシンプルだが、攻撃の一撃一撃がかなり強力＋何度も

追撃して攻撃を繰り返すため、グロッキーになるのは確実。

桜龍「龍桜」
龍桜でドラゴン桜と読む。
地に翔龍波を打ち付け、相手の下から桜色の龍を放つ。
威力は魅せ技のため、低い。
攻撃を終えたら桜のように綺麗に散る。

「無想転生」（むそうてんせい）
眼を閉じ、心を落ち着け、精神統一…
そして開眼直後、恐ろしい強さを解放する。
移動速度は光を超え、攻撃に至っては霊夢の
「夢想天生」ですら意味を成さず、想像を絶するダメージが相手を
襲う。
ちなみに北〇の拳じゃないよ?
だが、これを使用しても真・超化を超える事は不可能。

超絶「究極の拳」
「無想転生」発動時に使用可能。
光を超えた速度で拳を無数に繰り出す。
１秒間に２０００万発の拳をあびせる。
２０００万発を5秒…　つまり…
１億発!!!
だが、優の気分によっては…
９９９９兆発、または無限大…
つまりは拳で身体がバラバラになるまで殴られると言う事。
妖怪だろうと神だろうと誰も抗えない超絶必殺技。

龍撃「滅龍拳」
伝説の龍を滅する程の威力を持つ。

アッパーで相手を空中に打ち上げた後、その手を腰まで思いっ切り引いて波動を溜める。
そして空中にいる相手目掛け波動と拳を同時に放つ。

すると拳からの波動が優を覆い、優自身が飛翔する龍と化し、相手を貫き、消し去る。

「究極かめはめ波」
悟〇の必殺技では無く、優の究極の必殺技。
両手首を合わせ、腰辺りまで引き、波動を溜める。
溜めていると、波動は優と変わらない大きさになる。
そして溜め終わると両手首の両手を前に突き出し、放つ。
放った波動は富士山を覆い尽くす程。
この場合、波動は半透明では無く、しっかりとした青と白の波動である。
さらに、右手だけ残し、さらに力を込めると…
その力を　解放　し、果てしない威力を持つ。
富士山2個を軽く覆い尽くし、幻想郷を塵一つ残さず消し去る。

「真・究極かめはめ波」
溜めた時の大きさが優を覆い、放った時の大きさが…
（とにかく究極かめはめ波より遥かにデカい）

解放してしまえば、宇宙を消し兼ねない。
その為、優は使うのをためらう。
さらに絶大なエネルギーを必要とする為、超化以上でないと使用できない。

特殊

超化

目を閉じて再び開けると、瞳が金色に変わり、放たれる気や波動も青から金色に変わる。
幻想郷を破壊できる程の力を持っている。

真・超化

目を閉じて再び開けると…
瞳が澄んだ緑色に変わり、髪も金色に変わり、逆立つ。
スーパーサイ○人では無いよ?
基本的に超化と変わらない。
全宇宙を跡形も残さず消せる程の力を持っている。

大島（おおしま）　茜（あかね）

優と同じ。（四聖獣を操る剣士）
身長：１６１ｃｍ

性格や特徴

髪をポニーテールにしているが、ポニーテールの部分がボサボサしている。
かなりの美少女だが、あまり寄り付かない。
（男が…）

性格は元は悪かったが、今は明るい。

能力

（四聖獣を操る程度の能力）
主に力を使用するくらいだが、実際に実体化させて四聖獣と会話もできるし、その力を最大限に使い、四聖獣の最後の神、黄龍を呼び出せる。

通常攻撃技

二天一流の極み
二刀を目の前で交叉させて精神集中をする。
精神集中で相手の動きを読み、見切ったら二刀の連撃を与える。

次元斬
刀を納刀した状態で抜刀。と同時に納刀。
放たれる斬波で相手に触れずに斬り裂く。

疾走居合
刀を納刀した状態で相手に向かって疾走。
刀を抜刀と同時に納刀を繰り返し、最後には刀の居合の一撃。
抜刀を行った場所に物が有れば容赦無くバラバラになる程。

スペルカード

舞斬「朱雀炎舞」
舞斬「玄武水舞」
共に同じ技。使用武器は朱雀ｏｒ玄武
刀の力を使い、属性の力を両刀に纏わせる。
そしてその状態で両刀で交互に回転斬りを行い、最後に斬り上げる。
纏う属性の力は朱雀なら炎、玄武なら水

風雷「風神の竜巻・雷神の雷鎚」☆
風雷「風切の壁・稲妻の罠」★
使用武器は風雷（双剣・風丸＆双剣・雷電）
☆は風丸を振ると共に自分も高速で回転し、竜巻を起こす。
起こした竜巻で相手を浮かばせ、雷電を振り下ろした瞬間、相手に雷が落ちる。

★は風丸と雷電の力を解き放つ事で茜の周りに風切の壁を展開し、辺りには稲妻の罠を配置。
近づけば稲妻が相手の身体を走り、風切の壁が相手を切り裂く。

朱　玄　白　青符「四聖獣の閃き」☆
朱　玄　白　青符「聖獣壁」★
朱雀、玄武、白虎、青龍を使用。
聖剣「聖獣閃」の準備動作スペル。
☆は刀を融合させ、聖獣刀の力を得る。

朱雀　炎強化　（攻撃＆耐性）
玄武　水強化　（攻撃＆耐性）
白虎　攻撃強化
青龍　防御強化

★は☆と同じく刀を融合させる。

聖獣刀の力を使い、目の前に聖なる壁を展開する。
一つ、弱点を言うなら　四聖獣の閃き　を発動しなければ壁の強度があまり無い事。

聖剣「聖獣閃」
使用武器は聖獣刀
融合した全ての刀の力を得る。

朱雀　炎を操る
玄武　水を操る
白虎　一回の斬撃が三回分になる
青龍　特殊なオーラを纏わせリーチを伸ばす

この力で聖獣刀を強化し、相手を叩っ斬る。

幻影「無限幻影剣」☆
幻世「幻影の世」★
使用武器は無幻
☆は無幻に体力を注ぎ込む事で茜の周りに無限に幻影の剣を展開する。
展開した幻影の剣は無限に、そして不規則に相手に向かって飛ぶ。
止める方法は茜自身が止めるか、茜を攻撃するだけ。

★も同じく体力を注ぎ込む。
注ぎ込むと周囲に特殊な霧が出現する。
出現した霧は茜しか隠れられず、茜から見た霧は透けている。
その為、この技から逃れるには風を巻き起こすか、茜が止めるかである。

空間斬「絶刀」

刀を納刀したまま姿を消し、謎の黒い球体から斬撃を放つ。
これは茜が凄まじい速度で次元斬を行っている為に起きる現象。
黒い球体斬撃は相手を追尾し、茜が疲労しきるまで続く。

龍虎二刀流「龍虎二天閃」☆
龍虎二刀流「龍の爪・虎の牙」★
☆は全ての刀と剣を使用
☆は龍虎の力を使い、全ての刀と剣を浮かせ、茜が手を相手に向けた瞬間、全ての刀と剣が相手をバラバラに切り裂く。

★は二刀を構えていれば良い
★は龍虎のオーラを茜の周囲に展開。
茜に触れようとすれば、龍が相手を肉ごと切り裂き、虎が相手の触れた部位を食い千切る。
（虎の場合、手なら肘まで。足なら膝まで）

「二天・四神斬」
二刀を所持
龍虎と四聖獣の秘奥議。
二天は龍虎、四神は四聖獣。
刀を二刀に融合し、纏め、紫色に光る刀で横斜め、縦斜め、十文字に斬り裂く。

五神「麒麟飛翔」
二刀を所持
四神の最後である黄龍こと麒麟を降臨させる最終秘奥議。
麒麟の力を使い、刀を二刀に纏めて融合。
黄色に光り輝く二刀で相手に近づき、麒麟が飛翔するが如く、解き放つように斬り上げる。

武器

朱雀　持ち手が朱い刀。斬れ味が凄まじく、世界一硬い鉱石、オリハルコンも真っ二つにする…かも？炎を操る。

玄武　持ち手が玄い刀。斬れ味は朱雀と同じ。水を操る。

白虎　持ち手が白い刀。斬れ味は朱雀と同じ。一回の斬撃が三回分にする。

青龍　持ち手が青い刀。斬れ味は朱雀と同じ。特殊なオーラで刀のリーチを伸ばす。
（例として　断命剣「瞑想斬」のような）

特殊

心の壁
心の幅を狭めるとオレンジ色のバリアが張られる。
A〇フィールドじゃないよ？

アントニオン・ライブラリー

優と同じ。（最凶の現代兵器）

身長：１８０ｃｍ

性格と特徴

髪型がショートアフロで色が茶色。
実はサイボーグであるが、心がある。
どこか抜けている。

能力

（物体を誘導する程度の能力）
自分や他の人、弾幕以外を物体として自由に誘導できる。

スペルカード

爆撃「ミサイルボンバー」
ショートアフロから小型ミサイルを大量に撃ち出す。
小型ミサイルの威力はロケットランチャーの２倍。

眼撃「アイレーザー」
眼から赤いレーザービームを放つ。
貫通力が凄まじい。
出力を変えると、地面に放って爆発を起こせる。

爆閃「マインド・クラッシュ」
指にエネルギーを集中させ、パチンと鳴らすと、相手の足元からエネルギー大爆発を起こす。
使用は２回に限られる。

２回以上使用すると、指がオーバーヒートする。

「アルティメットプラズマ」
アントニオン最後の必殺技。
これを使用する場合、アントニオンは死を覚悟する。
自分のエネルギーを胸から放つ。
原水爆１０個並みのエネルギーが相手を襲い、消し去る。
使用後、アントニオンがどうなるかは不明。

以上です。

現在の最狂の三人（後書き）

次回から風神録編です。
霊夢からの依頼から始まる。

ではどうぞ。

第２６話　守矢神社をやっつけろ！　その１（前書き）

サブタイトルおかしいですよね…
でもこれしか思いつかなかった…
霊夢からの依頼から始まります。

ではどうぞ。

第２６話　守矢神社をやっつけろ！　その１

優達の住居にて…

花の異変も終わり、ホッとして居た俺達に…

霊「ねぇちょっと！優居る？」

突然現れた大慌ての霊夢。どうしたんだ？一体。

優「何だよ？そんなに慌てて。」

霊「私から頼みがあるんだけど?ゼェ…ゼェ…ゼェ…」

優「わかった。まず落ち着け。話しはそっからだ。」

~1分後~

霊夢が落ち着いた所で、茜とアントニオンも連れて来た。

優「んで、話しって何だ?」

霊「まずは…」

～回想～

私が神社の掃除をして居た時…

？「すいません。」

霊「？」

？「あなたがこの神社の巫女ですか？」

そこには私より少し背の高い、緑髪の女が居たわ。
色こそ違うけど、私と同じ巫女の格好をしていたわ。
しかも同じ腋出し！
胸も私よりデカい！

優「いやいや、胸関係ないだろ。しかも同じ腋出しとか、変わった奴も居たもんだ。…続けろ。」

その女が突然こう言ったわ…

？「この神社の営業を停止して頂けませんか？」

私は耳を疑ったわ。あんな事を言うなんて、いい度胸してるじゃない。

スペルカードで追い払ったけど、またいつ来るかわからないから、退治しに行こうと思うの。

～回想終了～

優「お前って勝ってだな～。」

茜「退治は違くない？」

ア「退治は妖怪だけなのでハ？」

霊「だから頼みに来たのよ。私の代わりに退治してくれる？」

？「その話、私も混ぜてくれよ。」

突然、霊夢の後ろから聞こえた男口調の少女の声。
この声と口調は聞き覚えがある。
そう。それは…

優「ん？魔理沙か。いつから居たんだ？」

魔「腋の話からだＺＥ☆」

霊「何親指立ててんの？何☆って？」

魔「それよりその件、手伝ってやるよ。」

霊「スルーすんな！」

優「なら頼むぜ。」

霊「コラッ！」

優「うっせッ。」

ガン！

霊「何で拳骨…」

優「あれ?弱いな。まあいいや、行こうぜ。」

茜「何だかグダグダした始まり方だね。みんな。」

朱雀「え～っと…」

玄武「むむむ…」

白虎「ん～～…」

青龍「ｚｚｚ…」

ア「ケセラセラ…」

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

斯して優達は、霊夢の案内により、妖怪の山の前へとやって来た。

優「ここに逃げたのか？」

霊「ええ。」

優「よし、行くか。」

魔「へへっ、腕がなるぜ。」

優達は霊夢の案内の下、妖怪の山へと足を踏み入れた。

瞬間…

優・霊　（来る！）伏せろ（て）！」

優と霊夢は言葉と同時にみんなの頭を下げた。
瞬間通り過ぎたのは弾幕。
誰が撃ったのだろうか？

とその時…

？「やるわね人間。」

？「私達の弾幕を避けるなんて。」

優「誰だあんたら。」

？「私の名は秋（あき）静葉（しずは）。紅葉の神よ。」

？「私はその妹、秋（あき）　穣子（みのりこ）。豊穣の神よ。」

一人はオレンジ色のドレスを着た金髪の少女。
もう一人もドレスを着ていて、頭にはぶどうの飾りが施してある帽子を被った金髪の少女だ。

二人共自ら神様と名乗った。

優「神様か、何だ、強そうじゃないな。」

静「なっ？何ですって？」

穣「神を侮辱するとはいい度胸ね！」

優「ああ、そらな…」

ズバーン！

優は身体から少し気を放つ。
その気は静葉と穣子に直撃。
その気を感じ取った二人…

静「…ッ！何？この気…」

穣「人間の…物じゃ…ない…」

優「人間だっての…」

優は静かに低い声を出すと同時に手を静葉と穣子に向けた。

すると…

魔「優！ここは私に任せて先に行っとけ！」

魔理沙は優の前に出て来てそう言う。

優「そうか、じゃあ行こうぜ。」

茜「うん。」

ア「ハイ。」

霊「そうしますか。」

優達は山の頂上目指して飛び始めた。
優達が見えなくなると…

魔「さて、始めるか？」

静「本気で行くわよ！」

穣「絶対に勝つ！」

魔「じゃあ行くぜ！」
「恋符　マスタースパーク！」

その頃、優達は妖怪の山を楽々飛んでいた。

優「何処に居るのかなっと。」

ア「あの～、文章が変化してますけド？」

優「気にすんな！」

霊「いいからさっさと行って！」

？「止まりなさい。」

飛んでいると突然後ろから女性の声が聞こえた。
優達は声が聞こえた方向を向いた。

優「誰だよ？」

？「私は鍵山（かぎやま）　雛（ひな）です。厄神ですよ。」

女性は頭にリボンを乗せていて、かつ綺麗な緑髪を体の前に結んでいる。
格好は…　ゴスロリとしか言えないドレス着ている。

雛「貴方達も名乗ってくださいませんか？」

優「そうだな。俺は瀧沢　優だ。」

茜「私は大島　茜。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

霊「…私は博麗　霊夢。」

優「悪いけど、止まれねえよ。」

雛「では、覚悟する事です。」

雛はそう言うと、眼を鋭くし、スペルカードを取り出し…

雛「厄符　バッドフォーチュン！」

雛は周りから弾幕を伸ばすように次々と飛ばす。
が、優はそんな弾幕を物ともせず避ける。

優「見飽きるくらいに弾幕は避けてるんだよ…」
「波動　波動百烈拳！」

優は両拳に波動を速攻で溜め、高速で拳を突き出し、波動拳を放つ。

雛「なら…」
「悪霊　ミスフォーチュンズホイール！」
雛は円を描くように弾幕を配置。
そして飛ばす。
弾幕と波動拳はある程度相殺。
波動拳は数があまり、雛へと飛んで行く。
雛「やはり、防ぎ切れませんか…」
雛は速い波動拳を上手くかわす。
かなりギリギリの間隔で避けたが、雛の表情には一切の乱れが無い。
だが、余裕も無い。
雛「そろそろ終わらせなければ…」
「創符　ペインフロー！」
雛、今度は自身が回転し始め、弾幕を撃ち出す。
雛は撃っている弾幕の射撃のタイミングを極僅かにずらしながら撃ち、弾幕の隙間を無くす。
だが、優は…

優「こりゃ楽勝だな。」
「瞬烈　刹那の百烈拳！」

そう言い、雛に一瞬で近づき…

バシッ！

と、言う音を起てた瞬間、優はいつの間にか雛の後ろに居た。

雛「何？」

優「自分の体を見てみろ。」

雛は言う通りに体に視線を移す。

「…！？」

雛は目を疑った。

それもその筈、雛の体には無数の拳の痕があった。
服も何故か拳の痕でへこんでいる。

すると…

ドガガガガガガガガガガガガガッ！！！

凄まじい拳の音が雛の体から鳴り響く。
雛は拳の音が鳴った瞬間、膿血を吐き出す。

そして力尽き、そのまま地面まで落下…
と、その瞬間…

優「危ねっ！」

優が雛に一瞬で近づき、落下する寸前を抱え込む。

優「恵みの波動。」

優の手から放たれる緑色の優しい波動が雛の傷を癒す。

雛「…うぅ…」

優「大丈夫か？」

雛「あっ…はい。」

優は着地し、雛を降ろした。

優「じゃあな。」

「おい！茜、アントニオンに霊夢！行こうぜ！」

茜「O．K！」

ア「あ、それ僕が言いたかったのニ…」

霊「相変わらずね…」

優達はまた妖怪の山を飛び始めた。

暫く飛んでいると、霊夢が山に降りる。
それに続いて優達も降りた。

優「どうした？霊夢。」

霊「ここは私に任せて先行って。」

優「そう言う事な。わかった。」

優達は解釈。
その場から離れた。

？「仲間を犠牲に出来ないと、言う事かい？人間。」

霊「逆よ。あんた一体なら私一人で十分よ。河童。」

？「おもしろいね、人間は…」

「私は河城（かわしろ）　にとり（にとり）。」

河童とか言う少女は背中にリュックを背負っている。
髪と服は同じ水色。
頭には帽子を被っている。

霊「私は博麗　霊夢。行くわよ！」

～続く～

第２６話　守矢神社をやっつけろ！　その１（後書き）

さてさて、サブタイトルがおかしいまま…
次回は霊夢と魔理沙の戦いを…

ではまた次回。

第２７話　守矢神社をやっつけろ！　その２（前書き）

前回の魔理沙の戦闘と霊夢の戦闘です。
物語も後半に近づいて来たかな？

ではどうぞ。

第27話　守矢神社をやっつけろ！　その2

妖怪の山の麓にて…

～魔理沙視点～

魔「恋符　マスタースパーク！」

バァーーーン！！！

静「えぇぇえええええ？」

ピチューンＰＰ

よし、まずは一人だ。
このままいけば楽勝だな。

穣「ああっ！早ッ！」

魔「次はお前だ！」

穣「もう！お姉様の役立たず！」
「秋符　オータムスカイ！」

弾幕が全体に広がってやがる。
この程度なら…

ん？弾幕が変化してるだと？
おぉ、数が増えて避けにくくなったな。
だけど楽勝には変わりないぜ！

魔「よっと！」
「光符　ルミネスストライク！」

穣「負けない！」
「豊符　オヲトシハーベスター！」

へへ、そんな弾幕とレーザーじゃ、私の攻撃の敵じゃ無いぜ！

さて、これで決まりだ！

魔「行っけぇぇえええぇぇぇえええ！！」

穣「なっ？だ、弾幕が？」

ピチューンＰＰ

魔「よっしゃ！やっぱり楽勝だったぜ！」

「さて、あいつらどこまで行ったかな？」

妖怪の山の川の前にて…

～霊夢視点～

優達も行った事だし、遠慮無くやれるわね。
川が流れていると言う事は、ここから先は九天の滝。
敵は優なら楽勝な相手だから、問題は無いわね。

余計な時間を掛けるわけにはいかないから、代わりに戦う事になったけど…やっぱり少し面倒くさいわね…

に「行くよ！人間！」
「光学　オプティカルカモフラージュ！」

連なる弾幕に飛び交う弾幕。
この程度なら避けるのは簡単ね。

霊「ふんっ！」

に「避けるか…だけど！」
「洪水　ウーズフラッディング！」

?横から?極めて特殊な弾幕ね。

だけど流れる弾幕は常に一定の位置に流れるわね。
妖怪退治は巫女の仕事。
しっかりと退治してやる!

に「くらえ!!」

なっ?この狭い空間で弾幕を?
やるわね。なら…

霊「宝具　陰陽鬼人玉!」

このスペルで弾幕を一掃よ!

に「うわっ!デカい玉!避けなきゃ!」

弾幕は一掃したけど、相手にダメージは無しか…

そろそろ一発決めないと…

霊「霊符　夢想封印!」

に「うわ！！七色に光る玉がいっぱい？」

霊「くらえ！」

に「うわぁぁぁあああぁぁぁあああ！」

ピチューンＰＰ

これでよし。
退治完了っと。
そろそろ着いてる頃かしら？

九天の滝にて…

～優視点～

やれやれ。あれから結構移動した気がするな。
とりあえず、何か滝の前に来たな。

…何か来たな。しかも何か武器持っているし…　完全に警戒してんな。

？「止まれ人間！此処は人間の来る場所じゃない！今すぐ立ち去れ！」

優「答えは…」

茜・ア「ＮＯ！」

優「つまり、無理だ。」

？「なら覚悟！」

優「犬が吠えてるな。」

？「犬じゃない！私は犬走（いぬばしり）　椛（もみじ）！白狼天狗だ！」

優「名前に犬が付いてる時点で犬だ。
つか、天狗っていろいろいるな…」

「まあいいや、そんじゃ…」

波動だ！

バァン！

椛「なっ？うわあああああ！！！」

ピチューンＰＰ

ありゃ、何か効果音したら吹っ飛んでったな。

そういや、霊夢と魔理沙はどうなったんだ？
ま、あいつらだから大丈夫だろ。

優「先に行くか。」

？「ちょっと止まってください！」

優「んだよ…お前は……射命丸！」

文「どうも、また会いましたね。」

茜「何で？」

文「私は今の彼女と同じ天狗。
鴉天狗です。」

「あなた達をここから先に行かせるわけにはいきません。」

優「なる程、しゃあねぇ…　戦うか！」

文「覚悟してください！」

〜続く〜

第27話　守矢神社をやっつけろ！　その2（後書き）

え～っとですね…

近々、旧作編を書こうと思っています。
幻想郷編ですね。
夢月、幻月との戦い…

さらにはあの先代博麗とも？

ではまた次回。

第２８話　守矢神社をやっつけろ！　その３（前書き）

さてと、今回は花映塚で登場した射命丸　文との対決！
幻想郷最速ＶＳ最強の外来人

ではどうぞ。

第２８話　守矢神社をやっつけろ！　その３

九天の滝にて…

文「それ！」

文は弾幕を撃って来た。

だが、優は当たり前のようにその弾幕を軽く避ける。

優「いつも最初はワンパターン。もう見飽きたぜ。」

文「なる程。では…」

すると文は突然、椛葉の扇子を取り出し、思いっ切り扇子を振った。

すると強風が巻き起こり、そのまま優を襲う。

だが…

優「お～、涼しい涼しい。とは言え、さすがに肌寒いかな?服も和

服に変えたばっかだし。」

文「涼しい？強風が涼しい？おかしいですよあなた？」

優「おかしくて結構。お前等よりましだから。」

文「あやや！ヒドいですよそれは！」

優「いいからとっとと来い！」

文「むぅ～…」

「風神　風神木の葉隠れ！」

文は弾幕を放った。

すると弾幕は文の周りをグルグルと漂い、その後、優を阻むように乱れながら弾幕が飛んで来た。

優「焦れったい弾幕だな。しかもショボいな。」

優はまた軽々弾幕を避ける。

そしてボソッと…

優「弱っ…」

文「ちょっと!!今何て言いました?今弱いと言いましたね!!!」

優「聞こえてるなら聞くなよ。」

文「私はこう見えて、幻想郷最速なんですから!!」

優「ふ～ん、それで?」

文「あやっ?もう!私怒りましたから!こうなったら、この私の力、見せてあげますよ!」

「風符　天狗道の開風!」

文は椛葉の扇子を振るい、優に向けて真っ直ぐに竜巻を飛ばす。

優「竜巻を横に吹かすか…おもしろいな。」

「だけどその能力、俺がもらった!」

文「えっ！どう言う意味ですか？」

優「受けてみろ！」
「旋風　疾風迅雷！」

優は周囲の空気を操り、巨大な竜巻を形成させる。
竜巻は文の飛ばした竜巻を一瞬で呑み込んだ。

文「あややや！何と？」

優「お前の風は俺の風でもある！」

文「くぅ…」
「逆風　人間禁制の道！」

文は風を操り、文の後ろから優に向けて豪風が吹き荒れる。
その豪風に乗って、ゴミやら木の棒などが飛んで来た。

それに対し優は…

優「旋風　疾風迅雷　一盾一　！」

手から風を放ち、更に他の風も操って盾として優自身の目の前に展開。

すると、豪風によって飛んで来る物体は呆気無く吹き飛んだ。

文「ずるいですよ！盾に使うなんて！」

優「あっそ、なら攻めだけに使うわ。」

「旋風　疾風迅雷　－刃－　！」

今度は手を高速で振るい、真空の刃を放つ。

文は大量の真空の刃に驚き…

文「あやや…」

「旋符　紅葉扇風！」

文は椛葉の扇子を思いっ切り振って、目の前に竜巻を形成し、真空の刃を消し去る。

優「ほぅ～、考えたな。そろそろ面倒くなって来た。決着つけんぞ！」

文「はい！覚悟してください！これが私の…」

「本気です！！！」

「幻想風靡！」

文はいきなり周囲を高速で飛び始めた。

徐々に速度を上げ、最終的には音速に達した。

物凄いスピードで優に何度も突っ込み、攻撃を行う。

だがしかし…

優「んふふ…」

優は皮肉に笑いこう言った。

優「その程度かよ…俺には止まって見えるぜ。」

そう言うと優は文の音速を超えたスピードで飛び、そのスピードから光速に達した。

そのまま文の方向に向かい、近づき…

文「!?そ…そんな…」

優「幻想郷最速は…どうやら俺らしい…」

「瞬烈　刹那の百烈拳!」

バシッ!

そんな音が聞こえ、文は宙に浮いたまま飛ぶのを止める。

優は既に文の真後ろに居た。

と言う事はつまり…

ズガガガガガガガガガガガッ!!!

文の全身から拳の音が聞こえた。

拳の音が鳴り止むと同時に文は血を吐いた。

文「ブフゥ…ッ!」

優が百烈拳を打ち終わるまでの時間は…

0．000001秒である。

文は空中から落下しそうになるが、そこに優がやって来て抱え、地面に降ろした。

優「恵みの波動。」

優は緑色の優しい波動を文に放ち…

優「茜、アントニオン。行こうぜ。」

茜「うん。」

ア「ハイ。」

と、そこへ…

霊「優！」

魔「優～！茜～！アントニオ～ン！」

優「おう！霊夢に魔理沙！やっぱり無事だったか！」

霊「もちろんよ。私を誰だと思っているの？」

優「紅白の腋巫女。」

霊「ち、ちょっと！」

茜「いいからいいから。とっとと行こうよ。」

魔「茜の言う通りだぜ、モタモタしてねえでとっとと行こうぜ。」

霊「もう！」

優「よし！行こうぜ！ボスの場所へ！」

〜続く〜

第２８話　守矢神社をやっつけろ！　その３（後書き）

はが～…疲れたぜ…
次回はいよいよ守矢神社に！

ではまた次回。

第２９話　守矢神社をやっつけろ！　その４（前書き）

今回は守矢神社へ突入！
まず出会ったのは…

ではどうぞ。

第２９話　守矢神社をやっつけろ！　その４

守矢神社前にて…

優「…何か見えてきたぜ。」

茜「あそこに逃げたのか…」

ア「だけど何故、急に営業停止ヲ…」

霊「決まっているじゃない！
私の神社を乗っ取ろうとしているのよ！」

魔「普通そこまで考えが廻るか？
やっぱり霊夢は霊夢だな。」

霊「ふんっ！」

優「いいから行くぞ。」

優達は歩き、神社に近づいた。
それはそれは博麗神社と大差無い作りの神社。
出る言葉は…

優・茜・ア・霊・魔
「普通。」

…である。

と、そこに誰か近づいて来た。
それは…

？「誰ですかあなた達は？」

霊「見つけたわよ！」

？「あ、あなたは！」

霊「今度こそコテンパンにのしてやる！」

霊夢は肩をグルグルと回し、緑髪の少女に向かって歩いて行く。

と、そこへ…

優「霊夢！ここは俺に任せろ。」

霊「あぁ…もう…わかったわ。」

優「茜とアントニオンと魔理沙も手を出すなよ。」

茜「オッケー。」

ア「わかりましタ。」

魔「わぁったよ。」

優「さてと、俺は瀧沢　優。お前は？」

？「私は東風谷（こちや）　早苗（さなえ）です。一体何の用ですか？」

優「とりあえず、霊夢はお前に用が有ると言っていたから代わりに俺が相手になるんだ。

聞いた所、博麗神社に営業停止をするように言ったそうだな。」

「所で、お前の神社はあれか？」

早苗「そうです。私は守矢神社の巫女。
神奈子様は博麗神社を抑えれば信仰を集められると。」

優「説明はもういい。とっとと始めんぞ。」

早苗「わかりました！では！」

早苗は持っていたお祓い棒で何かを描く。
その描いた形は…

五稜星…

すると五稜星の形の弾幕が飛んで来た。

優「お、ちょうど普通の弾幕に飽きて来た頃だったし、今回はちゃんと戦えそうだ！」

優は五稜星の弾幕をサッとかわす。

その瞬間に優は波動を拳から放つ。

「波動拳！」

波動拳は早苗に一直線。

早苗「私も、おもしろくなって来ました！」
「秘術　グレイソーマタージ！」

早苗は空高く浮かび、五稜星をお祓い棒で描く。
すると早苗を中心に巨大な五稜星の弾幕が形成。
同時に五稜星は細かく別れ、弾幕として、大量に細かく分散する。

優「へへっ、楽しくなって来た！」

優は迫り来る弾幕を軽々避ける。

早苗「やりますね！」
「秘術　忘却の祭儀！」

早苗はまた五稜星を描き、早苗の周りから五稜星の結界を展開した。

優「うわっと！驚いたぜ、技の発生が早いとはな。だけど！」

優は地を蹴って、後方回し蹴りを五稜星の結界に向かって繰り出す。

すると…

バリーーーン!!!

優の繰り出した後方回し蹴りが五稜星の結界を突き破る。

その勢いで早苗は大きく仰け反る。

早苗「わわわっ!」

優「どうした?これで終わりなんて言うなよな?」

早苗「も、もちろんです!」

(つ、強い!あの時に戦った霊夢さんも強かったけど、この人はそれ以上。いや、以上なんかじゃ表せない程…)

優「来ないんならこっちから行くぞ。」

「波動　波動百烈拳!」

優は拳に波動を速攻で溜め、拳を高速で何度も繰り出し、波動拳を百発撃ち出す。

早苗「あっ！しまった！」
「祈願　商売繁盛守り！」

早苗はハッと気づき、大量のお札を優に飛ばす。
お札と波動拳はぶつかり合い、全て相殺。
早苗はホッと肩を撫で下ろすが…

優「ホッとする余裕か、なかなかやるな。」

早苗「いっ！いつの間に？」

早苗の目の前には腕組みをした優が居た。
優は腕組み解き、腕をブンと後ろに引いて…

早苗「はっ！」

早苗は咄嗟に腕を交叉させ、優の拳を防ぐ。

が、ダメージは予想以上に大きく、拳を受けた腕ならまだしも、内側の受けてない腕までもアザができる程。

さらには早苗は今の一撃でかなり後ろに下がっていた。

早苗「く…痛い…」

優「今のはそんな力入れて無いぜ？
そんなに痛いか？」

（痛いも何も、力を入れて無い？
どう考えたっておかしい！強過ぎる！）

早苗は心の中で本心を呟く。

優「まだ本気出しても無いのに諦めムードかよ…」

「戦うんならちゃんと本気で来い！」

早苗「・・・」

「ふふ…そうですね…では！」

「ここから私、東風谷　早苗の本気てす！！」

「奇跡　　白昼の客星！」

早苗は両手を掲げ、振り下ろす。

すると空中から優に向かって弾幕がバラバラと飛んで来た。

優「雨じゃあるまいし…」

そう言いながら優はステップで降り注ぐ弾幕をかわす。

優はステップの勢いそのままで高く跳ぶ。

早苗「そこに行ったなら！」

「奇跡　　客星の明るすぎる夜！」

早苗はお祓い棒で五稜星の形を描いた。

すると優の居る空中が白く光だし、優にダメージを与える。

筈が…

優「眩しい！何だよこれ？」

早苗「えぇっ？」

早苗はまさかと言う具合に驚く。

それもその筈、本来なら空中の光が相手に強力な攻撃を加える筈なのだ。

だがそれが無い。

いや、無いんじゃない。

優に対して効果が無いだけだ。

つまりは能力によって攻撃が効かないのだ。

優「眩しいのはキツいな、眼が痛くなる。」

「んじゃ…そろそろ…」

「気爆　超爆発波！」

優は全身に気を溜め、一気に解き放ち、気の超爆発を起こす。

ズガァーーーン！！！

早苗「私も…」

「開海　モーゼの奇跡！」

早苗はその場から一瞬で姿を消し、気の超爆発から逃れた。

優は爆発を終えると早苗が居ないのを確認。

その直後、優は気づいた。

優「そこか…」

「悪りぃが、お前の負けだ。」

そう言うと、優は腕をブラっとさせ……

瞬間…

ズガァッ！！！

早苗が突然現れた瞬間に拳を真上に繰り出し、早苗の腹に一撃。

早苗は何が起こったのかわからないまま気絶した。

優「勝負ありだ。」

優は拳の上で気絶している早苗を降ろし、そっと離れた場所に置いた。

茜「さっすが優、今日も…」

優「来るな！」

優が守矢神社に向かって歩きながら茜を止める。
その訳は…

ガッ！

ズガァーーーン！！！

優「…ッ！！！」

優は背中から突如巨大な柱に押し潰される。
地面が壊れ、優はめり込み、埋もれる形となった。

茜「！？」

ア「！？」

霊「！？」

魔「！？」

いきなり優に起こった現象の訳がわからずにただ硬直したままの四人…

と、その時…

？「早苗を倒すとは、なかなかやるな。」

「私は八坂（やさか）　神奈子（かなこ）だ。
守矢神社に祀られている風の神だ。
ま、今は山の神だが。」

神奈子は地面に埋もれている優に対して言う。
すると…

優「柱を武器に使うなよ全く。」

優は何事も無かったかのように巨大な柱を退かし、起き上がる。

そして巨大な柱を収まりきらない肩で抱えて優は…

優「さて…」

「行くぞ。」

～続く～

第２９話　守矢神社をやっつけろ！　その４（後書き）

早苗を倒した後に神奈子登場！
まさかの御柱の洗礼を受けるも、
優は無傷。

優「ようやくおもしろくなって来た。」

ではまた次回。

第３０話　守矢神社をやっつけろ！　その５（前書き）

優ＶＳ神奈子
人間ＶＳ神

どちらが勝つ…

ではどうぞ。

第３０話　守矢神社をやっつけろ！　その５

守矢神社前にて…

優「さて…」

「行くぞ！」

優は肩に乗せた巨大な柱を神奈子に向けて振る。

神奈子はそれに対し、御柱を壁として自分の目の前に配置した。

すると…

ガーン！！！

優の振った御柱と神奈子の壁の御柱がぶつかり合い、盛大な音が鳴る。

優「次行くぞ！」

優は連続で巨大な御柱を横に振る。

ガーン！！！

防がれた。

次は御柱を大袈裟に振る。

ガガーン！！！

これも防がれた。

次に優は御柱を大きく振りかぶり、縦に思いっ切り振り下ろす。

ガァーン！！！

これも防がれてしまった。

だが、神奈子の壁の御柱は、今の一撃でピキピキとヒビが入り、砕けた。

神「くっ！」

優「来いよ神様！その柱俺にぶつけてみろ！！」

神「いいだろう…望み通りに！」
「神祭［エクスパンデッド・オンバシラ］！」

神奈子は御柱を背中に構え、御柱に優に向かって飛ばす。

更に、弾幕を回避の妨害のように撃ち出す。

ところが優は飛んで来る御柱に乗っかった後、神奈子に向かって走しり出した。

次々と御柱から御柱へ乗り移り、神奈子に向かって走る。

神「器用な奴だな！！」

優「そいつは…」

優は御柱から高く跳び、神奈子を目掛けて…

優「どうも…！」

踵落としを繰り出した。

神「邪魔だ！」

神奈子も御柱を優に目掛けて飛ばした。

優は踵落としを繰り出し、御柱を真っ二つに叩き割った。

神「蹴りだけで私の御柱を真っ二つにするか…」

「おもしろい…久しぶりに本気が出せそうだ！」

神奈子はそう言うと、体に力を溜めた。

すると、大玉弾幕を左右に払うように撃ち出し、バラバラと飛ばした。

優「大玉をばら撒くだけじゃ当らねぇよ！」

優はばら撒かれた大玉弾幕を簡単に避けた。

神奈子はまた力を溜めた。

今度は鋭い弾幕が大量に撃ち出され、一定進むと、優に向かって飛んで来た。

優「追尾なんてはなから俺には通用しねぇ！」

優は飛んで来る鋭い弾幕を横にサーっと動いて避けた。

神奈子は再び力を溜めた。

バラバラと一定量の中弾幕が無数に放たれた。

優「この弾幕、避け易いな。」

優は単に止まったり、少しずれたりして無数のばら撒き弾幕を避け切った。

が、神奈子は再び力を溜め、最初の大玉弾幕ばら撒きへ…

優「終わらないなら…」

優は右手を神奈子に向け…

「はっ！！」

と言い、右手から波動を放った。

が、波動は弾幕を消し飛ばしただけで神奈子には傷一つついていない。

優「・・・」

ピーン

「そうか…なるほどな…」

優の中の何かが光った。

簡単に言うと　閃いた　だ。

優は眼を閉じ、深呼吸で心を落ち着ける…

そして…開眼！

ズギャーーーン！！！

眼の中の瞳は灰色に染まり、凄まじい気が風と共に流れる。

秒速３０m程の風と絶大な気が神奈子にぶつかる。

神「なっ?何だこの力は?」

優「あんまり使う気は無かったんだが、お前の無敵状態を破るためだ。」

「[無想転生]!」

優はそう言い、神奈子に目掛けて突っ込む。

だが、優は動いていない…

何故なら…もう神奈子目の前に居たから…

神「・・・」

「…なっ?い、いつの間に?」

優「俺のスピードは光を超えた…気づくのに時間が掛かるのは仕方が無い事…」

「だが、攻撃はせめて…わかった方がいいぞ。」

優はフッと笑い、神奈子に拳を繰り出す。

と言う前に既に、神奈子の無敵状態は破られ、神奈子の頬には優の拳の跡が…

しかも神奈子自身は殴られた事に気付いていない…

すると…

ズガァァッ！！！！

神奈子の頬から凄まじい拳の音が鳴り響き、
神奈子は何が起こったのかわからない顔をして、地面に激突した。

ドガシャーーン！！！

神奈子が地面に激突した瞬間、地面は激しく割れ、破片が四方八方へ飛び散る。

神「うあぁぁぁぁあああぁぁあああ！！！」

優「そんなんじゃ、『何だ、ただの神か…』って言われちまうぞ。」

「いや、もう言われてるかも…」

神「く…くそっ……何て…力…だ…」

優「何だよ、仕方ねぇな…」
「恵みの波動。」

優は優しい緑色の波動を神奈子に向けて放った。

神「なっ？これは？」

優「そら！来いよ、続き始めんぞ。」

神「あぁ、なら！」
「天流［お天水の奇跡］！」

神奈子は弾幕を６列に揃えて飛ばした。

弾幕は優に一定まで近づくと、それぞれが形を変え、４つは優に向かって飛ぶ弾幕。

２つは優の動きを妨害するように一定の回転をする弾幕。

優「貧弱だな…」

ボソっとそう言うと、優は音速で神奈子に近づき…

優「耐え切れるか？」
「拳撃［爆裂乱舞］！」

優は拳と脚のコンボを高速て神奈子に叩き込む。

ズガガガガガガガガガガガガ！！！

神奈子は拳の攻撃て身体中を傷だらけにし、気絶寸前で耐えている状況。

そして優が最後に拳の一発…

優「オラァ！」

ズガァッ！！！

神「ぐぶぅっ！」

神奈子は腹に拳をくらい、吐血。

どうにもできない痛みが全身に走る。
優は神奈子から離れ、こう言った。

優「さてと、どうする？諦めて降参したらどうだ？」

神奈子はその言葉を聞いた瞬間、口から滴る血をペッと吐き出し、こう言った。

神「諦めるだと？言ってくれるな…」

「神を…舐めるなぁぁーーー！！！」
「［マウンテン・オブ・フェイス］！！！」

神奈子は咆哮の如く叫ぶと、弾幕を花の形にし、３つの大、中、小の花を形成。

そして弾幕は小から中、大の順番に弾幕が崩れ、優に向かって範囲の広い弾幕が大量に飛んで来る。

優「いいんだな…？なら…」

「耐えろよ？」
「飛龍［翔龍波］！」

優は右手を引いて、引いた右手に波動を溜める…

そして溜めた後に神奈子目掛けて波動を拳から繰り出す。

すると波動の龍が神奈子に向かって飛んで来る。

波動の龍は口を開けた瞬間…

ガキン！！！

ジャキィィィーーーン！！！！

神奈子を喰らい、そして貫いた。

神奈子は波動の龍の貫きにより、身体中がズタボロになった。

神奈子は力無く落下。

が優がそこへ抱えに来た。

優「もう一人も撃破と…」

優は神奈子を地面にゆっくり降ろした。

そして優はまた戦闘体制を取る。

何故なら…

？「早苗を倒した上に神奈子も倒すとは…」

「やるね、君。」

優「そいつはどうも…」

？「私は洩矢（もりや）　諏訪子（すわこ）。土の神…」

優「全く…おもしれぇなこの神社、神様が二人も居るじゃん！」

「いいや、早苗を含めた三人だったっけ？」

諏訪子は何故それを知っているのかに驚いたが、優はその驚く隙を与えなかった。

優「覚悟しろよ…？」

「あんたが最後の砦だ…」

〜続く〜

第３０話　守矢神社をやっつけろ！　その５（後書き）

ついに風神録編ラスト！
最後は洩矢　諏訪子。

果たして…

ではまた次回。

第３１話　守矢神社をやっつけろ！　ＥＸＴＲＡ（前書き）

風神録編ラスト！

最後は洩矢　諏訪子。

優「神がどうした？俺は神も殺せるぞ…」

ではどうぞ。

第３１話　守矢神社をやっつけろ！　ＥＸＴＲＡ

守矢神社前にて…

優「覚悟しろよ…？」

「あんたが最後の砦だ…」

優は瞬間に波動を拳に溜め、波動拳で速攻を仕掛けた。

「それが弾幕なら凄いよね。」

「開宴［二拝二泊一拝］！」

諏訪子は小レーザーを流れるように綺麗に大量に両方向から撃ち出す。

さらに一定のタイミングで大、中、小の弾幕がバラバラに出現し、優に向かって飛んで行く。

その時、優は何となくイラッとしていた…

優「弾幕なら凄い…？それ、俺の波動拳をバカにしていると受け取っていいんだよな（怒）」

優は両方向から撃ち出される小レーザーを左右に神速で避け、飛んで来る大、中、小の弾幕を前に音速で進んでかわす。

優「なら見せてやるよ…」

「俺の究極を！！！」

「波動［波動百烈拳］！」

優は両拳に波動を瞬間で溜め、拳を高速で繰り出し、波動拳を百発撃ち出した。

波動拳はいつもより倍以上も速度が速い。

これに対し諏訪子…

諏訪「わぁ！は、速い？」

諏訪子の驚いている間に、既に百発の波動拳が目の前にあった。

そして…

ドバババババババババババババ！！！

波動拳は諏訪子に全弾命中。
諏訪子は思いっ切り吹っ飛んだ。

諏訪「いたた…」

茜「あらら…あの娘、優を少し怒らせちゃったね…」

霊「優が怒ると何かあるの？」

ア「形がきｅ『黙ろうね～！』もごもご…」

魔「ヤバい事聞いてしまった気がするぜ…」

優「さてと、究極はまだ見せ切っていないぜ。」

「こっからが本番だ…本気で来ないと、死ぬぜ？…お前…」

諏訪「何？…その究極って…」

優「今からそれを見せてやる…」

「飛龍［翔龍波］！」
「瞬烈［刹那の百烈拳］！」

霊「同時に2個スペルカードを？」

魔「いくらなんでも無茶だぜ！！」

「通常より力を倍以上も使っちまうぞ！！」

茜「大丈夫！優なら大丈夫！」

優は腕を引いて拳に波動を溜める。
そして拳を前に突き出し、拳から波動の龍を放つ。

直後、諏訪子に一瞬で近づく。

諏訪「いっ！いつの間に？」

優「死ぬなよ？」

諏訪「えっ？」

と、諏訪子が言った時、既に優は諏訪子の後ろに居た。

諏訪子は優が居ないのに驚き、辺りを見回す。

その見回してる間に波動の龍が諏訪子の目の前に近づき、そして…

ガキン！！！

波動の龍が諏訪子を喰らった瞬間…

ズガガガガガガガガガガガガガガッ！！！

諏訪子の全身が拳の音を発てる。

その直後…

ジャキィィィィーーーン！！！！

波動の龍は諏訪子をその身で貫く。

諏訪子は凄まじい威力を持つ技を一気に2回もくらい、濃血を吐き出した。

諏訪「うぅ…ブハァ！！！」

諏訪子はそのまま仰向けで倒れ込んだ。

優「恵みの波動。」

優は手から優しい緑色の波動を放ち、諏訪子の身体を癒す。

諏訪「痛く…無い…どうして…」

優「まだ見せ切って無いって言っているだろ。まだまだこっからだ。」

優は立ち尽くし、見た目からは無防備の状態で諏訪子は前に立つ。

諏訪「わかった…じゃあ…」

「行くよ！！！」

「土着神［七つの石と七つの木］！」

諏訪子は棒のようなレーザーを七つ飛ばし、

そしてレーザーが優の隣辺りで留まる。

すると、弾幕が全体にばら撒かれた。

だが優はその弾幕に対し、ボソッと…

優「やっぱりただの神か…」

優は七つの棒レーザーを物ともせず、ばら撒かれた弾幕軽々避ける。

諏訪「土着神［ケロちゃん風雨に負けず］！」

諏訪子は後ろに連なる無数の弾幕を放ち、優に向かって弾幕を降ろす。

更には小弾幕を前に向かって大量に撃ち出し、逃げ場が無くす。

だが…

優「手の混んだ弾幕だな。意味の無い攻撃がそんなに好きか?」

諏訪「どう言う事?」

諏訪子は驚くようにそう言う。

その時…

優「こう言う事…」

諏訪「!?」

諏訪子は何時の間にか優が目の前に居た事に冷や汗を流す。

すると優は右手を諏訪子の顔前に向け、波動を放った。

バァァーン!

諏訪「うぁぁあああぁぁぁ!!!」

諏訪子は波動によって吹っ飛び、地面にぶつかった。

諏訪「あぁぁ…うぅ…」

優「どうした?まだ終わりじゃ無いよな?」

諏訪「くぅぅぅ…」

「土着神［宝永四年の赤蛙］…ッ！」

諏訪子から小さい分身が現れ、弾幕を配置しながら優を追尾する。

小さい分身は数を増やし、優を次々と追尾。

更に配置された弾幕は炸裂し、広がる。

優「追尾は通用すると思っている馬鹿がこの世界には一杯だな。」

優はそう毒を吐くと、再び諏訪子の目の前に現れた。

諏訪「また？」

優「次俺がお前の前に来たら…」

「覚悟しろよ…？」

その言葉に対し、諏訪子は何も言えず、黙り込む。

そこへ優が…

優「どうした?子供みたいだけど、あくまでも神様なんだろ?最後くらい決めたらどうだ?」

諏訪子はその言葉に反応した。

諏訪「じゃあ…これで…」

「最後!!!」

「祟り神(ミシャグチ)「赤口」!!!」

優と諏訪子は地面に降りた瞬間…

「はぁ!!!」

諏訪子が地面に両手をつく。

すると両手から黒いオーラが這うように優に近づき、優に触れた瞬間…

4匹の巨大な白蛇が優を囲む。

優「なるほど…良いね。」

優は眼をキリッと鋭くすると、巨大な白蛇はそれに合わせるように

口を大きく開け、優に向かって噛み付く。

瞬間周りが暗転し…

ズガガガガガガガガガガガガッ！！！

と、音がした。

すると周りが明るくなり、その場に立っていたのは…

優「全く、遅いっての。こんなんで俺を噛めると思いなよ。」

諏訪「な…何で…？」

諏訪子は凄まじく驚いた。

あの状況下で何故無傷で居られたのか…

優「暗くなったから少し驚いたけど、確実に白蛇が近づくのはわかったからな。」

「ぶっ飛ばすのなんざ、楽勝中の楽勝。」

「竜巻旋風〇を繰り出したら即終了しやがった。」

優は淡々と喋り、諏訪子に近づく。

そして諏訪子の額に指を突き、こう言った…

優「お前の負けだ…」

スッキリしたかのように優はそう言った。

諏訪「あう～…負けか～…」

そこへ霊夢が近づいて来た。

霊「これに懲りたら、二度と私の神社を乗っ取ろうとしない事ね！！！」

優「はいはい、ガミガミ言わずにとっとと帰るぞ。」

優は霊夢の両腕を抑え、引きずり戻した。

茜「お疲れ様！」

ア「今日もさすがでしたネ。」

魔「全く、呆れる強さだぜ。」

優「呆れて悪かったな。」

茜「帰ろうか。」

ア「そうですネ。」

優「あぁぁ…何だか全身が痛くなって来た…」

茜「頑張ったからじゃない？」

優「そうだな。」

優達は今回も圧倒的強さで解決。

だが…この翌日…

優は死の運命(さだめ)をその身に受けてしまう…

～続く～

第３１話　守矢神社をやっつけろ！　ＥＸＴＲＡ（後書き）

次回…

優死す…？

それは運命（さだめ）と言う名の試練…

ではまた次回…

第３２話　優死す…？それは運命と言う名の試練…（前書き）

運命は優を殺す…

だが、それは優への試練…

死を乗り越えた時…

彼は究極の強者となる…

ではどうぞ…

第３２話　優死す…？それは運命と言う名の試練…

優達の住居にて…

優「ふぁ～……いてぇな…」

茜「どうした？何が痛い？」

優「身体中が痛いんだよ…昨日からな…」

茜「大丈夫？」

ア「優さん、病院に逝った方ガ…」

優「おい…アントニオン、お前行くが逝くになっているぞ。」

ア「すいませン…」

優「じゃあとりあえず、永琳のとこ行くか…」

茜「行ってら～。」

ア「気をつけテ。」

優は身体の痛みを治すため、永琳の診療所に行く事にした。

優「あ～、痛～…」

とそこへ…

？「見つけた！」

優「何だ？この馬鹿みたいに寒い声は。」

？「あたいはバカじゃない！」

優「何だ、あの時のおバカか…」

チ「バカ言うな！あたいはチルノ！あたいは天才！あたいは最強！」

優「何の用だよ。」

チ「あの時のリベンジよ！」

優「お前と遊んでいる暇はねぇよ！」

？「チルノちゃ～ん！」

突然また少女の声が聞こえて来た。

優「誰？」

？「あ、私は大妖精と言います。チルノちゃんがすいません！」

優「あぁ大丈夫大丈夫。それじゃあ…」

そう…優がチルノと大妖精に背を向けた瞬間…

グググ…

優「！？」

突然優の背中に激痛が走る。

大「あれ？どうしました？」

チ「大丈夫？」

優「あぁ…大丈夫だ…」

グググ…！

優「あぁぁぁ…！！！」

優の背中に先程より強い激痛が背中に走った。

と、その瞬間…

バシュゥゥゥーーー！！！

優の肩甲骨辺りから鮮血が飛沫となって流れる。

優「……マジ…かよ…」

大「……キャアアアアアアアアア！！！」

チ「…あたい……誰か呼んでくる！！」

優「行くな！！！」

チ「で、でも…！！！」

優「俺は、大丈夫だ…じゃあな…」

シュン

優はそう言い瞬間移動で永琳の診療所まで向かった。

シュン

優「最初から瞬間移動使えば良かったな…
あははは…」

バシュゥゥゥーーー！！！

そんな事を言った瞬間、今度は右肩から鮮血が飛沫として流れた。

優「今度はこっちか…」

優は右肩から鮮血を流しながらも診療所の扉を開けた。

ガララ…

鈴「いら……どうしたんですか？？」

優「へへ…何か知んないけど、急にな…」

鈴「大丈夫ですか？今師匠を…」

「師匠！！！師匠！！！」

永「何よそんなに騒いで何があったの？」

鈴「師匠！こっちです！」

永「ちょっ！うどんげ！……どうしたの？」

優「とりあえず…包帯巻くだけで…いいから…」

優は右肩を押さえながら歩く。

が…

バタン

優は力無く倒れてしまった。

鈴「…師匠！」

永「大至急手当をしないと、命に関わるわ…早く運ぶわよ！」

鈴「はい！」

八雲家にて…

紫「ＺＺＺ…」

紫は呑気に寝ていた。

と、そこへ…

？「紫。」

紫「ＺＺＺ…」

？「紫、起きなさい。」

紫「むにゃむにゃ…」

？「……喝！」

バシッ！

紫「痛い！」

？「起きなさい紫。」

紫「…闇魔様が何故ここに居るのよ…」

映姫「優と言う少年を知っていますね？」

紫「優がどうしたんですの？」

映姫「彼は今日…」

「死にます。」

紫「……まさか…」

映姫「本当です。偽りはありません。彼は今日死にます。」

紫「何故？彼は何より強いのよ？一体どうして？」

映姫「彼は運命（さだめ）に従っただけです。」

紫「運命？その程度で彼が死ぬなら運命なんてクソくらえよ！私は優を死なせない！」

映姫「話を最後まで聞きなさい。」

紫「・・・」

紫は俯いた状態で映姫の話を聞く事にした。

映姫「彼は今、運命と言う名の試練に立ち向かっています。」

紫「試練？どう言う事？」

映姫「彼は試練を達成する時…」

「究極を超えた力を手に入れます。」

紫「じゃあ、その試練を達成するには…」

映姫「試練の達成方法は…」

「死ぬ事です。」

紫「…とことんついて無いわね…優…」

永遠亭にて…

～優視点～

・・・

優「あぁぁ…痛たた…」

目が覚めたら俺は…

ベッドの上だった…

背中や肩には包帯が巻かれていた。

優「うぅっ！！」

ガララララ

鈴「あっ！ダメですよ動いちゃ！傷口が開いちゃいますよ！」

優「おぉ、ブレザーうさ耳少女…」

「そうだ、この傷が出来た原因、知らねぇか？」

鈴「それが……原因が一切わからないんです…」

「何故あんな出血の仕方をするのか…まるでわからないのです…」

優「永琳に聞く。」

鈴「あっ！ダメですって！」

そう言って鈴仙は俺の体に触れた。

すると鈴仙は顔を赤くして離れた。

優「わけわからん…」

鈴「／／／／／／／／／／…」

俺は鈴仙を無視して永琳の所へ行った。

優「永琳、ちょっと教えてほしい事がある。」

永「あっ！動いたらいけないって聴いて無いの？」

優「聞く義理が無い。それより教えてほしい事がある。」

永「何かしら？」

優「この肩や背中の傷の原因、なんだか知らないか？」

永「……原因はわからないわ。」

優「んだよ…」

永「だけど…このままいけば、あなたは全身の穴と言う穴から血を噴き出して死ぬわ…」

優「……そうか…」

永「…落ち込む事は無いわ。」

優「いや、むしろスッキリした。」

永「えっ？」

優「このままいけば死ぬんだろ?なら最後くらいやりたい事やって過ごしたいじゃん。」

永「優…」

優「死にたくないとか言っても、往生際が悪いだけで意味無い。」

永「あなた…死ぬのが…恐くないの?」

優「恐い?俺には最初っからそんな言葉は存在しない。」

「あるのは勇気。ただそれだけだ。」

俺はそれだけ言い放つと、持っていたシャツを着て永遠亭を出た。

ガララ

優「とは…言いつつも…」

バシュゥゥゥーーー!!!

優「本当は…もうヤバかったりして…」

今度は左脇腹から血飛沫が出て包帯を突き破った。

優「せめて…あいつらの顔を…最期に見たいかな…」

俺はそんな願いを抱きながら歩き始めた。

すると…

？「ぐおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

幻想郷中に響き渡る咆哮が聞こえた。

優「やっぱりこうなるか…」

俺は飛んで咆哮の聞こえた場所へ急いだ。

見えた姿…

何だ？この岩石巨人。

多分こいつだろうな、さっきの咆哮は…

俺は岩石巨人の前に降りた。

優「デカイな…４０mはあるんじゃね？」

ウルトラ級のデカさに驚いたが、やっぱり目的は倒す事。

優「さて、ちゃっちゃと片付けるか…」

俺は音速で岩石巨人に近づき、手を岩石巨人に向けて波動を放った。

バァァーン！

ところが…

バシュゥゥゥーーー！！！

優「なっ？」

波動は放ったが、弾かれてしまい、その上波動を放った右手から血飛沫が…

優「くそ！何でだ？」

そんな事を言っていたら目の前から岩石の巨大な拳が…

咄嗟に腕を交叉させて防ぐ。

ドガァッ！

岩石の巨大な拳が腕に直撃した瞬間…

バシュゥゥゥーーー！！！

俺の両腕から血飛沫が噴き出した。

普段なら痛くない筈の攻撃が…

途轍も無く痛い…

だけど腕は折れていないようだ。

更に攻撃で吹っ飛ばされた時、足で上手く踏ん張っていたら…

バシュゥゥゥーーー！！！

踏ん張っていた両脚両足から大量の血が噴き出した。

優「…何だよ…これ…」

攻撃行動、防御行動の全てが許されない…

すると岩石巨人が岩をたくさん投げてきやがった。

攻撃も防御もできないなら…

避けるしか無いじゃねぇか！

俺は音速で岩石を避けまくった。

優「これでどうだ！」

バシュバシュゥゥゥーーー！！！

優「はっ…？」

スピードも落ちたか…

俺は横腹、頬、首から血を噴き出していた…

くそ…どうしたら…

茜「優！」

ア「優さン！」

優「なっ？お前らどうして？」

茜「優、全部あの人達から聞いたよ！」

優「あの人？」

茜は俺の真後ろを指す。

振り向くと…

永「苦戦してるわね。」

鈴「助けに来ましたよ！」

チ「あたいも！」

大「及ばずながら、参戦致します！」

優「お前らか…」

俺は溜息をついた。

霊「私もね。」

魔「私もだぜ。」

優「…とりあえず助かったぜ…」

茜「じゃあみんな！この岩石野郎を倒そう！」

ア・永・鈴・チ・大・霊・魔

「うん！」

そしてみんながみんなスペルカードを使用。

茜「［二天・四神斬］！」

ア「［マインド・クラッシュ］！」

永「天呪［アポロ１３］！」

鈴「幻爆（マインドスターマイン）［近眼花火］！」

チ「凍符［マイナスＫ］！」

霊「境界［二重弾幕結界］！」

魔「魔砲［ファイナルスパーク］！」

それぞれが全力の攻撃。

岩石巨人は全てをくらった。

そして崩れた。

茜「やった！」

チ「あたいったら最強ね！」

霊「弱過ぎるわね。」

魔「あっという間だぜ。」

だけど、それでは終わらなかった。

何故なら…

ゴロゴロ…

ゴゴゴ…

ガラガラ…

岩石巨人の身体である岩石が何かに集まりはじめた。

いや…再生を始めた…か…

ア「岩石巨人が…再生ヲ！！！」

鈴「そんな…再生だなんて！！」

永「ただでは倒せない…か…」

優「…俺がやる。」

茜「優、そんな身体で『俺に構うな！！！！！』優…どうして？」

優「お前達の為なら…死んでもいい…」

ア「何を言ってるんですカ！！！」

優「うるせぇぇ！！！！！」

ア「優さン！！」

優「どうせ死ぬんなら…あいつを、この手で…」

「倒す！！！」

俺は死を覚悟した！

優「うおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

俺は思いっ切り岩石の巨人に突っ込み、無数の拳を叩き込んだ！

ズガガガガガガガガガガガガガガ…！！！

優「うおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

バシュ！！！

ジュバッ！！！

ヴォシュッ！！！

岩石巨人を殴れば殴る程俺の腕、肩、拳は血飛沫を上げる。

優「堪らなくいてぇもんだな…」

すると岩石巨人は俺に向かって岩石を投げた。

優「何っ？」

ドガァッ！！！

バシュゥゥゥーーー！！！

岩石は俺の頭に直撃した。

凄く痛い…

頭から噴き出る血で顔の半分が血に染まった。

だけど、こんなので諦めない！

俺は後ろに反った顔を前に戻し、攻撃を返す！

優「瞬烈［刹那の百烈拳］！！」

俺は瞬間で百発の拳を岩石巨人に打ち込んで後ろに行く。

バシュゥゥゥーーー！！！

再び拳、腕、肩から血飛沫が上がった。

くそ…もう…動かせないか…

今の技で腕が死んだ…

腕全体が血の色に染まった。

ズガァァァーーーン！！！

岩石巨人の身体が一瞬弾けた。

が…すぐに後ろを向き、岩石巨人は俺を掴んだ。

優「ぐあっ！！離せ！！」

バシュゥゥゥーーー！！！

掴まれた後に全身から血飛沫が上がった。

優「うあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁ！！！！！」

岩石巨人は俺を地面に叩き付けた。

ズガァァァーーーン！！！

優「うがぁぁぁぁ…！！！」

茜「優！」

すると岩石巨人が茜を殴り飛ばした。

ドガァァッ！！！

茜「あぁぁぁぁ！！！」

ア「茜さん！」

岩石巨人は今度はアントニオンを殴り飛ばした。

ズガァァッ！！！

ア「ウアアァァァ！！！」

チ「もじゃ頭！」

大「みなさん！」

岩石巨人はチルノと大妖精を巨大な手で薙ぎ払った。

ドガガァァン！！！

チ「ぁぁぁぁぁあああ！！！」

大「あああぁぁぁぁぁ！！！」

永「くっ…！」

鈴「うぅ…」

霊「どうしたら…」

魔「くそっ…！」

岩石巨人は永琳と鈴仙を両手で薙ぎ払い、霊夢と魔理沙は両拳で殴り飛ばした。

永「あぁぁぅぅぅ！！！」

鈴「うぐぅぅぅ！！！」

霊「あああぁぁぁぁ！！！」

魔「あああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

岩石巨人は拳を俺に向かって振り下ろした。

く…ッ！！！

ズガァァァーーーン！！！

岩石巨人は直後拳を上げ離した。

優「く…くそが…」

俺は立ち上がって再び岩石巨人に向かおうとした…

その時…

バシュゥゥゥーーーー！！！！！

バシュゥゥゥーーー！！！！！

バシュゥゥゥーーー！！！！！

俺の全身の穴と言う穴から血が大量に噴き出した。

血の噴水のように…

優「……く…」

「うあああぁぁぁあああああぁぁぁぁぁああああああぁぁぁぁ！！！！！！」

茜「……はぁ…」

「優ううぅぅぅうううぅぅぅぅ！！！」

ア「優さあああああぁぁぁぁあああン！！！」

永「……くぅ……」

鈴「そんな……」

俺はそのまま……

力尽きた……

ドサァ

茜「……」

「いやぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁ！！！！！」

～outside～

優は力尽きた…

全身を血に染め、地面を血の海に変えた…

茜「嘘…嘘嘘嘘嘘……嘘よ！！！！！」

ア「優さん……そんな…」

八雲家にて…

映姫「そろそろです。」

紫「そろそろ…ね…」

謎の岩場にて…

その時……

優は動きだした。

まずは手を地面に付き、それから足を動かし、頭を上げ、体を起こし、立ち上がった…

茜「ゆ…優…？」

ア「優…さン…？」

永「し……死んだ…筈じゃ…」

鈴「一体…何が…？」

チ「どうしたの？」

大「一体…」

霊「優…何で……」

魔「優……」

すると優は眼を鋭く開き、全身から気を放った。

スギャァァァーーーン！！！！！！

その気は大地を揺るがし、岩をバラバラに崩し、空の雲を渦巻かせた。

優「……」

「ウゥゥゥゥアアア

空は雷雲うごめき…

各地では異常気象が発生した。

すると優は瞬間、岩石巨人の目の前に現れ、スペルカードを発動した。

優「超絶［究極の拳］…！！！」

優が拳を繰り出した瞬間…

ズバァァァーーーン！！！

衝撃波が周囲に発生した。

それが５回…

ズバァァァーーーン！！！

ズバァァァーーーン！！！

ズバァァァーーーン！！！

ズバァァァーーーン！！！

するとその瞬間…

ズガガガァァァァーーーーン！！！！！

岩石巨人が一瞬にして崩れ去った。

残ったのは岩石巨人の　コア…

優はそれを空高く投げた。

優「［究極かめはめ波］！！！！」

優は両手首を合わせ、波動を一瞬で巨大にし、コア目掛けて波動を放った。

優「はぁッ！！！」

シュバァァァーーーーン！！！！！

鋭い閃光と共に超巨大な波動が天空のコア目掛けて放たれた。

波動は一瞬でコアを覆った。

優「消えろぉぉぉーーー！！！」

優は右手だけ残し、力を更に入れる。

ドバァァァァーーーーン！！！！！

すると波動は更に巨大化。

そらの半分を支配してしまった。

その瞬間優の身体に付着していた血が全て弾かれた。

そして…

・・・

コアは塵一つ残さず消え去った。

そして優は茜達を見てこう言った。

優「よう、悪かったな、心配させて。」

優は微笑んでいた。

八雲家にて…

紫「映姫様…さっきの揺れ…」

映姫「はい。」

「彼は試練を乗り越えました。」

「私が伝えたかった事は以上です。では…」

紫「……凄まじ過ぎる…」

〜続く〜

第３２話　優死す…？それは運命と言う名の試練…（後書き）

試練を乗り越えた優…

彼は最強を超えた。

ではまた次回…

優の能力進化

（自分の害なる物全てを　無　にする程度の能力）

が…

（あらゆる害を　無　にする程度の能力）

になった。

彼に対しての害は全て無くなる。

斬られようが焼かれようが溶かされようが彼は無傷で居られる。

（ただし、格闘の攻撃、弾幕、スペルカードは例外）

第３３話　博麗神社倒壊の異変　その１（前書き）

緋想天編…

突然、個人だけに起きた異常気象…

なんてシリアスはやめて…

緋想天編です。

ではどうぞ。

第３３話　博麗神社倒壊の異変　その１

優達の住居にて…

今日もゆったりとした時間が流れていた。

優達にとってはかなり平和な時間。

だが…

優「ん～…何なんだろうな…この天気…」

茜「雨が降っているね…」

ア「違いますヨ、逆に日照り状態ですヨ…」

優「いや…俺には雨と日照りが同時に起こっている気がする……」

「おい…ちょ待て…何だこの天気…おかしいぞ。」

茜「それは私も思った…」

ア「僕もでス。」

優「もしかして…いや…
もしかしなくてもこれは確実に…」

優・茜・ア・朱・玄・白・青
「異変…」

優「うおい…何で四聖獣まで出て来たよ…」

朱「いいじゃないですか。」

玄「わしらも言ってみたかったのじゃ。」

白「それに出たいですし。」

青「俺達も協力者だしな。」

茜「だね。」

優「まあ異変とわかっても、異常気象だけじゃな…」

「霊夢ならわかるだろうから、聞きに行くか…」

博麗神社にて…

その頃、霊夢はいつも通り博麗神社境内を掃除していた。

いつも通り変わらず…

たが、その時…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…！！！

大地を激しく揺らす大地震が発生した。

その揺れは不思議な事に周りの木々は揺れずに博麗神社だけが大きく揺れていた。

そしてその地震によって、博麗神社は倒壊してしまった。
それを間近で見ていた霊夢は膝から崩れてしまった。

その時、優達が博麗神社にやって来た。

優達は博麗神社が無い事に気づき、崩れていた霊夢を見つけ、駆け寄った。

優「おい！霊夢！どうしたんだ？」

優は霊夢の肩を掴み、少し揺らしながら聞いた。

すると霊夢はゆっくりこう言った。

霊「神社が……崩れたのよ…」

優「神社が？」

優は驚きながらも、前を見る。

そこで要約優達は気づいた…

山のような木片が博麗神社だと言う事に…

屋根が一番上に乗っかっていた為、理解できた。

茜「何であんな事に…」

霊「わからないわ…突然大地震が来てこうなったのよ…」

ア「地震？おかしいですネ…僕達が来る時には地震なんてありませんでしたヨ？」

霊「だとしてらあれはどう説明するのよ…」

ア「それは…」

優「考えたってしょうがねぇ…だけど…」

「誰かがやった事には変わり無いよな…」

ア「とりあえず、調べない事にハ…」

優達が捜査をしようとしていた時…

魔「おい！霊夢！」

魔理沙が歩いてやって来た。

魔理沙の上には雨雲が漂っていた。

優「何だ…？この変な天気は…」

奇妙な現象を目にした優はある事に気づく。

“この個人に起こる妙な気象現象…もしかしたら…”

優は茜の上を見た。

茜の上には雲が漂っていた。

次に霊夢。

霊夢の上は快晴…

自分の上も晴れ、実際は能力によってその様な現象が起きない。

アントニオンの上も見たら雲が漂っていた。

優はこれが誰がやったのか…に答えを固定し、空全体を見回した。

“気象現象が起こるなら、天気…つまりは天…　犯人は空に居る！”

そう心で呟き、優は空を見回す。

すると気になる物を優は見つけた。

それは今まで見た事の無い渦巻き雲が妖怪の山の上にあったのだ。

魔「おい、霊夢…　んだよ、この雲どうにかして欲しいのによ…」

「あれ？優何してんだよ。」

優「霊夢、見つけたぞ…」

霊「何を…？」

優「犯人の居場所だよ…」

霊「えっ？本当？」

優「あぁ、本当だ…」

魔「何だ?その居場所って…?」

そう魔理沙に聞かれた優は妖怪の山の上を指差した。

優「あれが、居場所だ。」

妖怪の山の上の雲を霊夢、魔理沙、茜、アントニオンが見た。

魔「あの雲が、そうなのか?」

優「あぁ、間違い無い。」

茜「何でそうだと断定できるの?」

優「お前達の上を見ろ…それが理由だ。」

優の言う通りに上を見る。

すると茜達は驚いた…

茜「何この雲?」

ア「他は日照りなのに対し、これハ…」

魔「この雲さ、家を出た時に気がついたんだけどよ…何なんだ?」

優「何らかの力が働いた物が働いて居るのは間違いないな。
それ以外にわかる事は無いけど、あの渦巻き雲からは異様な物を感じられる。」

茜「へぇ～…」

霊「じゃあ…行きましょう。」

霊夢はそう言いながら立ち上がり、優にそう言った。

優「ふふっ…そうこなくっちゃな…」

「よし、行こうぜ!」

優達と霊夢、魔理沙は妖怪の山へと飛んで行った。

妖怪の山の麓にて…

優達は妖怪の山の麓へと来た。

このまま行き、雲まで近づこうとした時…

？「風符［天狗道の開風］！」

突然竜巻が水平の状態で飛んで来た。

突然飛んで来た竜巻を優達は簡単に避けた。

優は竜巻が飛んで来た方向を見た。

そこには…

優「文…お前か…」

文「言ったでしょ？あなた達を無断で通すわけにはいかないと…」

魔「全く、今どの状況かわからないんだもんな…とっととそこをどいてもらうぞ！」

魔理沙はミニ八卦炉を右手に構え、文に向けた。

そして魔理沙が　恋符…　と呟いた瞬間…

霊「どいて。」

魔理沙が　マスタースパーク　と言い掛けた時、霊夢が魔理沙を横に突き飛ばした。

突き飛ばされた魔理沙はそのまま地面に転がった。

魔「痛ぇ！何すんだよ！」

霊「私が片付ける。」

「霊符［夢想封印］！」

文「通しません！」

「竜巻［天孫降臨の道しるべ］！」

霊夢は自分の周りに七色の七つの光の球を展開し、文に光の球を飛ばす。

文は椛葉の扇子で強く扇ぎ、巨大な竜巻を発生させた。

巨大な竜巻と光の球がぶつかり合った。

しかし、巨大な竜巻が先に弱まり、竜巻を消し、光の球が文に向かって飛んで行き、直撃した。

ピチューン！！！ＰＰＰ

文「あやや～～！！！」

文は光の球をくらい、思いっ切り吹っ飛んで行った。

霊「ほら早く行くわよ。」

優「あいよ。」

優達は妖怪の山の上へと飛んで行った。

霊夢の博麗神社を倒壊させた犯人を突き止める為に…

そして暫らくして要約渦巻き雲の真ん前まで来た。

ここから先に何があるのか…

優達は渦巻き雲の中に入って行った。

渦巻き雲を抜けると、そこには地上とは違う世界が広がっていた。

優達はその世界の地上に降り立った。

優「凄ぇ…まるでラピュ○みたいだな…」

茜「本当…天空の城とはいかないけど、天空に浮かぶ地上って感じだよね…」

ア「現実離れを超えた世界なのを改めて知りましタ…」

霊「此処に犯人が…」

魔「一体どんな奴が居るのかな…」

優達が天空に浮かぶ地上に静かに驚いた。

と、そこへ…

？「何者です？あなた達？」

突然横から女性の声が聞こえて来た。

振り向くとそこには…

黒い帽子を被り、肩には白いシルクを靡かせた黒いロングスカートの女性が居た。

優「誰なんだあんた…」

？「私は永江（ながえ）　衣玖（いく）です。
あなた達は地上人ですね。一体何故此処に…」

優「まずは自己紹介からだ。
俺は瀧沢　優。」

茜「私は大島　茜。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

霊「はぁ…博麗　霊夢よ。」

魔「霧雨　魔理沙だぜ。」

優「まあ、とりあえず…」

優は集中し、千里先を見た。

この能力は滝の前の見張りから奪った能力だ。

優はアレンジを加え、千里眼へと切り替え、犯人を探す。

そして優は見つけた。

異変を起こした犯人を…

優「見つけた！霊夢！行くぞ！」

霊「えぇ！」

優と霊夢はすぐさま飛び、犯人の居場所へ向かって行った。

衣「待ちなさい！」

衣玖がそう言い、優に攻撃をしようとした時…茜が二本の双剣を取り出し、衣玖の首元に添えた。

その瞬間衣玖は攻撃を中止し、剣を添える茜へ視線を移した。

茜「攻撃はさせない。優達を追いかけるなら…」

「私達を倒してからにして。」

その言葉に対し、衣玖は剣どかして言った。

衣「わかりました。遠慮無く倒させて頂きます！」

衣玖がそう言うと、茜が少し距離を取った。

茜「アントニオン、行くよ…」

ア「わかってますヨ…」

茜「魔理沙もお願いね。」

魔「わかったぜ！」

茜「さ～て…この双剣・風雷の力…見せてあげる！」

衣「私の力、甘く見ない方がよろしいですよ…」

～続く～

第３３話　博麗神社倒壊の異変　その１（後書き）

次回は衣玖戦！

天空に浮かぶ地上で戦いの火花が散る！

なんて事はあるのかどうか…

ではまた次回。

第３４話　博麗神社倒壊の異変　その２（前書き）

今回は茜達ＶＳ衣玖

天界の相手はどれだけ強いのか…

そして茜達は勝てるのか？

ではどうぞ。

第３４話　博麗神社倒壊の異変　その２

天界にて…

茜「じゃあ…行くよ！」

茜がそう掛け声を上げると、能力で動きを速くして疾風の如く衣玖に攻撃を行う。

双剣はリーチが短い代わりに速い攻撃を得意とし、攻撃自体に様々な工夫が出来る。

茜の攻撃は衣玖に…当たってもおかしく無い筈なのに…

疾風の如き攻撃は全てかわされている。

擦りもせず、完璧に…

茜「私の攻撃が当たらない？」

衣「どうしたんですか？攻撃が当たりませんよ？」

ア「茜さンの速い攻撃が全てかわされていル…」

魔「ぼ～っとすんな、私達も行くぞ！」

ア「わかりましタ！」

魔理沙とアントニオンも動き、茜と共闘する。

ア「爆撃［ミサイルボンバー］！」

魔「儀符［オーレリーズサン］！」

アントニオンはアフロヘアーから大量の小型ミサイルを撃ち、魔理沙は４つのカラフルな球体を自分の周りに配置し、球体から弾幕を飛ばした。

すると、アントニオンと魔理沙の攻撃に気づいた衣玖は首に掛けていたシルクを鞭のように振り、茜を攻撃する。

そして、瞬間に迫るミサイルと弾幕を流れる風の如くヒラヒラと避けた。

衣玖が動きを止め、地に足をつけた時…

魔「そこだ！」

隙の出来た衣玖に魔理沙は４つの球体からレーザーを放った。

すると…

衣「羽衣［羽衣は空の如く］！」

そう唱えた瞬間、衣玖の全身が空気包まれた。

そして衣玖の周りの空気がレーザーに触れた瞬間…

何とレーザーが衣玖に触れずに逸れてしまった…

魔「何だと？」

衣「無駄ですよ」

すると、茜は四聖獣を呼んだ…

茜「ねぇ…あの衣玖とか言う人の周りの気流は何かわかる？」

青龍「それは俺が…」

「あれは空気を操って気流を起こしてますね。恐らく、あれは能力で行っていると…」

茜「なるほどね…ありがとう、青龍」

青龍「これくらいお安い御用ですよ」

青龍から話を聞いた茜は四聖獣を戻した。

そして…

茜「能力ねぇ…なら空気を流してしまえば…」

「風雷解放！“風刃・雷刃”！」

そう言うと、茜の持つ双剣・風丸、雷電が属性を全開で解放し、リーチを伸ばした。

風丸は風を帯び、雷電は雷を帯びてリーチを伸ばした。

茜「その気流…私が吹き飛ばす！」
「風雷［風神の竜巻・雷神の雷鎚］！」

茜は風神を右手に高速で回転。

茜から巨大な竜巻の発生と共に風の刃が大量に竜巻から放たれる。
すると、竜巻の巻き込む風により、衣玖の周りの気流が竜巻に吸い込まれ、衣玖から消えた。

衣「なっ何？」

茜「今だよ！アントニオン！魔理沙！」

ア「わかりましタ！」
「眼撃［アイレーザー・爆発］！」

魔「わかったぜ！」
「光符［ルミネスストライク］！」

アントニオンは眼から貫通力の低い爆発型レーザーを衣玖に放った。

魔理沙は魔法を使い、自分の身長程はあろう星を衣玖に放った。

ところが…

衣「光星［光龍の吐息］！」

衣玖がそう言った瞬間、何処かで見たようなポーズを衣玖が執った。

右人差し指を空に向け、左手を腰に当てる。

このような衣玖のポーズを見た茜、アントニオン、魔理沙は少し硬直した。

“何そのポーズ！！？”

三人の心からそう聞こえてくる程…

と、ポーズに突っ込んでいる間に魔理沙とアントニオンが突然空中に発生した白い光の球によってダメージを受けた。

ア「ウゥアアアァァ！！！」

魔「うわあああああぁぁぁ！！！」

茜「アントニオン！！魔理沙！！！」

衣「次はあなたです！」
「魚符［龍魚ドリル］！」

衣玖はシルクを手に巻き付け、ドリルのように尖らせ、茜に向けて突き出す。

茜「仕方ない…武器を変えるか…」

「朱雀、玄武！行くよ！」

茜は武器を刀の朱雀と玄武に変え、衣玖の突き出したドリルを斬り裂いた。

斬り裂かれたドリルは弾かれ、元のシルクに戻った。

衣「なかなかやりますね…」

茜「まあね…」

衣「ではこれはどうです！」
「雷符［エレキテルの龍宮］！」

茜「またその構え…」

「四聖獣のみんな…麒麟様呼んで…」

朱雀「えっ？あっ、はい！」

白虎「わ、わかりました！」

四聖獣は慌てながら準備をする。

そうこうしてる内に真上から電撃が降って来た。

と、そこに…

魔「彗星［ブレイジングスター］！」

突然魔理沙が音速で茜に近づいて手を掴み、電撃から助けた。

茜「魔理沙！ありがとう！」

魔「礼はいいさ。それより、あいつを倒す方法はあるのか？」

茜「もちだよ！」

魔「そうか！よし、頼んだぜ！」

「おいアントニオン！」

ア「ハイ！」

「眼撃［アイレーザー・拡散］！」

アントニオンは眼から大量の小レーザーをばら撒くように撃ち出した。

衣「見えてますよ」

そう言い、衣玖はアントニオンの拡散レーザーを避けて成す。

と、突然…

？「お呼びかな？茜殿…」

突然茜の後ろから太い声が聞こえて来た。

声が聞こえた方向を向くと…そこには…

茜「もしかして…麒麟様…？」

麒麟「はい…その通りでございます…」

茜「私に力を貸して！あいつを倒さなきゃ！」

麒麟「喜んで…」

麒麟がそう言うと、茜の体に入った。

そしたら…

茜「よし…」

そう言うと茜は持っている刀全てを取り出し、二本の刀に融合させる。

刀は黄色に輝いた。

そして衣玖に向かって走り出した。

衣「龍魚［龍宮の使い遊泳弾］！」

茜に気づいた衣玖は周囲に電撃弾を展開し、泳がせるように回す。

だが、茜は電撃弾を素速くかわし、衣玖の目の前へ…

そして…

茜「五神［麒麟飛翔］！」

茜は二本の刀を内側にし、衣玖を斬る瞬間…

二本の刀を外側に、上に解き放つように斬り上げた。

斬り上げと同時に茜は空高く飛び上がり、スッと着地した。

衣玖は斬られ、口から血を吐きながら倒れた。

そして、茜から麒麟が抜けた…

茜「ありがとう、麒麟様…」

ア「何とかなりましたネ…」

魔「そうだなぁ」

その頃…

優達は歩いて元凶を探していた。

優「ここら辺だな…」

霊「本当にここなんでしょうね…」

優「多分…ん？あそこに誰か…」

優の視線の先には桃が飾ってある帽子を被った少女が居た。

優「あいつだな…行ってくる…」

優は瞬間移動で少女の目の前まで近づいた。
突然目の前に優が現れた事により、少女は驚いた。

？「うわぁ？誰？」

優「地上の様々な異常気象…そして、神社の倒壊…全部お前がやった事だろ…」

？「えぇ、そうだけど？」

優「何者だお前…」

？「私は比那名居（ひなない）　天子（てんし）」

～続く～

第３４話　博麗神社倒壊の異変　その２（後書き）

ついに天子　戦！

天人ＶＳ人間…

果たして…

ではまた次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3392x/

超絶で最狂の三人が幻想入り

2012年1月13日02時45分発行